

# 巨 龍



特集「新世紀の希望」

平成19年 同窓会 名簿附

香川県立観音寺第一高等学校同窓会京阪神支部

# 巨 龍 教

揮毫 故 三野重和 京阪神支部会長

< 第十一号 >

観一高同窓会京阪神支部



## 表紙絵について

表紙絵は、本年も巨鼈二号以来毎号お世話になっている  
観一・六回卒の岩倉寿画伯（日本美術院会員・京都市立芸  
大名誉教授）のご好意により、描いて下さった「パンジー」  
の絵を掲げました。

---

制作：石川特殊特急製本株式会社

〒540-0014 大阪市中央区龍造寺町7番38号  
TEL.06-6762-5851(代) FAX.06-6764-4181

---

観音寺一高 同窓会

# 京阪神支部総会

平成18年11月11日（土）12：00～15：00  
於 徐園



司会 松田順子 幹事（左）



開会挨拶 細川利久 副幹事長



受付風景





守谷公男 会長挨拶



物故者慰霊  
永田 寛 副会長



同窓会本部  
(右) 松繁寿義 会長  
(左) 三宅昭二 副会長



同窓会担当 岡田千佳 先生



豊嶋知温 本校校長



岡山支部 玉井 徹 会長



東京支部 村上重明 副幹事長



衆議院議員 岡下信子 氏



高松支部代表 高橋昭成 氏



乾杯の音頭  
高井利一 副会長







司会交替 西庄俊三 幹事



会計決算報告 森 広志 幹事



観一16回代表挨拶 大西和明 幹事



観一10回代表挨拶 片桐 陽氏





特別出演 声楽家  
西岡たか子 氏  
伴奏 竹崎勝美 氏













54回~57回卒 学生



三中校歌

祝 観音寺一高同窓会  
京阪神支部総会



三女校歌

祝 京阪神支部総会







観一・1～8回卒



9～12回卒



13回卒以降



万歳三唱  
大西哲夫 常任理事



閉会の辞 宇都宮静子 副会長



# 観音寺第一高等学校 同窓会総会

平成 19 年 5 月 27 日(日) 14 : 00  
観音寺グランドホテル





平成19年度  
観音寺第一高等学校 同窓会総会



会則第五条の各種事業を行うために寄付くださった方々です。(平成十九年七月現在)

三中	・ 32回	高井 利一	観一	・ 8回	畠中 康行	観一	・ 11回	佐藤 弘
〃	・ 39回	高橋 嘉男	〃	・ 8回	藤田 正義	〃	・ 11回	村上美恵子
〃	・ 41回	真鍋 禮三	〃	・ 8回	安藤 進	〃	・ 12回	井川 満
〃	・ 44回	石山 良一	〃	・ 8回	木下 雅道	〃	・ 12回	森川 和則
三女	・ 36回	宇都宮静子	〃	・ 8回	細川 忠義	〃	・ 13回	岩津 真人
〃	・ 38回	伊勢 敦子	〃	・ 8回	三宅順二郎	〃	・ 13回	合田 文久
〃	・ 38回	荻田 幸江	〃	・ 8回	元木 芳孝	〃	・ 14回	大野 暢文
〃	・ 39回	伊丹マシミ	〃	・ 8回	矢野 一之	〃	・ 15回	佐伯伊之助
〃	・ 44回	岸部 正枝	〃	・ 8回	脇 剛司	〃	・ 16回	大西 和明
観一	・ 2回	三好敬一郎	〃	・ 9回	守谷 公男	〃	・ 16回	藤原 千春
〃	・ 3回	大西 玲子	〃	・ 9回	岡下 信子	〃	・ 17回	合田柳太郎
〃	・ 4回	田中 竜造	〃	・ 9回	西庄 俊三	〃	・ 17回	白石 憲二
〃	・ 5回	船江 重俊	〃	・ 10回	片桐 陽	〃	・ 17回	武田 憲司
〃	・ 6回	多田 康二	〃	・ 10回	高津 光雄	〃	・ 20回	多田 健治
〃	・ 7回	高城 正忠	〃	・ 10回	三宅 潔	〃	・ 26回	石川 武澄
〃	・ 7回	東 美千子	〃	・ 11回	合田 洋一			
〃	・ 8回	石川 文男	〃	・ 11回	小西 雄介			

目次

同窓会総会風景			
香川県立三豊中学校校歌			
香川県立三豊高等女学校校歌			
香川県立観音寺第一高等学校校歌			
ご挨拶	守谷 公男	6	
観一高同窓会会長就任のご挨拶	三宅 昭一	8	
母校の現況報告	豊嶋 知温	11	
「新世紀の希望」特集			
観一へのメッセージ	請川 昇	16	
次世代へのメッセージ(特に自然科学について)	藤田 廣志	19	
母校生徒へのメッセージ(舍手を克服して新しい医療に挑戦せよ)	眞鍋 禮三	30	
教員生活をふりかえって	田中 道雄	33	
がん治療一筋の院長	穴吹 義教	35	
気の医学 その五	齋藤 良夫	39	
エコロジー考 “退職後の田園生活”	大森 士郎	42	
随想	山下 好雄	45	
連載特集			
観音寺・三豊の風景(財田川・燧灘の落日など)	松川 進	52	
観音さんと京都の観音寺の話	脇 剛司	55	
追悼			
佐伯富先生を想う	植松 正	68	
故佐伯先生 恩賜賞・学士院賞			
受賞記念品を母校・同窓会本部に預ける	合田 英之	72	



父のこと、よもやま	.....	故田中照三氏次女 篠原 苑子	.....	75	衣笠に通う日々	.....	白石 憲一	.....	132
兄貴のこと	.....	田中 岑	.....	78	古本屋三十年 第五回	.....	中尾 隆夫	.....	134
エッセイ	.....		.....		ある映画監督	.....	多田 健治	.....	146
十二世紀ルネサンス(其の二)	.....	小林 多聞	.....	82	リハビリテーションの現場から	.....	小嶋 令子	.....	151
廣兄(ひろにい)さん	.....	合田 重隆	.....	89	文芸コーナー(漢詩・短歌・俳句)	.....		.....	
サヌキ豊浜ちようさ祭り	.....	合田 重隆	.....	91	漢詩	.....	高嶋 睦徳	.....	160
洞窟の仏	.....	東 忠	.....	94	五月	.....	河田 光子	.....	163
短歌にたどる書家の旅	.....	穴吹 義教	.....	97	十年後	.....	岩田美代子	.....	163
少年のころ	.....	高橋 寛	.....	105	蛩	.....	東 美千子	.....	164
郷土と共に生きた父	.....	宇都宮静子	.....	108	ふる里	.....	内海 善子	.....	164
余部鉄橋を見学して	.....	荻田 幸江	.....	112	言霊(ことだま)	.....	鈴木マチコ	.....	165
大平総理と現代中国の発展	.....	齋藤 文一	.....	114	日脚伸ぶ	.....	西原 ゆき	.....	165
新聞制作から鉛が消えた日	.....	小野 喬啓	.....	125	遍路	.....	清水 正子	.....	166
What? 「巨鼈」	.....	大西 啓介	.....	130	千早赤坂村	.....	藤田八重子	.....	166
	.....		.....		百千鳥(ももちどり)	.....	長野 美枝	.....	167

青信濃	田中千鶴子	167
ふるさと	三好 昭美	168
梅あかり	森 晴美	168
初音	富士田浩子	169
同窓会報告		
三三十九回卒業生同窓会の記	高橋 正澄	172
三四十回生（昭和十九年卒）の同窓会について	横山 照美	174
三中第四十三回・四十四回卒業生		
平成十九年同窓会報告	石原 敏夫	176
喜寿を祝う同窓会		
「はるけくも来たるものかな、そしてこれからも」	小野 賢治	179
三女三十六回卒同窓会	宇都宮静子	185

三女三十九回・四十回卒白桦での同窓会	安藤ふみ子	187
二八回十四回一泊旅行記	横山 計次	189
亥の子会 近江に春を惜しむ	三崎雄一郎	191
平成十九年関西観八会総会報告		
水郷と古き商家の町並の近江八幡にて		
関西観八会世話人一同		194
観一第九回（昭和三十三年卒）同窓会		
八月一日、琴参閣に集う。	西庄 俊三	197
五年ぶりの十回生の同窓会	竹崎 勝美	200
観一十五回同窓会	太田 和久	202
高校卒業後初めて同窓会に参加	中西 豊	207
観一同窓会東京支部『燧』（第32号）のご案内		209
あとがき		

# 香川県立三豊中学校校歌

堀沢 周安 作詞  
若狭万次郎 作曲

# 香川県立三豊高等女学校校歌

一、長瀾寄する燈灘

彩雲なびく巨龍山

海山遠く見渡して

聳え立ちたり我が校舎

三豊の平野草も木も

直なる中に顕れて

己が力を伸ばし行く

若き益荒雄茲にあり

二、財田川のさらさらと

流るる水を顧みて

吾等も断えず体を鍛へ

いよよ磨かん智を徳を

松風清き琴弾の

神の御前に額づけば

木の間の月は進むべき

道を照らして光あり

器にはしたがひながら巖をも

とほすは水のちからなりけり

この秋は風か雨かしらねども

けふのつとめに田草とるなり

敷島の大和錦に織りてこそ

からくれなゐの色もはえあれ

# 香川県立観音寺第一高等学校校歌

脇 太一 作詞

服部 正 作曲

一、青雲匂ひ 陽に映ゆる

さぬき山脈 仰ぎつつ

叡智のひとみ さわやかに

憧がれ強く 羽ばたきて

集へり生命 若きもの

我らに燃ゆる 希望あり

二、大瀬戸清き 新潮に

若き日の幸 歌ひつつ

智徳をみがき 身をきたへ

誠は篤き 友愛に

伝統花と 咲きかほる

我らに高き 矜持あり

三、財田の流れ 澄むほとり

文化豊かに 啓きつつ

真理をもとめ 澁刺と

理想に挙る 眉あげて

高邁自主の 道を往く

我らに重き 使命あり

## ご挨拶

観一高同窓会京阪神支部会長 守谷 公男



みなさまにおかれましては、ますますご健勝にてお過ごしのことと存じます。日頃は支部運営に絶大なるご支援を賜り、まことにありがとうございます。

本年は本部役員の改選期にあたり、四月二十九日開催されました理事会で本部新会長には副会長の三宅昭二（観一 二十八年卒）様がご就任されました事をご報告致します。又、松繁会長様には本部・支部運営の功労者としてご助言賜り盛大な支部総会運営が出来ました事をこの場をお借りしまして感謝申し上げます。

昨年度の総会は、十一月十一日（土）「徐園」で開催し多数のご来賓と百六十名を超える皆様のご参加を頂きました。

同窓会本部からは松繁会長・三宅副会長、東京支部からは村上副幹事長、岡山支部から玉井会長、高松支部から高橋代表、その上、岡下信子衆議院議員をお迎えし、さらに、豊嶋校長先生はじめ諸先生方がわざわざお越し頂き、お蔭様で田舎の話し言葉を聞きながら、楽しい同窓会となり有意義な一刻を過ごす事が出来ました。総会の当番幹

事は観一 十回・十六回の皆様でした。

本年の支部総会も「徐園」で十一月十日（土）に開催致します。

今後の支部運営につきましても総会参加者を増やし持続的發展のためには若い会員から多数の参加者が「来年も出よう」と感じてもらえるよう工夫する事だと思えます。皆様には何かとお手数ですがよろしくお願い申し上げます。

最後に母校のさらなる発展と同窓会会員皆様の一層のご多幸を心より祈念しご挨拶と致します。



## 会長就任のご挨拶

観一高同窓会会長 三宅 昭一



このたび観一高同窓会会長に選出されました観一第四回卒の三宅昭一です。浅学非才ですが、皆様方のご支援を頂き、歴史と伝統あるわが観一同窓会の発展に努力してゆきたいと存じています。どうぞよろしくお願い申し上げます。

松繁前会長には、豊かな教養と深い経験のもとに、六年間すぐれたリーダーシップを発揮され、同窓会のご指導を頂いて参りました。私はこの前会長のもとで、副会長として多くを学ばせて頂きましたこと、心から感謝しております。

かえりみますと、本部の組織改革から十三年経過しております。それ以前は総会といっても夏期に校舎を会場として数十名しか集まらず、若い人々はほとんど見られない状態が続いていました。会費の徴収もなく、新卒会員の入会金のみが運営資金となっていて、役員もどつやって決めたのか明確でないありさまでした。これではいけない。役員の選出母体である支部と、年次の組織づくりをと、会則改正の討議などで自覚めた人々の輪がどんどんと大きくなってゆきました。その途中では同窓会としての和やかな雰囲気は薄れ、各会合が荒々しい空気になった時期も

ありましたが、皆さんの英知と努力によって、同窓会本来の在るべき姿を取り戻したと思います。

理事会は執行機関、幹事会は決議機関とし、支部幹事・年次幹事をタテ系、ヨコ系としてそれぞれに選出しました。そして会員が自発的に会費を納入などが明確になりました。活性化に向けた工夫も採用されました。ちなみに総会の持ち方も次へ次へと引き継がれて、今年は十六回と二十九回の年次のお世話によって、会場のホテルいっばい三百五十名の盛況となりましたし、一口千円の年会費は、五、六九六口が納入され、会則の目的に則った活動が展開されていますことはご同慶の至りです。

現在考えられる課題は、支部・年次の組織強化と、来るべき百十周年への取り組みです。百周年では関西の皆様方にもことの外お世話になりましたが、はや七年が経過しました。百十周年には、『観一高同窓会百十周年』としての節目を祝うことについて、知恵とご意見を出し合って下さるようお願いします。

支部組織についても、もう少し充実させて頂きたい支部もありますが、年次についてはそれ以上に問題がありません。現在『年次幹事』を選出しているのは三十回卒までとなっています。今年の卒業生が五十八回卒ですから観一高卒で考えれば、若手層の約半分が未組織となっている訳です。ここを早く組織化したいものと考えます。

京阪神支部の総会には、ここ数年続けて出席させて頂いておりますが、三中・三女から壮・青の方々まで、和気あいあいと盛り上がっていて、同窓会のモデル的会合と感じ入っています。わけても観一卒業で、関西方面の大学在学中の若い会員を二十名程毎年招待して、舞台上で自己紹介してもらい、交流を深めているなど、すばらしい取り組みだと思えます。

こうした観一高同窓会の歴史の流れの中で感じますことは、同窓会運動の基本的考え方として、各会員の自主性を尊重しつつ、民主的な運営と、連帯の心を育てる ことではないかと思うわけです。

会内ではボスをつくらず、政党政派や宗教宗派にかたよらず、会としていつも中立の立場を通すことで、地位や名誉もなく、強くない立場の人々も安心して参加出来る同窓会でありたいと思います。

三中・三女・観一の卒業生は四万名を数えます。物故会員四千名を考えても、三万六千名の同窓生が、現在では国内外で活躍されています。学者・芸術家・経済人・ジャーナリスト・政治家等々、国際的にも有名な方々を頼もしく誇りに思うと共に、名もなく、しかし地域に貢献し、或は職場や家族を守って来た多くの男性・女性の先輩・後輩もおられます。これら全ての同窓の方々が、気兼ねなく人として対等平等の関係で集まれる『観一高同窓会』があつて、皆が連帯の中にいると感じる幸せの絆を大切にしたいものと思ひます。

これから先私は、与えられた任務に向かつて尽力してゆきたいと存じています。京阪神支部会員の皆さま、ご指導ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

## 母校の現況報告

香川県立観音寺第一高等学校長 豊嶋 知温



観音寺第一高等学校は、旧制三豊中学校創立以来百八年目、三豊高等女学校創立以来百一年目、統合された観音寺第一高等学校として五十九年目を歩んでおります。今年も輝く緑の樟樹の下、約千名の生徒たち（全日制普通科二十一クラス、理数科三クラス、定時制四クラス）が学び、励んでおります。昨年度は、昭和四十五年建築の体育館の耐震のための大規模改修工事が半年間にわたり行われました。そのため、卒業式は近くの市民会館で挙行いたしました。今は、昭和二十九年建築の旧体育館は老朽化が著しく人命第一、学校生活の安全のため八月から使用禁止し、一刻も早い建て替えを要望している所です。この旧体育館は、古さゆえ映画のロケにも使われ、同窓生にとりましては樟樹とともに強く懐かしさを感じるもののようなのです。

観一同窓会京阪神支部の皆様には、日頃、母校に一方ならぬご支援をいただき誠に有難うございます。昨年度は陸上部、新体操部、吹奏楽部、邦楽部に援助をいただきました。また同窓会育英基金より奨学金の給付を受けました。在校生の活動にご支援をいただき心より感謝申し上げます。去る五月二十八日には本校での生徒教養講座の講師として白石憲二様（観一十七回卒 朝日新聞大阪本社・立命館大学客員教授）をお招きして『変わるメディアの

現場から』と題して講演をいただきました。大先輩の活躍を間近に見ることで、在校生に大いに刺激になります。私は、平成十五年に本校に着任し、観一高在職五年目を迎えいよいよ最終の年度となります。その間、秋の同窓会には何度か出席させていただきありがとうございました。合田英之幹事長さん達のご尽力で京阪神支部同窓会が充実し盛況の様子を目の当たりにして、在校の生徒・職員は何等かの刺激を受け喜んでおります。また大学在学中の卒業者に対して温かいご配慮をいただいていることに深く感謝申し上げます。

さて、昨年度は「教育の話題」というには、あまりにも深刻な問題が次々と集中しておきました。学校や教育委員会という組織や制度に対して社会の信頼感が揺らいでおり、それは急激に変化するわが国の社会情況を表しているように思います。国においても、マスコミにあっても論議が盛んで、足早に制度改正がなされようとしています。教育基本法が改正されたのを受けて、学校教育法・教育免許法・地方教育行政法の改正等いわゆる教育関連三法案が成立しましたので、いろいろな意味で大きな影響を及ぼすと思われまます。「いじめ問題」はともかくとして、先ごろは履修問題やタウンミーティングでの「やらせ」などが報道され、学校や教育委員会、文科省の責任が追及されました。ただ、何故学校がそんなに責められなければならないのか、すべてのメディアが、ああもそろってあの難しい領域の教育問題を、同じような価値観、視点で報道できるのかという素朴な感想を持った人も多いと思います。法令遵守という点のみではそのとおりであるが、数字の上では義務教育化している現在の高校教育の実態は、多様で個性化が進んでおり、どの学校も生徒や地域の実態をふまえて特色作りに取り組んでいます。公立私立を問わず、学校現場や地域社会の現実を十分理解して、学校の自主性尊重や学習指導要領の弾力的運用など広い視野からの論議を望みたい。本音を出さないうで建前だけの論議では、問題の先送りや真の解決にはならないと思います。

高校教育は六十年前に始まった頃の社会状況と大きく変わった。近年、改革論議の中で指摘されることに、高等

学校のあり方、目標、性格というものが分かりづらいつらいということがあります。文部科学省は学習指導要領の見直しの審議の中で、それについて次の五点を挙げています。義務教育の成果の確実な定着、義務教育の上に道徳心や知識を高めていく。社会に主体的に参加する態度の育成、わが国の構成員として良識ある人間を育てる。自立した社会人として必要な態度を養う。社会における自分のあり方を考え、勤労を中心に社会人としての資質、気概を養う。職業生活に必要な知識・技術の修得。大学教育を受けるにあたっての基盤となる知識と教養の修得。一般社会は高校生にまず「市民として必要な基本能力」を求めているのです。

本校は今年度も、「きらめく香川の高校づくり」の一環として、学校独自プラン「観—ヒューマンフォスタープラン」と称する事業を行っており、生徒一人一人の能力・適性を伸ばす学習活動を展開し、進路指導の一層の充実を図るとともに、心豊かな人間性を高める教育に努めています。学習のモチベーションアップとして各種講座（生徒教養講座、職業選択のための進路講座、など）の充実、教員の指導力向上のため外部機関での研修、生徒の自主学習力向上のために早朝読書、樟樹セミナー、「Study Buddy」による個別指導。理数科を中心とした「プラクティカル サイエンス」プラン。地域と連携したボランティア体験活動。部活動へ外部講師の招聘（陸上、野球、新体操、バドミントン）などを主な内容とするものです。また、生徒からの授業評価、PTA実行委員や学校評議員からの評価をもらい授業改善や学校経営に生かすとともに、ホームページで公表しました。

この年度末の進学状況は、京都大学、大阪大学、名古屋大学などの国立大学合格者は昨年少し減って、一二五名でした。また慶応大学、早稲田大学、同志社大学、立命館大学など私立大学の合格者数は四二九名でした。

本校は部活動への参加率が高く、運動部も活発に活動しており、今年も県総合体育大会に三二五名が参加し、県下の高校の中で参加者数が最多でした。そして陸上部男子が十一年連続総合優勝・陸上部女子総合三位、アーチェ

リー部と山岳部が団体優勝して全国大会へ、弓道部団体男子が準優勝し四国大会へ、個人ではソフトテニス部が全国・四国大会へ、水泳部が四国大会へ、陸上部は四国大会を経て全国大会へ出場します。四国大会では陸上部男子が三年連続十回目の総合優勝、弓道部の個人優勝がありました。また野球部は新入部員が二十五名も入り総勢四十五名になって活気あふれる練習をしており、夏の大会では、一回戦は高松北高校、二回戦は坂出工業高校、三回戦は三本松高校に勝ち、ベストエイトになりましたが、続く準々決勝では坂出高校に惜敗しました。

学芸部では、吹奏楽部が今年も、県コンクールで高い水準の演奏をしました。四国大会へも出場しますが、全国大会へも期待しています。邦楽部は今年も県代表となり全国高校総合文化祭（島根県）に出場します。将棋同好会の一人名も全国総合文化祭に出場します。まさに文武両道の伝統が受け継がれ輝いていると思います。本校で学ぶ生徒たちは、長い歴史と伝統の中で形成された校風を肌で感じながら、新しい自己実現に挑戦し、日々励んでおります。

わが国では、今私たちは物が豊かで快適便利な生活にとっぷり浸かっています。このような中、物が優先され心が置き去りにされてゆくのでしょうか。この大きな波に日本人は飲み込まれて、光と影の入り混じる中において、現代社会は人・心もろとも激変している。まだその始まりなのか、先が見えない。大人が変わり、子供は影響を受けます。日本の社会は、今難しい局面にあると誰もが感じています。

時代の激しい動きに呼応するように高校教育は様々な改革が進められておりますが、生徒・保護者・地域社会から信頼される学校づくりが重要な課題であります。私たち教職員一同は、保護者や地域の方々、そして同窓生の皆様方のご協力をいただきながら、観一高の使命を常に自問しながら学校づくりに励んで行く所存でありますので、今後ともご協力・ご支援を賜りますようお願い申し上げます。最後になりましたが、同窓会の皆様の御健勝と御活躍をお祈りいたします。

「新世紀の希望」特集



# 観一へのメッセージ

三中・33回 請川 昇



観一とのえにし

同級生、故大井賞一・

合田實夫両兄の後継幹事

長合田英之氏の要請に応

えました。百周年記念の

際は、本部副会長、記念

誌編集部長を兼ねており、京阪神支部の各位の絶大なる

ご支援を頂き、大仕事を完遂出来ました事を、改めて深

謝致します。私は学徒動員で三年間出陣、敗戦後ゴース

トタウン化した廃墟に立ち竦すくんで、「軍国主義教育の結果

は、無残な焦土を残したに過ぎなかった」と慨嘆しまし

た。再建の道は教育立国以外にないと確信、拾った余生

を捧げる決心。所が追放令に触れ、髀肉の嘆を託ったも

のの半年余りで解除、採用され昭和二十一年三女(亡父

の勤務校)に赴任しました。二十四年三中・三女が合併

観一が誕生しました。爾来三十三年間勤務し母校で退職

しましたので、観一、一筋で教鞭を執った事になるとい

うゆかりが出来ました。

クラブ活動(卓球)の指導のため、日曜・祭日も返上

し学校の子でありましたので、観一と聞けば懐かしさが

先に立ちます。そういうわけで、親しさに甘えて多少の

妄言は許して頂ける事を心頼みとして提言します。

## 名実共に観一時代

本部会長も観一卒になりました。学校・同窓会が観一

に統一される事は、時宜を得たものと双手を挙げて歓迎

します。卒業者数、各界の要職を占める者が観一卒であ

る現状に鑑み、世代交替、活性化を計るべき秋でありま

す。『古い革袋代に新しい酒を盛る』様に芳醇な美酒の醸

成が期待されるのであります。

ここにも格差是正を

同窓会の一事業として、優秀在學生に奨学金を支給し、有望な人材を育成しているのは、適切な事であり誇りとする所であります。

反面、情熱・知力・体力を使い果たし、命を削る思いで教育に専心された旧職員については、その訃報の連絡さえ届かず、旧同僚の終ついの別れも適かなわず、不義理を重ねているというのが実状であります。何とか善処してもらいたいと思います。

夢ではない！ 甲子園への道

知人と会つと「百年以上の伝統を誇る観一が、甲子園へはまだかいな？」と問われるたびに「その内にな！」と口を濁している始末。文武兼備の伝統校であるから、堅忍持久・百戦錬磨に耐え、いつかその栄冠を獲得して

くれるものと期待しています。そういう事を契機として、全卒業生が協力一致後援し、愛校心が醸成されるものがあります。

罰他的思考よりも利他的思考を

教育再生が叫ばれている現在、教育者の免許証更新案等が俎上に乗っています。だが被教育者に就いては家庭教育論が再燃している程度で、被教育者対策意見は少数であります。

以前は教室で、私語が多かったが、今は静かだそうであります。理由はメールに夢中だからであります。それを見つくと「他人に迷惑もかけず、声も出さないから良いはないか」と嘯うそく。人は自分さえ良ければそれで良しとする。『自利的思考』が強い。生徒が非行に走るのには、『先生が悪い』『社会・政治が悪い』からという『罰他的思考』に帰してしまふ。非行の原因を他に転嫁しようとしている。人間は『自利』を考ふるより、『利他』を優先

し自分の利益はさておき、『利他』を先に実践すれば、利は必ず自分に還元して来る筈であります。

『損して得取れ』『急がば廻れ』

#### 集団生活で人間形成

最近中・高校生が奉仕活動に参加傾向にあると言う。結構な事で社会教育を体験する事になり有意義である。大震災時には自発的に救援に献身し、被害者から深謝されている事例が多くなった。しかし短時間の参加では不十分である。そこで高校三年間は集団生活が嘗れないものかと思っています。三中二十五回生までは東予地区から優秀生徒が入寮の上、地元の俊秀と切磋琢磨修学し大勢の傑物が続出したと仄聞している。百周年を機会に同窓生各位の浄財により、同窓会館が竣工。お蔭様で新一年生が合宿訓練で有意義に活用させて頂いています。思うに旧制高校生の活力の源は全寮制度に由来すると。全国から遊学の多感有能の俊英が、青春を謳歌し、人生論

に華を咲かせた文武兼備の集団生活により、基礎的学力・体力を鍛え、人格を陶冶、次世紀の飛翔に備え、応用力発揮可能な人材の養成にすばらしい効果があると思います。

最後になりましたが、母校の弥栄と卒業生各位のご活躍を祈念し、駄弁を弄しましたが、老いの繰り言とお許し頂き、他山の石ともなれば望外の幸せであります。次に処世術のご参考になればと、愛誦の山本有三氏の詩を引用します。

たった一度しかない人生を  
たった一人しかない自分を  
本当に生かさなかつたら  
人間生きて来た甲斐がないじゃないか

## 次世代へのメッセージ

(特に自然科学について)

三三・40回 藤田 廣志

「A」深遠な自然の仕組みと、それに対する人類の挑戦  
最近次々と“スーパー・コンピューター”と称する  
ものの登場で、どんなものでも結果が瞬時に、且正確に  
得られる事が報じられ、各国でその性能向上に軍事関係  
をも含めて懸命に努力している。勿論現在迄の各種デー  
ターの蓄積・整理は当然、古典力学的な方式のように明  
確な投擲コース、各種建造物の初期強度、耐震度、固有  
振動値などの結果についてのその威力は抜群で、加えて  
各種情報牽引と共に正に二十世紀後半以降の急速な文明  
の発展の中核とも言える存在である。

しかし、この“コンピューター”も本質的には“そ

るばん”とか“手動のタイガー計算器”などと同様、  
いわゆる計算機に過ぎない。従って、計算方式が確立し  
ていない場合は勿論、それに投入する過去のデータが  
不十分だったり、大きく変動したりすると、如何に優れ  
たコンピューターでも正確な予測は出来ないし、短期間  
の正確な値すら期待出来なくなる。データの少ない宇  
宙とか深海流と暖寒流の関係などは別としても、長期天  
気予報とか地震予測などに関してはしばしば我々を悩ま  
せている。即ち、色々の物より類似物を予測する能力は  
あるが、コンピューター自体には一般に予言性はなく、  
種々の諸因子を導入することによって或る意味で精度又  
は近似を上げる事は出来るが、真実の結論を得るにはま  
ず対象物の本質と、それをとり巻く諸条件を十分に入手  
する必要がある。

ここで一つの問題は、人類は自分の“五感”に頼り、  
それによって得られた情報を基に言葉という便利な符号  
の蓄積によって有史以前からすばらしい文明を築いて来

た。天文学、測量術、大型建造物など、岩石、土砂、木材などしかなかった材料の問題さえ除けば、現代に通用する進展を古くから遂げている。

これに対して、人間とは異なる生物の多くは全く異なる五感で行動しているものが大半ともいえる。例えば超音波を使用するイルカ、シャチおよび“こもり”など、紫外線中心の蜂、蝶その他の昆虫、赤外線中心の爬虫類（ふくろうなど）も含まれる可能性大）、地磁気の分布を中心に運動すると考えられている各種渡り鳥などの他、雲の如く群れをつくって行動している小型魚、むく鳥、帰巢反応の正確な鳥とか動物など、人間の五感では予想もつかない優れた機能性によって生活している。更に、地震の数日前より人家の近くに居た動物とか魚などが全くどこかへ避難する事実もあり、彼等は地震予知（例えば微弱な予振とか電波などへの感受性）能力を持っている可能性も否定出来ない。従って彼らの行動を我々人類の五感から理解しようとしても無理であり、自然の仕組

みの複雑さと深遠さには驚くばかり。勿論知能に優れた人類は自分の能力の限界を知り、それに代わる多くの手法を発案、それらの手法を用いて自分の五感を著しく発達させ、遂には個々の原子、電子の制御迄可能とし、現在地球上の生物の頂点に位置する迄に発展して来た。

この間、自然科学の発展には偉大な巨人の出現があり、古典力学の基礎を築いた“ニュートン”、素粒子には粒子と波動の二つの性質をもっている事を示した“ドブロイ”、相対性理論の“アインシュタイン”、量子の世界（原子の世界と言ってもよい）ではエネルギーは連続的には変化せず、不連続な値をとる事を基に量子力学を發展させた“シュレディンガー”、などなど非常に多くの人々の努力によって、我々は現在これら巨人の肩の上に乘って自然科学に接している。従って、一見すると、自然科学の重要点は殆どそれらの人々によって説明されたが如き錯覚を起こすが、実は彼らも自然の仕組みの説明に新しい提案と解釈を与えたのみで、例えば重力の原因、

原子核構造、互いに異なる原子間では容易にやりとりする電子が個々の原子ではクーロン力で自分のイオン核と作用しながら一定エネルギー、しかも飛び飛びのエネルギー軌道に分布していることなどは未だに明確な答えは得られていない。

これらの事は、上述の如く、人類は常に自分の五感で得た情報は理解し易いが、それより外れると仲々理解することが困難な事を意味する。人間自体、自然での創造物の一つである事を忘れて！この矛盾を少しでも助けるのは、専門分野の異なる人々との協力であろう。一つの山に登るには多くのルートがあるように、現在の科学は一つの専門分野からの探索だけでは到底理解出来ない事は、例えば星座も異なつた方向から眺めると全く違つた分布に観える事からも理解出来る。ドイツ最大の国立研究所マックス・プランク研究所の初代所長は新人職員を前にして「貴方達は文学を理解出来ますか？若しもそれが出来ないなれば立派な科学者にはなれない事を心に留

めておいて下さい。」と言われたのは有名で、全く異なる分野でありながら創造性は常に既存の知識にとらわれない事の大切さを示したものと言える。

先にこの種の同窓会誌で述べらせて頂いたように、近代科学が我が国に導入された時点で、各専門分野に分かれて受け入れられ、同一語がしばしば異分野では異なる日本語訳となり互いに共有の言葉を失い、そのために互いの分野が自己防衛的に傾き、ともすれば排他的になるのが「我が国はノーベル賞クラスの研究が育ち難い」と言われる土壌である事を思い出して欲しい。

近年、受験技術のみが重要視され、極端には「数学も記憶である」と迄言う人の居る事は、自ら自分の知識範囲、即ち視野と他分野との交流を阻害し、いわゆる「専門馬鹿」に終止する事になる。しかも、この傾向は小学・中学においてすら強くなっているのは憂えるべき事である。受験科目に縁遠い絵画とか工作、音楽などがそれに相当し、自分の将来を狭くするだけでなく、人間性を損

ない、時として自分の才能すら失うことにもなることに留意すべきである。

また、人類は非常な努力をして、この大地より百種以上の単一元素を取出す事に成功し、いわゆる周期律表を完成した。ところが、最近になって、誰もが予想もしなかった物質が次々と発見され、従来の理論の再検討が必要となつている。今まで十分判明してきたと考えていた単一元素のカーボンにサッカー・ボール状のフラーレンや、ナノチューブ、同じく単一元素で殆どの物質がその結晶核（結晶として原子が整然と配列する結晶の最小の大きさ）より小さくなると、結晶では全く予想も出来ない異常物性を示すアトム・クラスター。更に単一元素ではないが今迄絶縁体として使用してきた酸化物の中には一四〇Kという従来金属超伝導体でも高々三〇K程度と予想されていたものより遥かに高温で安価な液体窒素温度でも超伝導性を示す物質が発見されています。

以上の如く、自然科学にとって正に新しい時代の幕開

けとも言つべきで、ナノ尺度（原子尺度の十倍、1cmの一千万分の一）の加工も可能となりつつあり、自然科学の各分野で全く新しい発展が期待されています。

ここで大切なことは、自然科学には常に或る臨界の値が存在し、それを突破する事により、全く新しい世界が見えて来ることである。顕微鏡と医学などはその典型的な一例で光学顕微鏡の出現で菌の存在が、電子顕微鏡以下電顕の登場により各種ウイルスの実体が解明されて、医学、薬学は長足の進歩を遂げている。それと同時に、今は死の定義を脳死に迄逆戻る医学も、上記ナノ・サイエンス・テクノロジーによって各種人工臓器の創製が可能となり、輝かしい人類の文明、文化を迎える事も可能であろう。

かつて、世界の電顕の大家が必ずといってよいくらい訪問したフランス南部のツールス（コンコルドの製作でも有名な一大工業都市）にある国立電子工学研究所は世界の電顕のメッカと呼ばれ、膨大な予算と三百名を越

す研究員で、所長のジユブイ博士の指導のもと、あらゆる電顕研究が進展しており、ツールースで出来ない事はどの国でも、また何処でも到底不可能と神話の如く言われていた。これに対して、私たちは僅か十名程度のスタッフと日立製作所との共同研究で、予算もツールースの十分の一以下で、まず大阪万博の一九七〇年に二、〇〇〇kV（当時は通常電顕の加速電圧は僅か一〇〇kVまたはそれ以下）での実験結果を仏のグルノーブルの国際会議で発表。地元の新聞の第一面に大きく掲載。これに対してツールースのものは、やっと電顕の組み立てを終了したのみで、実験結果はもちろん、性能と実物観察についての発表は皆無でした。その二年後の一九七二年には我々は目的の三、〇〇〇kVで安定操作する事に成功して、目的の殆どすべての材料の物性を五kV、二、三〇〇kVの温度範囲で、しかも三気圧までの雰囲気（水蒸気もOK）で、通常普通の研究室で行っている殆どの条件下で広範な物質での物性の動的研究を行なうと同時に、

新しく発見した“電子チャンネリング”現象を用いて誰も予想もしなかった異種原子の固体内注入や、アモルファス化などの画期的効用を実現し、新しい試みでは常に経験させられる周囲からのそれまでの悲観説や否定説を全て解決して、三、〇〇〇kV級電顕の画期的効用を実証。その結果を見て六十台を越す五〇〇kV、一、二五〇kVの高電圧電顕が各国に設置された事は特筆すべきことである。これに対して、上述のツールースでは一九七二年以降に二、〇〇〇kV近く、一九七四年に二、四〇〇kVでの数枚の写真が発表されたのみで、遂に三、〇〇〇kVの目的値には到達できず、このプロジェクトを放棄している。これに対して大阪大学の我々の三、〇〇〇kV一号機は約三五年間も世界記録を保ち、今では二号機の三、五〇〇kVにその地位をゆずってはいるが、現在でも二、〇〇〇kVで稼動している。通常の一〇〇kV級電顕の償却年限が約十年である事を考えると、上記の稼働率はその基本設計が如何に革新的であったかを



示す驚異的なもので、現在も二台とも安定に実験に供されている。この他、大阪大学の同センターでは、今迄に透過型電顕の殆ど全てのチャンピオン・データ（例えばダイヤモンドの原子構造など）を記録しており、英の“ブリタニカ”やUSAの“アメリカカーナー”などの百科事典にも掲載されている。これらの事実は、独のジ・メンズ会社で一九三一年に製品化された電顕に対して、一九三九年にやっとその研究が開始された日本の電顕が世界の最先端に躍り出たことを意味し、久しく日本製の透過型電顕が世界の七、八割を占め、阪大の三、五〇〇kV電顕を頂点として我が国が電顕のメッカと言われ、現在自然科学のナノ・テクノロジーに強力な研究手段として恵まれた環境にある。

本来材料物性が専門の私は、X線顕微法から電顕が自分の研究に最適と考えて研究手段として選んだので、電顕自体の設計・製作は全くの素人であったにも拘らず、上記プロジェクトの中心として活躍出来たのは、第一に

“人の和”（優秀な良き友人、会社のスタッフ、研究員）  
第二に、“天の声”（当時大学紛争で先輩のプロジェクトの殆どが放棄されたこと）、および第三に“地の利”（阪大には菊池、菅田、深井先生らの過去の活躍があり、知名度の高かったこと）に恵まれたことであつた。その半面、私自身が素人だつたが故に、既存の方式とか考え方にとらわれずに行動出来たのは、記述の如く多くの経験と他分野の人々との接触が多かつたことも大きな原因と考えられる。

「B」筆者の研究者としての軌

ここで参考に私の歩んだ研究で経験したことについて述べてみたい。

私の場合、中学時代は川原先生と優秀な友人岡田君のお陰で数学に興味をもち、特に補助線一本で一挙に解決するばかりか、幾つかの解法のある幾何学に夢中になり、その後の私の人生に大きな役割を果たすこととなる。その

後で、必ずしも自ら望んだ徳島工専（現・徳島大学工学部）の機械工学科ではなかったが、各種工作機械の作業は勿論、多くの実際の設計と組立および製作のための部品の製図、力の伝達を中心とした機構学、真空と圧縮空気を利用した製品の自動製法などを強く叩き込まれた。この事が皮肉にも後述のその後の私の人生の支えとなったのは非常に幸運であった。更に私にとって重要であったことは、終戦と共に、焼け跡に何もなかったこともあり、工専にも普通の高等学校並みに哲学、経済学などの導入の他、基礎物理の充実に重点が置かれたことであった。特にこの中で、長期間自分の選べる学問に飢えていた我々は、哲学では教官が若かったことも刺激となり、多くの共鳴者共々先生をやり込めてやろうと必死で焼け残りの哲学書を集め、年代に無関係にアリストテレス、カント、コント、デカルトからプラグマティズム、日本では京大の西田哲学の“絶対の無”と岩波の「哲学ノート」など、手当たり次第に読みふけり、それぞれにつ

いて自分の感想やら意見をメモしつつ、春、夏の休暇にも実家に帰らず、親父は心配して“あいつは共産主義に走ったのではないか？”と近隣の人々に話していたとの事でした。

これら哲学書の中で特に印象に残っているのは、或る科学哲学序説の中で、「物質には不思議な国のアリスの如く、“私を食べて下さい”とは書いていない」、「アインスタインも単に時間という符号を導入したに過ぎない」という二文句でした。それと同時に、上述の大思想家たちの記述を読むにつけ、人類の創造性の深遠さと偉大さに圧倒されると同時に、自分自身も体の中で今迄にない大きな変化の起こりつつある事を何となく感じることが出来ました。

そのような時、徳島工専には爆撃を逃れた結晶解析の横瀬先生の研究室が焼け野原の中にボツンと残っていました。許可されて私自身も先生の研究を経験することが出来ました。先生の御研究は鉄（Fe）の結晶で、低

温では磁化し易く且磁気を持ち強度も高いのが次第に温度を上げて行くと原子配列が異なり（相変態と呼ぶ）磁気を失うと同時に軟らかくなる現象でした。その理由をお尋ねすると、“現在でも仲々明確な結論が得られていない”とのこと。そこで、“ではそれを私の卒業研究

課題に戴けませんか？”と申し出たところ、快く“一生懸命考えてもらえ”と許可して下さいました。学校の図書は丸焼けで、新しい文献も入手困難でしたが、試行錯誤の結果、遂に鉄の原子を全て球状（化学の本にもそのように表示してある）と考えると“配列が熱振動で変化することはない”との結論に到達。例えば、金平糖の如く尖んがった結合力の強い角のようなものを各原子が対称的に持っているのではないか（ECA energy concentration axes と仮称）と考えると、何とか説明可能である事を記述して提出した。この私の最初の卒業論文は横瀬先生が他の物理関係の先生方にも見せ、“非常に面白い考えである。君はしかるべき優秀な大学へ行って自

分の説を実証すべきである”との評価を得ました。この時初めて、自分には記憶力は不得手だったが、上述の哲学勉強のお陰で、他人に負けない創造力のある自分の能力を見出し始めた。

現在、記憶力中心のテストで、受験技術に優れた者が小さい時から高く評価される世の中ですが、何かを見て疑問を感じ、それに対する対案が思い付くならば、その人には豊かな“創造力”のある事の印であり、その特徴を伸ばすことに努力すべきでしょう。

このように一つ脱皮して帰省してみると、家庭の事情は一変し、長男が倒れ、“私が成り上がりの長男として家業を継げ”との事。その時の父親は“息子は大学に行くこと決して家に帰って来ないから、大学進学は許可しない。”とのこと。その後、二年間の間に、母親と伯父の協力で、同郷の岡田実先生（後に阪大総長となる）が新しい教室を設立したのを機会に私のことを話したところ一度世話してみましようとのこと。飛び上がって喜び、母

親と計画して、父の留守の時に家出同様に上阪。岡田先生の教室の仮眠室を借りて自炊を開始。昭和二十三年（一九四八年）のことであった。

この時、私にとって正に“天の声”であったのは、戦時中全く文通のなかった諸外国の文献が東大、東北大を通じて入荷し始めたことで、関西ではこれに対応して、有名な本多光太郎先生の直弟子の西山善次先生と、京大一の秀才といわれた高村仁一先生が中心となり、丁度一九四八年、“物理冶金談話会”と名付けた会が始まり、大学・企業をはじめ、当時駿優と呼ばれた研究の第一戦級が一堂に集まり、自らの研究発表と新しい文献の紹介を開始した。この新しい学問の中、結晶中の原子の乱れ、特に線上の“転位”と呼ばれる格子欠陥に関する“転位論”が最重要点課題となった。このように全く新しい学問は、既存知識で長年過ごされて来た先輩の先生方には理解し難く、一般に我々若手の方が早くその本質を理解することが出来る。

後輩の皆さんも、このようなチャンスは若手にとつては正に“天の声”であり、新しい学問は若手に対する天の恵みであり、是非とも挑戦する勇氣をもつて欲しい。その結果として、新しい科学の世界に溶け込めるだけでなく、予想もしない自分の才能を見出せるかも知れないことを忘れないで。

一九四九年に岡田先生のコメントで阪大冶金工学科に入学しましたが、記述の如く通常の学生より二年後れている関係上、対象は少なくとも二年以上年長の教授、教官、大学院の人々に焦点を合わせ、それらの先輩と十分討論できるよう必死に文献を調べ、特に“転位論”については各所に出掛けて原文の文献に直接接する努力をしました。この事が、前述の西山、高村両先生に認められ、その後も大いに元気付けて下さり、大学卒論は西山教授（大阪産業科学研究所）で行なうこととなり、先生を始めスタッフの皆さんも殆ど大学の理学部卒の人々で、いわゆる物理屋さんの考え方を十二分に教え込まれると

同時に、X線回析を経て電子顕微鏡に接した（一九五一年）のが私にとっては上述の如く以後の運命を決める事となりました。その後、五十編近くの論文の中の“subgrain grouping”及び“subgrain coalescence”という論文が諸外国でも注目されたのを機会に博士論文を研究室で最も早く提出した関係上、他人とのバランスでUSAの招待に特別研究生として一九五八年にUSAの四発の軍用機コンステレーションで渡米する事となる。会話の練習も全くしていなかったので苦労しましたが、お陰で今日の日本的英語をやっと話せるようになったのはそのお陰とも考えられる。

帰国後、一九六三年より四年間、当時の科学技術庁金属材料研究所で橋本宇一所長が世界一の電顕を製造したいのと要求があり、この方も私が選ばれ（或る意味では研究室のバランス上の処置）、当時ツールズを始め、世界中の電顕製作者は多段加速器の方式が判らず苦労していました。国内では鳥津製作所が協力してくれること

となりましたが、私のような素人が出来る筈がないと専門家たちは勿論、研究所内でも協力者は出て来ず、自分の力のみを信じて電顕の基本から実体で経験し、従来の常識とは逆に電極間を半分以下にするなどの大改革をやり、既に一九六五年に五〇〇kV電顕でこの会誌にも書いたように世界に先駆けてその威力を発見できました。その結果に基づいて、橋本所長も大いに気をよくして、科学技術庁の研究所が、つくば地区に移転するのを機会に世界の“電顕センター”を完成したらと元気づけられ、三、〇〇〇kV電顕の計画書を一九六六年に作製。この間、四年間でSMH・5Aとその改良のSMH・5Bの二台の五〇〇kV電顕を軌道に乗せ、多くの結果を発表した後、母校の阪大に帰ることとなり、この計画は上述の如く阪大で完成することとなりました。

「C」むすび

ここで最後に後輩の皆さんにコメントするとすれば、

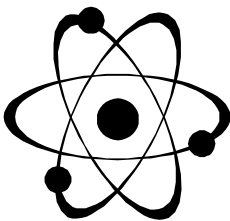
何ごとによらず、既存の知識にとらわれずに必ず疑問を持ち、自分が納得出来るか否かを確かめる。他人と同じことをやるな！必ず自分の新しい考えを付加すること。基礎知識は高等学校で終了する筈だから、それ迄に出来得る限り多くのことに接し、出来れば学んでおくこと（私の場合は機械設計が人生を変えてくれた）。約十年に一度、新しい学問が生まれてくる。この時、年配の人は既存の知識が邪魔をして仲々その新しい学問に入っていけない。この時、若い皆さんの飛躍する大きいチャンス（私の時は“転位論”が私を助けてくれた）。自分が直感的に新しい考え方を持った場合、如何なる妨害に会うとも自分の信念を貫く根性をもち、その実証に人生を掛ける覚悟をもつこと。その考えが大勢の常識より外れれば外れる程その妨害は強くなる事を覚悟して！最近よく言われる文献の真の価値は、丁度時流に乗ったトピックスでは引用度は高いが、十年先を考えた研究とか、競争相手のいない分野は如何にすぐれていても

発表当時の評価は高くない事に留意すべきである。繰返すが、既存の知識はしばしば創造性の邪魔になる。

終わりに後輩の皆さんが世界をリードする科学立国の我が国の旗手として、資源のない我が国で頭脳という無限の可能性を存分に発揮されることを心より祈念して居ます。

目下体調不良につき乱文になったと思いますが、判読願えれば幸いです。

（日本学士院会員・大阪大学名誉教授）



## 母校生徒へのメッセージ

(苦手を克服して新しい医療に挑戦せよ)

三・中・41回 眞鍋 禮三

かつての高校生、即ち、旧制中学生も入学時、校長先生から「少年よ大志を抱け」というクラーク博士の有名な言葉を聴かされました。この言葉は昭和十五年に三豊中学に入学した私達の世代の人達にも強烈な印象を与えていましたが、当時は第二次世界大戦開始の一年前で、日中戦争の最中であつたことから「大志」の意味が「理想の探求」から「世界制覇の実現」に置き換えられ、「男子の理想は軍人になって未は大将・元帥を目指せ」と励まされ、優秀な生徒はこぞつて陸軍幼年学校や士官学校あるいは海軍兵学校等を目指し、多くの級友達が入学して行つたのです。私は生来の怠け者で、お世辞にも優秀

な生徒とは云えず、特に教練は苦手で、配属将校から劣等生の烙印を押されてきました。偶々、父が医者で姉も軍医と結婚していたためか、「精々親の後を継いで医者にもなれば、軍医としてお国のお役に立つかもしれない」と陰口をたたかれていました。しかし、医者になるのも並大抵ではなく、旧制高校・大学医学部という狭き門を潜らなければ達せられない夢のような話であつたのも事実でした。

中学五年生(今の高校二年生)の時、五年生全員が学徒動員され、高松の寮に收容されて毎日宇高連絡船で対岸の玉野市にあつた三井造船所まで運ばれ、当時最新鋭の改A型輸送船(一万トン級)の建造のお手伝いをさせられました。従つて、この一年間は全く授業も試験もなかつたので、卒業も進学も全て無試験のまま、四年生までの成績のみで半ば強制的に進学校を割り当てられ、私のように成績不良のくせに医者になるための旧制高校などを高望みして不合格になつた者は外地(当時の満州、



台湾、朝鮮)の専門学校に流されました。私は朝鮮の専門学校に行かされましたが、四ヶ月もしないうちに終戦となり、主客転倒した朝鮮から命からがら逃げ帰りました。奇しくも引き上げ船が難破して玄海灘を漂流していた時、たまたま通りかかった満州からの引き上げ船が学徒動員中に私等が造っていた改A型輸送船で、それに助けられたことは何かの因縁ではなからうかと考えています。帰国翌年三月に再び旧制高校を受験しましたが、敵性語として殆ど勉強しなかった英語の試験に失敗して不合格となりました。恐らく私のような生徒が何人もいたために、三中にも補修学級が出来、小林先生が担任として英語の特訓をして下さいました。お蔭様で翌年には旧制松山高校に入学することができたのです。

しかし入学したものの英語は相変わらず苦手で、いつも低空飛行を続けておりました。これに対してドイツ語は入学者全員が同じスタート台から習い始めましたので、これに専念しようと考え、週八時間という過酷な授業に

挑戦しました。お蔭で松山高校卒業時には英語よりもドイツ語の方が得意になっていました。偶々、この年は新制大学への移行の年で、旧制大学としては最後の入試とあって国立大学の医学部は全て五、六倍の競争率となっており、入試科目も数学・物理・化学・生物に二ヶ国語の外国語が必須科目となっていました。何故か大阪大学のみが一ヶ国語でよいことになっていたので、私は何のためらいもなく大阪大学を受験し、外国語にはドイツ語を選んだ甲斐あって、無事合格できたのです。しかも、当時の医学部の講義で使われる外国語はドイツ語が主で、英語は殆ど使われませんでしたので、私は大いに助かりましたが、それが逆に私の英語に対する苦手意識を生涯になうことになったのかも知れません。

その後は順調に阪大を卒業し、大学院も終了して、阪大眼科学教室に入局する事が出来ました。昭和三十八年にはドイツのミュンヘン大学に留学し、昭和四十四年には苦手な英語を国語としているボストンの眼研究所に留

学して、どうにか英語に対する苦手意識を克服したかと思いきや、昭和四十九年、阪大医学部教授になった後にも苦手意識は残っており、今も克服する努力を続けているところです。若い諸君等に対しては「私のように苦手を持つていても、希望を持ち、努力さえすれば、夢は叶えられるものだ」と云うことにしています。

平成三年三月末で大阪大学医学部教授を停年退官し、その後は名誉教授として、私立病院の院長や国立病院機構大阪医療センター附属視能訓練学院の非常勤講師などをしながら、医療関係の仕事に携わつて来たお蔭で、私は新世紀になって医療に対する考え方が大きく変わってきたことを実感しています。かつての医療は病気の治療のみを目的として参りましたので、正しい治療をしても治癒しない病気や、病気そのものは治癒しても後遺症が残った場合などでは、患者さんを医療の場から福祉の場に移して来ましたが、現在では「福祉こそ医療の目指すべき究極の目標である」といわれるようになっていきます。

即ち、病気や障害のために、患者さんの生活の質（QOL）が低下しているのを如何に向上させるかということが求められるようになって来たのです。昔は「医者が手放しや坊主が拾う」という駄洒落があったように、医療が医師と看護師だけで成り立っていたことを示すもので、病気が治癒しない場合は死んで坊主の厄介になるしか考えられなかつた時代の医療です。

医療の目的が患者のQOLの向上にあるとすれば、病気の治療などは現在の医療のほんの一部に過ぎず、従つて、医師や看護師が担っている役割も医療の一部に過ぎないことになってしまったのです。

それでは医師・看護師の他にどのような医療従事者がいるのでしょうか？次にその一部を紹介致します。即ち、  
歯科医師・薬剤師・保健師・助産師・准看護師・診療放射線技師・臨床検査技師・衛生検査技師・理学療法士・作業療法士・視能訓練士・言語聴覚視・臨床工学技師・義肢装具士・救急救命士・歯科衛生士・歯科技工士・あ

ん摩マツサージ指圧師・はり師・きゅう師・柔道整復師  
などであり、全て高校卒で入学資格が得られるコ・メデ  
イカルスクールで養成されています。

かつての高校生にとって医療従事者になるチャンスは  
狭き門であったようですが新世紀の医療分野は大きく門  
戸を開いて諸君の挑戦を待っています。一つや二つの苦  
手科目は必ず克服出来ますので、高齢者社会を迎えた新  
世紀の医療スタッフを目指して挑戦して下さい。

(大阪大学医学部名誉教授)



## 教員生活をふりかえって

観一・19回 田中 道雄

前回大阪府の高校全般について書いたので、今回は自  
分の教員生活を振り返ってみたい。

私は昭和四十七年に大阪府立和泉工業高校に数学の教  
員として赴任した。この高校は団塊世代の高校入学に合  
わせて、創立された学校の一つで、工業振興にあわせ、  
当初は優秀な生徒が入学していたそうだが、大学進学率  
が上がる中で、普通科志望の傾向が強くなり、だんだん  
学力レベルが下がっていた。工業高校なのに数学ができ  
ない生徒が多かった。生徒の質の低下と工業専門科目の  
教員の力が強く、それになじめないこともあって、二年  
で転動した。

転動したのは、新設の藤井寺高校だった。開校の直前

にオイルショックで資材が値上がりし、建築工事が遅れ、学校が使用できるようになったのは四月一日で、入学試験や入学式は校外で行った。開校当時教員が少なく、スポーツ経験がない私が野球部の顧問を引き受けた。私より年上の先生が転勤する中で、開校時から学校の事情をよく知っていることで転勤できず、結局十八年間藤井寺高校にいた。この間校内での様々の仕事をし、就職の求人では色々な会社を回ったりもした。

藤井寺高校に開校当時からいたことで、色々な思い出がある。一つに組合の分裂がある。「連合」への加盟を巡って日教組から「全教」が分裂し、大阪の教員組合も分裂した。大阪は日教組系と全教系がほぼ同じ勢力となっているが、高校では日教組系は少数で現在私は日教組系に属している。ただこの後、両組合とも組合員を減らし、当局の施策に対抗する力を弱めることになった。

平成四年に山本高校に転動した。昭和三年に旧制女子校として創立され、戦後共学となったが、今でも女子生

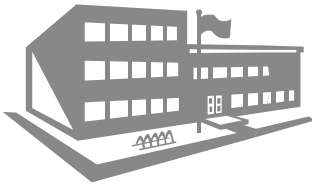
徒が多い。今は転勤のサイクルが短くなり、長く同一校にいる教員は少ないが、私は十六年目になっている。この間に校舎の新改築行われ、工事のために教室や職員室の移動がたびたびおこなわれた。今工事も終わり、今年十一月に八十周年行事を行うことになっている。

今学校を巡る状況は大きく変わっている。親が共働きする家庭が増え、離婚等で片親の家庭や、外国籍の生徒も増えている。親が子供のしつけや教育にかかわる機会が少なく、従来家庭で行われるべきことを学校が担わざるをえない。一方で学校のかかわる事件が多発し、権利意識が強まり、学校に対する苦情が増えている。

生徒数が減少し、高校の統廃合が行われているが、大学や専門学校も生徒の減少に伴って、色々な施策で生徒集めを行っている。生徒受けのする学部学科を造ったり、授業料の一部免除を行ったりしている。ただ生徒減少はどうしようもなく、いづれ大学・短大・専門学校の廃校が相次ぐことになるだろう。

一方で政治が学校を大きく変えようとしている。教育基本法が改正され、教育三法改正案が国会で審議されている。(印刷される頃は成立している可能性が高い)。

私ももう少しで定年だが、団塊世代の退職で教員が大きく入れ替わる。それによって学校、教育がどうかわるか、予想できない。



## がん治療一筋の院長

三中・44回 穴吹 義教

東温市と道路一つ隔てたところへ、四国がんセンターが引越して来た。堀の内では、少し縁遠い想いだっただが、目と鼻の先になると、俄に親近感が湧いてくる。

これまでに、高嶋成光院長に診察していただいたことはないが、会って話を聞く機会は何度かある。

「がん」は誰でも罹疾する可能性がある、と高嶋院長は説く。その道の権威のことばだから、ついついその気になって仕舞う。伺った話を請売りするわけではないが、今日の四国がんセンターの基礎固めに尽して来た高嶋さんの半生を披露させていただくことにした。

高嶋さんは、今年六十一才。特にこれといった趣味もない。唯一の趣味だった磯釣りも、十年前に竿を折り、

仕事一途の道を邁進して来た。

まず、プロフィールの紹介をしておく。

昭和十八年、香川県観音寺市に生れた。私とは同郷である。岡山大学医学部を昭和四十三年に卒業。

卒業と同時に高松病院で心臓外科の見習いを始めたが、二年後に国立松山病院（現四国がんセンター）転任。以後三十六年間に亘り、がんとの闘いに脇目も振らず精進してきた。

普通の医師であれば、インターン期間が終れば、そそくさ母校へ帰り、担任教授の指導のもとに、博士号を得るのが常道だが、高嶋さんはその道を辿らなかった。母校の門をくぐらず、松山病院に留まったまま、六年後みごとに博士号を取得したのである。

どちらかといえば、易を避けて棘の道を選んだわけだが、この一風かわつた亜流とも言える道を選んだのは、当院、院長だった三木直二氏のすすめに感動したことにほかならない。

「これからは癌が外科医の主領域を占めるのは、歴然としている。ここに留まって癌に専攻してみてもどうか」として、院長の情熱と真摯な話に傾聴せざるを得なかった。

今日の高嶋さんがあるのは、道の選択を誤らなかったことの証左にほかならない。

話は遡るが、医師に憧れるようになった動機は、親戚の外科医にあった、と聞く。

口数少なく、治療に専念しているその姿に惹かれた。生来無口な高嶋さんは、「喋らなくても済むような医者の仕事であれば、なんとか勤まるのではないか」と独り合点して、自分なりの未来像を描いていた。

ところが、大学受験を目前にして、思いがけない障壁が立ち上がった。医学部といえば、学資が一寸やそつとのものでは済まない。サラリーマンだった親父が定年退職になったばかりで、脛を齧る相談を口に出すわけに



はゆかない。さりとて医師の夢をふいにすることも忍びえなかった。思案の挙句に、えい儘よ、と六年間の学資を自分で稼ごうと思いついた。

この選択も誤ったものではなかった。入学すると同時に、アルバイト先を家庭教師に求めた。岡山では、学生の家庭教師に対して市民の眼は温かかった。苦学生めいたあくせくした生活だったのか、と思うが、それほどもなかったようだ。

高校時代から親しんできたバレーボールにも時間を割いて練習できた。大学対抗のバレーでは、栄えの優勝を克ち取ることができたほどである。

「田舎秀才」などと陰口をたたく学友を尻目に、学業にも退けをとらなかつた。

ここまで語れば、如何にも秀才めいた人物像になるが、冷たいタイプではない。四千人近い女性患者に親しまれ信頼されてきた実績がある。

若い医師の頃、こんな経験がある。

尊敬する三木院長から、数多くの教訓を得たが、なかでも、患者に接する態度のあり方に関しては、いまでも忘れられない。

「医師は患者の目線に立つべし」

これが院長の指導理念だった。簡単な言葉であり、理屈では解っているものの、いざ実践になると、かなりの意識革命が必要になる。

注意されるまでは、気が付かなかつた。病気に關しては、医師は患者よりも数段階優れた知識も経験もある、と自負して、患者に学ぶ、などという発想なり、姿勢なりは毛頭持ち合わせていなかった。

「患者さんは、君よりも年令的にも世事にも長しているのだ。そういう認識の目線で対応すべきだ……」

諭されてみて、目から鱗の落ちる思いがしたそうだ。

三木院長の見識も卓抜だが、それを素直に受け留めて、実行に移した高嶋さんも立派である。そうしてこう述懐している。

「お蔭で患者さんから、いろいろ教わることができました」

ビジネス界でいうマーケティングそのものの姿勢を医師に求める先鞭にほかならない、と私は思う。

（上に向かつては憚らず直言する竹を割つたような性格で、部下に対しては細部まで気配りの行き届いた人物）

これが三木院長に対する周囲の評であるが、私にはこの師ありてこそ、「この弟子あり」という言葉が脳裏に浮かんでくる。

平成九年、高嶋さんは五十三才の若さで、院長に推挙された。六十才で院長というのが、世の相場らしいが、異例の抜擢であった。それだけ囑望されたわけである。

住いが病院の構内にあるので、院内に居るのか自宅にいるのか、識別がつかないようだが、

「こういふ生活を長年続けているので、妻には苦勞ばかりかけています」

自身を安ずるよりも、奥さんを労うことばが洩れてくる。思いやりのある温かい人柄である。

仕事には、ストレスが付きものだ。無趣味の唯一の解消策は、温泉入浴だ、とか。時折り、東温市内の温泉にリラックスしているそうだ。

「近くでないと、いつ何時、患者さんの対応に呼び出されるのか知れないので、遠出は禁物です」

以前より温泉が近くなった。  
責任感が人一倍強いし、質実剛健を地でゆく人である。この方ならば全幅の信頼を寄せても、その期待に応えてくれる。

院長のポストに就いていながら、自ら手を下して寸暇を惜しまず治療に専念している姿には、頭が下がるばかりである。

気になる患者には、夕食後も人知れず見廻っている。凡そ世の常識では計りかねる院長像である。

「速く、苦痛なく、安く、安全に」がんを治そう、と

スローガンを掲げているが、これからも着実に実践してゆくうえでは、なんといつても、高嶋さんのご自分の健康こそ第一である。呉々もご自愛されますよう、老婆心ながら祈念する。



## 気の医学 その五

観一・13回 齊藤 良夫

### (1) 気とは何か

気とは生命エネルギーである。目に見えず直接その量の測定はできないので間接的に元気さや健康状態によりうかがうより仕方がない。気は電気とよく似ており、手のひらの上のせて見ることができないが、電気はテレビ、電灯のつくことよりその存在を疑う人はいない。しかし気が使われている単語はたくさんあり、昔から気の内容は信じられていたのである。現代科学のもとでは科学的に証明されないものは、信用できないとされ、気の医学は窓際におかれていた。しかしながら光でも人が見えるものは可視光線の部分のみで、たかだか二百年前までは赤外線、紫外線、電磁波の存在は知られていなかった

た。気もいずれ、再発見されることを信じている。気も電氣と同じで電圧（ボルト）、電流（アンペア）、電力（ワット）、抵抗（オーム）の概念を使うと理解しやすい。気の質（ボルト）と量（アンペア）によって、又患者の抵抗により気の流れ具合が変わり、治療効果に差がでるからである。気が強い、弱い、荒い、気高いはそれぞれ量と質を表している。WHOの健康の定義に 身体的 精神的 社会的 靈的に健全な状態とあるが、これらに氣を通すためには気は量だけでなく、より繊細な質の高い氣でなければ抵抗にあい、氣が通らない。質の低い氣ならば身体の部分にしか作用しない。現代医学は病氣を唯物論の立場よりみているので氣についての理解がないため、身体レベルにしか作用を及ぼすことができなくて、全人的な治療になっていないので患者の不満が多い。最近では精神的、靈的部分への治療も大切であるとの認識がひろまりつつあるのは明るいきざしである。唯物論のみでは心を癒せないからである。勿論、現代医学の医師

にもこの部分の大切さに気づき、心のケアに取組んでおられる医師も存在するが、少数派である。

## （２）病氣の本質

病氣は『氣が病む』と書くように、生命エネルギーに異常をきたしていることである。現代医学からみれば遺伝、感染、免疫、アレルギー、腫瘍、加齢、老化、心身症、生活、社会、環境、気候、中毒、外傷、等々のたくさん原因に分類されている。現代医学の診断技術及び治療により克服された病氣も多いが、病氣の種類は増殖をつづけ、患者数はへらない。病氣の本質は何か、根本原因は何かということが解明されなければ前途は暗い。それでもいろんな病氣が治るようになっていくと、益々高齢者がふえていく。年齢構成で高齢者の方が多くなる逆ピラミッドもありうるのである。しかも、認知症がふえると医療費、マンパワーは空恐ろしくなる。元氣な高齢化社会で、医療コストを抑制する為には、氣の医学を

進めるより他はないと思う。

さて生命エネルギーの異常はいろんな無理からきてい  
ると考える。無理は生命エネルギーを消耗させる。いわ  
ゆる『がんばり』『がまん』でストレスをためすぎて発病  
にいたる場合、衛生観念の欠如による場合、無知による  
場合、いずれにしる仏教的に言えば無明より発するのが  
根本と考える。これはWHOの定義のどれもがその機能  
を發揮せずに暗闇に沈んでいるからである。この部分に  
気があるのと病気は消えていく。ここに気があるため  
には気のエネルギーが相当強くなければ変化をきたさな  
い。そのためには治療家自身が身体的、精神的、社会的、  
靈的によく気が通るようになってはじめて患者を救  
うことができるようになる。精神的な抵抗としては生育  
歴におけるトラウマ、会社、家庭での葛藤、経済的苦し  
み、それぞれそ稜尊のいう四苦八苦の悩みによりがんじが  
らめにからまるのである。気のエネルギーの高まりによ  
り悩み苦しみの解決能力が活性化する。気が小さければ

悩み苦しみは封印されて表面化しないが、気の高まりに  
より封印がとける。治療者は解決のあとおしをする産姿  
役をしているのである。

判りやすくいえば病気は消費者からのクレームのよう  
なものである。クレームを無視すれば倒産になるし、誠  
実に対応処理すれば繁栄につながるのと似ている。気の  
毒なのは癌患者である。無理をしてストレスを長年ため  
こんで発病し、いろんな苦しい検査、又苦しい手術に耐  
え、更に抗癌剤治療をうけ、頭髮が抜けたり、みるみる  
衰弱していくのは大変つらいことである。しかも癌と戦  
うとか病魔と戦うというのはとんでもない間違いである。  
病気は自分の生き方考え方に誤りのあることを教えてく  
れるクレームのようなものである。その意味を正しく  
理解して改善していくと、病気はどんどんよくなる。  
消費者のクレームと戦うのはとんでもない破壊行為であ  
る。無明より脱するように情報をくれるのが病気とした  
ら、病気も亦楽しからずやと思われるが如何。

## エコロジーク ” 退職後の田園生活

“

観一・14回 大森 士郎

「う、うーん、…まだ寝ときたいのに、この音と地響きはなんや。さ、寒いし、しびれて、体が動かん。誰ぞ、元気のええ奴、おらんのか、見てきてくれー。」

「殿様、誰も動けへんは。動こう思ても、こない寒の時期、体が痺れとるし、眼もろくに開かへんは。」

これが、平成十七年の暮。親戚から貰った旧式のトラクターで、セイダカアワダチソウや葦が繁っている荒れた田圃に乗り入れ、闇雲に、ローターを回転させた。この時の荒れ田の除草は開墾にも似て、木を思わせる雑草を、叩き潰すように除草することから始めた。地中に冬眠している、カエルの悲鳴など、聞こえるはずがない。でも、ローターの刃は、深く刻み込まなかった。だから、

このカエルの親分、殿様カエルも寝たまんまの状態、つまり、どうすることもできなかったけれど、何とか難を逃れたのである。

年が明け、春の陽射しが眩しくなると、今度は、セイダカアワダチソウのようなじゃま物が無くなった田圃に、若草が、牧草のように青々と、気持ちよく繁ってきた。でもまだ、水は少し冷たい。

「ま、また、うるさいな、ちよつと眼がさめたなー、と思つたら、又来よつたんか。」

「殿様、早よ逃げないかんで。あれは、蛇でないで。今まで何年も、こんな地響き聞いたこともなかったなー。」

「わしゃ、殿様カエルぞ。一番大きよいし、周りのヘンドカエルや雨カエルと違うんぞ。そなに、こせこせ逃げへんのか。」

「ほんだきんど、寢床より深いところまで揺れてきたで。間に合わん。うわー、土ごと放り出された。」

「痛たたった。脳天逆落としや。外はまだ寒いなー。」



体ごと叩きつけられたきんど、手足が残とるが。助かっ  
たみたいや。」

「ギューム、ゲロゲロ。グワー！……」

「うわー、殿様、右足が大怪我やないか。体が大きよ  
いきん回転包丁に引っかけりよったんや。殿様、氣、確  
かに持てよ。」

「……声にならず……」

「早よ、こつちの水溜りに逃げんな。引つ張るで。」

「……ムムムム……」

「ああよかつた。地響きがあつちへ行きよつた。もつ  
すぐ、泳げるところへ行けるで。」

「す、すまん……」

「あのなー、前のおつさんカエルが言つとつたきんど、  
怪我によつ効く湧き水があるんやて。何でも、お陽さん  
の出る方へ川が流れとるけん、その流れに乗って行ける  
らしいで。」

二日後、本大温泉の湯だし口の溜りに、板切れを救命

ボートに、葦の茎を松葉杖にした、大きな殿様カエルが、  
気持ちよさそうに、浸かっていたそうです。

このような自然破壊活動をしながら、田圃で米作りを  
始めて二年目になります。

除草のために、トラクターで土を掘り返した後、鷺や  
鳥が集まってくるのです。掘り出された、虫やカエルは  
その餌食になります。雑草は、仇のように掻き集ります  
が、どうも、小動物の悲鳴は私の心にしこりを残します。

出雲大社の大穴牟遲神様によくお詣りしなければなり  
ません。

農作物を手掛けて、身近に観察できるようになって、  
植物の繁殖力に驚いています。雑草の生命力は、これま  
でも駆除するのに苦労を体験していますが、稲は一粒の  
穂が、四ヶ月で多分数百粒に繁殖しているでしょう。野  
菜も、例えば、きゅうり二本の苗を植えて置けば、一カ  
月で、家族五人分が、毎日収穫できます。土と太陽の恩  
恵なのです。この感動は私にとっては新鮮なものです。

さて、田舎に帰り、一つの目標としているのが、里山を育てることです。今、樫や櫟の苗を育てています。思っていたより里山（七宝山）は樹木が繁っています。松の木が松喰い虫に襲われて、一時裸の山肌が見えていました。今、クヌギやハゼの木などが眼を休ませてくれます。山を育てる意味で、驚かずらの除去、下草刈は必要と感じています。また、竹の侵食が目立ちます。竹の駆除は自然との闘いになるかもしれませんが、でも、このようなことから、気長に取り組みたいと考えています。

最後に、地球温暖化対策として、植林は非常に大切なことです。光合成により、炭酸ガスを木質に固形化し、酸素を放出してくれます。一平方メートルの葉っぱは一日に十リットルの炭酸ガスを吸収し、十リットルの酸素を出すそうです。これは一人の人間が一日に消費する酸素量と同じ量だそうです。木を大切にし、地球を守りたいと思っています。



七宝山の麓からこよなく愛した郷里桑山村を眺める加藤藤太郎翁

## 随 想

二中・39回 山下 好雄

一、観一高生の大学進学について

巨鼈第五号以降、毎年学校長の報告が載せられていますが、その中に各年度末の進学状況が報ぜられていますのでそれを引用しながら私見を申し上げます。

平成十七年度は大阪大や神戸大を筆頭に国立大学は昨年度より合格者数を増やしました。私立大についても慶応、早稲田、同志社等難関校に数多く合格者を出しました。東京大、京都大の合格者が出なかつたことは少し寂しい気がします。捲土重来を期して頑張る卒業生や可能性を秘めた在校生の挑戦で来年度は明るい成果が期待されるところです。と報ぜられています。近年文部科学省の方針により学校法人化などの関係もあり、大学学

部の内容、教授陣など大学選択に対する受験生の考え方も複雑でしょう。

国立大学合格者数は平成十二年度は明示されていないがその後は次の通りです。

平成十三 一三七名 うち神戸大 三名

平成十四 一四六名

平成十五 一三五名

平成十六 一二六名

平成十七 一三五名

という立派な実績で喜ばしい限りです。唯、個人的には神戸大学には平成十二年に三名とあるのみで、他の年度も若干はあるのでしょうが先輩としては少し寂しい感じがします。

観一高は昭和六十三年以来十九年間、アメリカ、オーストラリアと交換留学制度を実施しており県下では他に例を見ないとの由、観一高の誇りと云えるでしょう。学生時代から少しでも国際感覚を養うよう心がけて行くことが必要です。

巨龍第五号にも寄稿した通り、私は戦時中に三中に学びましたが、何れ戦後には国の復興や経済の発展が必要だからそのためには実業界に入り活躍したいと考え、その基礎としての勉強が必要だから彦根高商、神戸大学に進み、卒業後、総合商社マンとして長期間海外勤務し、家族ともども色々な苦労も含めて国際色豊かな楽しい生活が続けて来ました、その経験から、若い時には勉強に動いそしみ人間としての基礎の力をつけておくことが絶対必要であるということを学生諸君にお伝えしたいのです。

それと同時に云うまでもなく健康には充分気を付け頑健な体を養う事が肝要です。身心ともに健全であつてこそ、基礎の力を応用して如何なる困難をも克服して成功の道が開けて来るのです。そして常に生命いのちの大切さを充分肝に銘じて行動して下さい。世の中の状況は絶えず變つて行き、科学の進歩、技術の発展とともにグローバル化時代を迎えて變つて行きます。各分野でIT化による環境や状況の変化、価値観の多様性を掘り下げて考え、遵法

精神を心得て、個々のケースに正しい判断を下せるのも健全な精神のもとで導き出されるものです。

観一校から多くの優秀な後輩諸君が大学進学し実力をつけて社会に、世界に、人類に貢献されることを新世紀の大きな目標として切に願つて止みません。そのために校長はじめ諸先生に格調高い、高邁なご指導をしていただくようお願い申し上げます。

## 二、高校卒業のよろこび

私的なことで恐縮ですが孫娘の高校卒業についてお知らせします。

ワシントンでは初夏が終りになって行きます。アメリカでは毎年五月終りに大学の卒業式、六月の終りには高校の卒業式が全国的に大きな行事の一つとなっています。日本の高校や大学の卒業式が桜の季節と重なり桜の花が卒業や入学を祝福し教師や学生と父兄の心を高らかに燃え上がらせる情況と比べ、アメリカでは桜の香りはない

が学校の教師、卒業生、父兄など一丸となって多くの行事が計画され社会的には大きな行事となっています。当地リーズバーク市ではラウドン・カウンティ・ハイスクール在学中であった私達の孫娘レナード・エミが卒業するので本人は勿論家族が揃って私達も加わり六月二十一日の卒業式の前からお祝い行事の準備をし、当日は非常に嬉しいおめでたい一日でした。一昨年巨艦第九号にも、エミの兄のベンジャミンの卒業式の報告をしましたが、エミも兄と同様に成績優秀で、卒業に先立ち行われたアードセレモニーに招待され校長から卒業生二八六名はその父兄の前で表彰状や奨学金の授与式があり、エミは兄と同様首位の成績で卒業することとなり更にバージニア州教育局より表彰状と四年間のスコラーシップ（大学在学中）を受けることになりハイスクール校長から表彰されました。またエミは卒業後はアトランタにあるジョージア工科大学に行くことになっており大学より既に入学許可書と奨学金を受取っており、大学ではパイオ、メ

ディカル、エンヂニアリングを専攻することになっています。卒業式は六月二十一日快晴の天気の中、校庭に学長、教師、来賓、卒業生及び父兄が集り盛大にグラジュエーションが行われました。学長や来賓から真心こもった祝辞があり成績優秀な学生や学校諸行事に貢献した学生に対する表彰があり、卒業生代表としてエミは答礼のスピーチをし参列者からの拍手で非常に感動的な一日でした。

卒業式のあと家族全員でレストランに行き皆でエミを祝ってやりました。本当に嬉しい有難い感動の一日でした。そのあと、卒業生だけのパーティーも深夜まで行われ学生たちは感激と歓び興奮の気持ち一ぱいで楽しく過しました。数日後、親しい数名の友人だけで、そして親切な母親のお世話でカロライナ州の海岸に一週間遊びに行き楽しく過しました。これから親元を離れて大学進学するエミに対し両親とともに我々も一緒に祝いしこれからの長い人生を身心ともに健康で幸福な毎日を過すこ

とを祈っております。

### 三、私生活の一端

重ねて私事に亘り恐縮ですが近況を報告します。

(1)孫娘エミの母(私達の長女有紀子)はラウドンホスピタルに勤務中ですが、専門の外科手術部門の医師が病院内部で外科専門の別院を創設することになりその部門のディレクターとして総括担当することとなり重責を担って忙しく勤めています。このたび娘の高校卒業とジョージア工科大学入学を来月に控え、夫のビルとともに非常に喜んでおり同時にこれから大学卒業までの責任を痛感して張切っています。現在親子三人で大学にオリエンテーション・ミーティングのため行っております。

(2)孫息子ベンジャミンは一昨年ラウドン・ハイスクー  
ルを優等生で卒業後バージニア工科大学に進み、エアスペース・エン지니어リングの専攻で既に二年経過し九月から三年生に進みますが先日来夏休みで帰ってきており

妹の高校卒業をともに祝ってやりました。夏休み中は専攻のエアスペース技術、人工衛星の研究の会社に実習のためアルバイトを続けており私たちには理解も出来ない分野ですが、仕事は大変面白く楽しくやっております。

夏休みには親子四人で一週間、ビーチハウスに行くことを計画しています。ベンジャミンは去る四月十六日早朝学校の寮にいた時、突然乱射事件がおこり三十二人死亡という悲惨な結果を齎したことで大きなニュースとなったことに非常なショックや悲しい思い出となり脳裏から去らないようです。

(3)長男スティーブは昨年コソボより帰国ワシントンにて本省勤めですがUS AIDの中でも今度はエイズウイルス(HIV)の撲滅や感染抑制の担当局長として世界の関係各国に次々と出張しています。先月も会議のためアフリカのルアンダとジュネーブに三週間出張しました。アメリカの政府としてエイズ対策の具体的方策を講じAID指導のもと企画プロジェクトを単なる経済的援助と

いう形でなく目に見える形で実現して行くための指導監督をしています。エイズ感染者は世界で三九五〇万人を超え死者は二九〇万と年を追って増加しており妊産婦の死亡率も毎年五十二万人に上りその大半がサハラ砂漠以南のアフリカに集中しています。

国連としても二〇〇〇年九月のサミットで一八九カ国が国連ミレニアム宣言を採択、八分野十八項目の開発目標を掲げ、二〇一五年までの達成目標とし、その一環としてエイズ拡大を止めるという目標を掲げておりアメリカとしても応分の強力をしている訳です。長男の息子は演劇関係、娘は学校教師として夫々社会人として活躍しております。

(4)同窓会会報第九号にも報告しましたが当地における日本人の活動は多岐に亘っております。私も私の家内章子も夫々当地で日米友好親善のために日本商工会、日米婦人会などで幅広く交際をしております。家内はワシントン・東京ウイメンズクラブW T W Cではアメリカ人

小学校生徒に数学、理科を日本人教師が日本語で教えるジャパニーズ・エマージョン・クラスという特殊学級に毎週W T W Cの何名かがボランティアで日本人教師を補助するグループ責任者として直接参加するほかに全体のとまりとめや計画表作成など忙しく動いています。また、商工会婦人部のコーラス部に、ブリッジ部に編入して忙しく毎週何回かの集会に参加しています。ブリッジ部の集まりでは拙宅にも二卓三卓を用意して接待することもあります。また、毎年四月にはW T W Cのアメリカ側ご婦人を、十名余りを招待し日本側婦人が日本食のご馳走をタップリ用意して拙宅の桜を鑑賞しながら歓談して貰う集まりが慣習となっていて非常に喜んで貰っております。更にこれら以外に家内は別の日本人コーラス部にも属し、この部が三十名のメンバーで活動は盛んでケネディーセンターでも何回か歌っており、今度は東京の或るコーラス部からぜひワシントンで合同で発表会をしたいと申出がありその準備のため練習の回数も増えています。

こんな工合で家内は殆ど毎日外出をしているので私は家事の手伝いや雑用に追われ二匹の犬の世話もあり毎日忙しくしています。また私は糖尿病のため医者通いをしています。私が病気の性格上、食事療法と運動という基本的なことを忠実に実行し病氣と長いお付き合いをしなければならぬことを肝に銘じています。ここ数年来は特に投薬を続け血糖値を継続的にテストして余病併発を起ささない様気をつけています。年を重ねるにつれ二人ともゴルフの腕も上達どころか下る一方ですが楽しむ程度にやっています。

それが先日六月二十三日、二人でゴルフをしていた時にボールが殆ど水の無い溝に落ち拾いに行つて溝を出る瞬間私はバランスを失つて後向けに倒れ背中を打つて強い痛みを感じたので早速医者に行きレントゲンを取つたところ肋骨五本骨折ということが判りました。それ以来毎日背中の痛みと不自由を感じながら養生を続けています。数ヶ月は我慢しなければならぬと思つております。

糖尿の闘病生活に更に今回余計なものが加わつて来ました。私が常に生命の大切さを皆さんに申し上げているの自分にこんな事故を起こし恥しい次第です。

(5) 日本で私が会社を退職し第二の職を求めてアメリカに住居を移して以来ロスアンゼルスで十一年、ワシントンに移つてから十三年の年月が過ぎました。この二十四年の間世の中の移り変わりとともに私達の周辺の事情も新しいことが次々とおこり子供達は社会進出し、次第に責任の重い要職に就いており、孫達も成長し、上は社会人となり末っ子でも高校卒業という時代となりました。その間、子供達の家族の親戚とも色々な機会に住き来して親しくしています。我が家にも子供や孫達が頻繁に訪ねて来るし時には孫たちの友人も招いて食事をしたり夏にはプールパーティーをしたりして楽しんでます。このような余生をおくることは若い時には想像もしていなかったことです。

(二〇〇七年七月)



連載特集

## 観音寺・三豊の風景

(財田川・燧灘の落日など)

観一・6回 松川 進

香川県立三豊中学校校歌の二番には「財田川(たからだかわ)のさらさらと 流るる水を顧みて」とあり、現在の香川県立観音寺第一高等学校校歌の三番には「財田の流れ 澄むほとり」と三豊平野を蛇行しながら流れる財田川の勇姿が歌われている。

川幅が広くなったり、狭くなったりするもの、あちこちで河川敷の運動公園や花壇を形成して、周囲の方々に親しまれている。

だが、ひとたび長雨や豪雨が続きと運動公園のグラウンドの土砂は流失したり、巨木などが堆積したりする。

中州のようなところにあつた観一のアーチエリーの練

習場は、どうなっているのだろうか。

財田川という私などは「鶴」を想起することが多い。

かつて私が書いた「鶴」(四国新聞読者文芸短編小説平成二年度年間最優秀賞の連続受賞作品)の冒頭から引用する。

「三豊平野を貫いて一筋の川が、ゆったりと流れている。とはいっても今は雨季でもなければ、そこに流れを見ることはできない。

その財田川の、中流の近くの平地に、付近の住民でなければ気づかないほどの小池がある。一辺が二百メートルにも足らない、ほぼ方形の池であるが、築造されてから三百五十年を閲している。

西岸には、うっそうと繁った雑木林、南岸には、まるで小鳥のように池の中央へ向かって突出した台地があり、その上にも雑木が生い茂り、この池の歴史を物語っているかのようである。東岸から南岸にかけては、藪が群生し、北岸から西岸にかけての堤防は、車も通れるほどの

幅員があり、時々人影を見かける道路になっている。樋管のある中央の堤防に、たたずんでいると、この池は、どうもただの池ではない、という気がしきりにしてくるから不思議である。

さほど遠く離れていない所にある「鶴」の名を冠した酒造会社の看板が人目を射る。

西嶋八兵衛が構築したともいわれるこの池は全くの平地にあり、水深も最高で二メートル、当初は平池（ひらいけ）と呼ばれていたらしい。私は、その池にまつわる昔話を、近くに住む古老から、初冬の午後、縁先で番茶をいただきながら聞いたのである。

江戸中期に、七十番札所本山寺の近くに腕利きの宮大工の一族が住んでいた。彼らは近郊の社寺の新築や百七、八十年から二百一、三十年経った社寺の改築、再建、修理などに従事していた。だが、早魃や飢饉が多かったり、普請の仕事がない時もあったりして、時には付近の山林の筏採を手伝ったり、新田の開墾に参加したりして、家

族は、かろうじて糊口をしのぐ生活を送っていた。」

主人公は、九州へ普請に行った帰りに一羽の傷ついた鶴を背負ってきて、平池で飼う。財田川や平池には鶴が飛来する雰囲気がただよっている気がして私の創作意欲が、かきたてられていた。

#### 中略

「平池には餌が多いと見えて、三羽の鶴は冬中、そこを離れようとはしなかった。また、あたりが静かで住心地のいい環境のせいであつたかもしれない。鶴達は平池を離れないばかりか、番いの鶴が卵を産み、その雛が一羽かえつたので平池の鶴は四羽にもなつた。

そして翌年の春先には、四羽とも北の空へと旅立って行った。だが、晩秋には、それが十二羽の群れとなつて飛来した。

それ以来、平池へ渡ってくる鶴の数は徐々に増えていったという。

いつの間にか、だれがいい出したのか、この平池のこ

とを人々は『鶴沢池』と呼びならわすようになったらしい。

近年、平池には一羽の鶴も見かけない。

「鶴がないのに『鶴沢池』というのは何ともわびしいな」

老人が、ぼつりという。秋の陽はつるべ落とし、かな夕焼け、

「クックツ、クックツ」

どこからか鳥の鳴き声が聞こえたように思ったのは私ひとりではない。

「あれは？」

古老が指さした『鶴沢池』の上方に、一つの鳥影を見たとように思う。

「やはり、幻だったのか」  
私の声も弱々しかった。

数年前に撤去したが、「鶴を呼ぶ会」が近くの財田川に、おとりの鶴を一羽入れて準備していたが、鶴は飛来しな

かった。

瀬戸内に沈む夕日は、どこから見ても美しい限りだ。

特に冬の凍てつくような燧灘のあなたに消える寸前の大きく真つ赤な太陽。

今でも思いおこすのは、三年前まで、いつも眺めて感動させられていた旧市立図書館の四階の事務室から伊吹島の彼方に沈む落日。毎日、あの光景を見てから帰途についていた。毎年、十二月三十一日、市長様や役所職員が中心になって「夕日を送る会」が催されていたのなもの。つかしい。

## 観音さんと京都の観音寺の話

観一・8回 脇 剛司

一、はじめに

「去年、観音寺の数を勘定しよつたな。なんぼあつたんや」

「八百四十五力寺あつたけど、愛知県の数が不正確やら全部で九百力寺くらいとちがつか」

「ほうか。九百言つたら多いな。全部観音さんがご本尊かいな」

「多分な……。でも観音さんと言つてもいろいろな観音さんがあるで。観音寺市の観音寺は聖観世音菩薩さまやけど、ほかのお寺は十一面観音・千手千眼観音や如意輪観音やいろいろあるで」

「なんやその面や手や眼いづのは」

「何いづとんや。観音さんのこと知らんのか…」

二、観音信仰について

観音寺市の観音寺のご本尊は、聖観世音菩薩である。

弘法大師が第七世の住職だった大同二年(八〇七)燧灘に流れてきた電光の如き光を放つ木を用いて造った薬師如来を西金堂に、聖観音の秘像と四天王の像を中金堂に安んじてこれまでの神宮寺の寺名を観音寺に改めたと「弘化録」に記録されている。なお、琴弾八幡宮の本地仏は阿弥陀如来である。真言宗のご本尊の中心的尊格は大日如来であるが、各寺院の本尊は釈迦如来、阿弥陀如来、薬師如来、観音菩薩、不動明王などが安置されている。因みに南都六宗は毘盧遮那仏、薬師如来、釈迦如来など、天台宗は寺院によりまちまちで、薬師如来、釈迦如来、観音菩薩、阿弥陀如来など、浄土宗、浄土真宗では阿弥陀如来が安置されている。

観音菩薩は鳩摩羅什(四世紀末)の旧約では「観世音菩薩」と訳されているが、唐の二代李世民の避諱により「世」の字が使えなくなり「観音」となった。唐代の玄奘三蔵

以降の新訳では「観自在菩薩」と訳されている。般若心経では「観自在」である。

日本に観音信仰が伝来してきたのは飛鳥・白鳳時代といわれ、法隆寺夢殿の救世観音は天平十九年(七四四)の資材帳記録があり、わが国初期の観音像といわれる。玄坊が唐から持ち帰った經典の中には変化観音に関する密教の經典が含まれていた。

空海が持ち帰った曼荼羅図では如来は「悟りをひらいた人」すなわちお釈迦さまの尊格であり、菩薩は「悟りを目指して修行している人」として配置されている。この曼荼羅図はお釈迦さまの修行時代から悟りに至るまでのアルバムと見れば理解し易い。菩薩は修行時代のお釈迦さまの姿であり、たとえば阿弥陀如来悟りを得た釈迦(の脇持仏に観音菩薩と勢至菩薩が配置されており、慈悲を担当するのが観音菩薩修行時代の釈迦で、智恵を担当するのが勢至菩薩)同じく修行時代の釈迦とされている。

菩薩は観音菩薩のほか弥勒菩薩、勢至菩薩、日光菩薩、月光菩薩、文殊菩薩、普賢菩薩、地藏菩薩、虚空蔵菩薩などがある。

観音菩薩はお釈迦さまが多くのお悩めるまたは苦しむ人々を救った事例の場面に变化して、六観音、七観音、さらに三十三観音となった。当初中国の「摩訶止観」の中で地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天を輪廻しながら苦しんでいる人たちを救ってくれる観音さんを設定していたが、この考えが日本に入ってきたが、なじみのない(大悲観音・大慈観音など)だったので新しく設定された。聖観音、千手観音、馬頭観音、十一面観音、准胝観音、空罽索観音、如意輪観音が真言宗の六観音である。天台宗の六観音は准胝観音と空罽索観音が入れ代わる。この二観音を含めて七観音という。

三、観音さんについて

さて、観音さんはどんな仏さんなのだろうか。

前述のように、菩薩は釈迦の修行時代の姿であり、如来は悟りを得たお釈迦さんの姿であると云われる。明王・天部は仏教に取り入れられたヒンズー教の神様たちである。観音さんは修行時代に苦しんでいる人々を救った場面を菩薩として表現したものと思われる。前述の六道の観音さんは、苦しむ人々を救済するために姿・名前を変えて設定されている。

その基本形は「聖正観音」で一つの顔と二本の腕を持ち、我々人間そのものの姿である。多くの像は未開の蓮の花を持ち、ほとんどが頭に阿弥陀如来の化仏を戴いている。

この聖観音から最初に変化したのが「十一面観音」と云われる。頭上に十または十一の面を乗せ、正面三面は慈悲相、左三面は忿怒相、右三面は牙を出した相、後ろの一面は大相、頂上の一面は仏相で配置されていて、天平時代から病氣退散の信仰をうけている。

次に変化したのが「不空羂索観音」で、一面多手で三

つの目があり、手は六本から十八本のものがある。「美しくなる」「財産がたまる」などのご利益があるが、百観音のなかでは西国の興福寺南円堂の「一力寺」しかない。

千手観音は、千本の手を持ち掌に目を持つので千手千眼観音ともいう。この目が苦しんでいる人々を見てすぐに救いの手をさしのべてくれるのである。京都の三十三間堂にまつられている千一体の千手観音は頭上に十一面をのせていて、十一面千手千眼観音といわれる。

馬頭観音は頭部に馬の首をつけ、忿怒相をしていてこの相で人々の目を覚まし、正しく導く慈悲の心を顕わしている。馬頭ということで馬の安全、すなわち旅の安全を守ってくれる仏としての信仰もあつた。

如意輪観音は一面六臂の坐像で右ひざを立てて、両足裏を合わせた姿をしている。右手の第二手で如意宝珠を持ち、願い事はどうなことも叶えてくれるという。

准胝観音は三眼十八臂の姿で子宝や安産のご利益がある。

観音さんのご利益は千年以上の間で人々が体験した苦しみ・悩みを癒すものであるが、時には現代風にたとえば、「パソコンのワード・エクセルをマスターしたい」「ゴルフが上手になりたい」など今の人たちの素朴な願いを如意輪観音さんにおねがいしたらどうだろうか・・  
注 金剛界曼荼羅図は「マスターしたい 悟りを得たい」のステップを解説したものと見方もある。

さらに、三十三観音とは、観音信仰が広まった江戸中期に法華経が説かれるようになり、このお経のなかの普門品観音経の教説に基づき人々を救うためにその場面に応じて変化する三十三の応現身を観音さまとした。その像は天明三年（一七八二）に刊行された「仏像図彙」にまとめられている。中にはインド・中国出身の観音さんも含まれる。蛤蜊（ハマグリ）観音というのもある。多くの観音さんがいるということだけでなく、お釈迦さまの修行時代に苦しむ・悩める人々を救った場面が多いと理解す

ればよい。

#### 四、観音霊場めぐり

観音さんの変化の数、「七」「三十三」に因んで霊場が設定された。通常「七観音めぐり」いうのは、変化した七つの観音さんのことを意味するのではなく、観音さんを安置している「七つのお寺」をめぐることをいう。「三十三観音」とは変化観音の楊柳観音や白衣観音などを指し、「三十三箇所」とは七つの観音さんをまつた三十三のお寺のことである。

京都では、平安のころ「七観音めぐり」が流行り、鎌倉時代には次のお寺の記録が残っている。

行願寺	革堂	聖観音菩薩
清和院	河端寺	聖観音菩薩
金戒光明寺	吉田寺	千手観音菩薩
清水寺		千手観音菩薩
蓮華王院	三十三間堂	千手観音菩薩



六波羅蜜寺

十一面観音菩薩

頂法寺 六角堂

如意輪観音菩薩

現在の洛陽七観音は次のように設定されている。

頂法寺 六角堂

如意輪観音菩薩

今熊野観音寺

十一面観音菩薩

蓮華王院 三十三間堂

千手観音菩薩

六波羅蜜寺

十一面観音菩薩

清水寺

千手観音菩薩

長楽寺

准胝観音菩薩

新長谷寺 (真如堂)

十一面観音菩薩

西国三十三箇所めぐりは養老二年(七一八)に長谷寺の

開基徳道上人が仮死状態になったとき閻魔大王に会い、

「またここへくるのは早い、三十三箇所の観音堂を民衆

に広めなさい」と三十三の法印を貰い巡礼を始めたが信

仰を得ることができず廃れた。このときこの宝印を攝津

の中山寺に埋めたのを、永延二年(九八八)に花山法皇が

掘り出して新たに霊場を定めて再興し巡礼を広めた。現

在の三十三箇所の本尊は七観音で千手観音が十四尊と一

番多い。宗派は真言宗が十五ヶ寺、天台宗が九ヶ寺ある。

余談だが、西国三十三箇所などの霊場をめぐり参拝す

ることを「巡礼」といい、八十八箇所巡りは弘法大師の

足跡を訪ねることで「遍路」という。八十八箇所めぐり

は三十三ヶ所めぐりより新しく、十七世紀に真念が著し

た「四国遍路道指南」が初見のようである。

西国三十三箇所に倣って鎌倉時代に「坂東三十三箇所」

が設定され、室町時代には「秩父三十四箇所」ができ、

三ヶ所併せて「日本百観音霊場」と言われている。坂東

は真言・天台宗を中心に構成されているが、秩父は秩父

神社を取り巻くように配置されていて、秩父市・秩父郡

に所在しており、曹洞宗を中心に禅宗系である。

京都では、巡礼が困難な西国三十三箇所に代るものと

して後白河天皇が定めたのが「洛陽三十三箇所巡礼」の

起源といわれており、応仁の乱などで廃絶したが、江戸

時代に中興された。がまた、明治の廃仏希釈で廃れ、平成になり「復興」された。

西国・坂東・秩父の三カ所に倣って、各地に三十三箇所霊場の「移し」が作られた。北海道から九州まで全国で百五カ所に所在する。が、宮崎・鹿児島県では見当たらない。

#### 五、京都の観音寺参拝記

京都府には、「観音寺」が二十六カ寺ある。このうち半数が真言宗である。

今回、京都市および周辺にある五カ寺をお参りした。観光客が多い桜の時期を外し、新緑の頃に出掛けた。

#### 今熊野観音寺 新那智山 真言宗泉涌寺派

京都市東山区泉涌寺にあり、京阪電車「東福寺駅」下車徒歩十五分の今熊野山のふところであり、東大路を越えて泉涌寺道に入る。



東大路から泉涌寺道



山門

この道は、往時観音寺大路といわれ、後白河上皇が熊野権現を勧請され、新熊野イマクマノ神社を造営し観音寺の本尊を本地仏とされ、「新那智山」の山号とした。道の両側は高い生垣が連なり、静かな落ち着いた雰囲気の中を進む。西国三十三箇所十五番札所である。

大同二年(八〇七)弘法大師が熊野権現のご霊示を受け授かった一寸八分の観音像を体内仏とし、一尺八寸の十一面観音を刻まれ庵を結び奉安され、弘仁二年(八二二)に嵯峨天皇の勅願により講堂を造営された。講堂の完成

時期が開創といわれている。

ここより少し北にある智積院と妙法院の間を東に阿弥陀ヶ峰に登る道の北側が鳥辺野(庶民の墓地)で南側を鳥戸野(皇室・貴族の墓地)と言い、総称して鳥部野と言い、いずれも「トリベノ」と呼ぶ。泉涌寺・観音寺は鳥戸野の地域で皇室・貴族の庇護を受け、南北朝時代の兵火や応仁の乱にも伽藍が焼失したが、早くに復興した。



朱塗りの鳥居橋



弘法大師像

赤い鳥居橋を渡り進むと、「弘法大師像」が迎えてくれる。見慣れた讃岐の顔相で造られている。境内の谷間に

は、お堂付きの西国三十三箇所(三三版)があり、本堂越しに見える山の中腹には平安様式(多宝塔)が見える。これは日本の医学に貢献した平安時代の丹波康則(から華岡青洲・緒方洪庵まで百二十一人の人々を祀った「医聖堂」)で、医と宗教が協力して心身ともに健やかな社会が築き上げられるようにとの願いがこめられている。



三三版西国三十三箇所



観音寺本堂と多宝塔

桜・紅葉の季節を外した平日の観光客は少なく泉涌寺(この本堂は入り口の山門より下った広場に建てられている。山門より石段などで上ったところに建てられて

いるほかのお寺とは雰囲気が異なる」と一緒に是非お参りを勧めるお寺である。

塔頭の成相院には、那須与一のお墓があり、形・大きさは後述の伴氏廟と同じ位のものでお堂付きであった。

#### 東向観音寺 真言宗泉涌寺派

北野天満宮の鳥居を過ぎたすぐ西側に位置する。

九世紀の初め創建され「朝日寺」と号した。天満宮を建立した後に菅原道真公作の十一面観音を請来し、十四



東向観音寺山門



伴氏廟

世紀ころ観世音寺と改称した。もとは東向・西向の二つのお堂があつたが、応仁の乱などで焼失したが、東向だけが再建され、江戸時代後期に寺名を観音寺とした(略縁起より)。伴氏廟(道真公の母君のお墓といわれる忌明塔や蜘蛛塚などもあるが、他所より移されたものと伝わる。境内は広くないが豊臣家・徳川家・一条家などの寄進のたてものがあり、歴史が込められている。二十五日の縁日、修学旅行シーズンを外して北野天満宮と一緒に参りすることを勧める。

#### 百叩き観音寺

東向観音寺から少し東を下がつた七本松出水下る三番町に所在する。この付近はお寺が多い。各境内には、桜の木が多く、満開時期には見事なものでほかの名所に行かなくてもよいと近くのお年寄りにアドバイスを貰った。十七世紀初めに創建されたが、度々の火災で寺の由来はよくわからないが、表門は伏見城の牢獄の門を移した



百叩き観音寺全景



千人堂



妙音山観音寺本堂



旧西国街道からの鳥居

といわれ、楠の一枚板でできていて、罪人が釈放される  
とき門前で百回叩いて二度と牢に戻らぬよう諭したので  
「百叩きの門」と云われるようになった。ご本尊の聖観  
世音菩薩は「千人堂」に祀られていて、もとは一条戻り  
橋付近の寺にあり、三善清行菅原道真と同時代の人の  
死に際し子の浄蔵實所が祈祷したところ葬儀の途中、一  
条戻り橋で生き返ったという言い伝えがある。お堂は境  
内の北側にある。観光客もなく落ち着いたお寺の町界隈  
である。

山崎聖天観音寺 妙音山 真言宗単立  
聖天さんで有名なお寺で車で行くより、阪急大山崎駅  
またはJR山崎駅から歩いて旧西国街道を京都方向に進  
み、「観音寺」鳥居をくぐって行くことを勧める。  
寛平法皇(宇多天皇)の開基で昌泰二年(八九九)に創建  
された。本尊は聖徳太子作の十一面千手観世音菩薩であ  
る。江戸時代に後水尾・明正・零元・東山・中御門天皇  
の勅を受け勅願寺となった。天和二年(一六八二)弘法大  
師御請来の聖天さんを箕面勝尾寺から奉祀され当山の鎮

守とした。以来、商売繁盛・良縁和合のご利益で広く信仰されている。このためか、旧西国街道からのすぐの鳥居には「観音寺」の扁額が懸かり、阪急線・JR線をくぐったところの鳥居には「聖天宮」の扁額に「妙香山」「観音寺」の石塔が添えられている。鳥居にお寺の扁額が懸かっているも珍しいが、二つの鳥居は観音さんと聖天さんの両者を尊重して立てたものだと推察する。本堂は元治の変（一八六四）で焼失し、明治になり西観音寺の本堂（サントリ―山崎工場地にあった）を移築した。

本尊の縁日は十八日、聖天さんの縁日は一日・十六日である。とくに桜の時期は外したほうがよい。

#### 大御堂観音寺 息長山 真言宗智山派

京都府南部の京田辺市普賢寺に所在する。最寄駅は近鉄三山木駅であるが、ここだけは車で出掛けたほうがよい。しかし、分りにくいのでよく調べて出掛けることを勧める。地名の普賢寺が示すように元は「普賢寺」があ

った。興福寺の別院として藤原氏の庇護を受け、法相・三論・華嚴宗などの兼学の寺であったが十五世紀半ばの火災では再建されず、普賢寺は滅び地名だけを残した。ご本尊の十一面観世音菩薩は観音寺に引き継がれたようである。ご本尊は天平十六年七四四に安置されたとの古記録があると云われる。国宝に指定されていて、奈良県桜井市の堂々とした偉丈夫を思わせる聖林寺の十一面観音（国宝）と較べて優しい女性的な観音さまだとの見方が多い。どちらを好まれるか一度拝観されたい。

丁度、松阪市からきた参拝客と二人で拝観したが、住



大御堂観音寺本堂



国宝十一面観音

職は丁寧に解説してくれて、前置の仏さまも横に外して正面からよく拝めるように配慮してくれた。さらに脚立を用意してくれ、観音さんを目の前で拝観させてくれた。

おわりに

京都の五カ寺を参拝したが、創建以来順調に歩んできた寺、大伽藍を擁し隆盛したが今は小さな寺に引き継がれている寺、後世に請来した聖天さんが、観音さんより信仰を得ている寺とか色々な経緯を持っていることが判った。このことは今の姿が過去の姿ではなく、また将来に続くとは限らないことを実証しているものと思われる。このことは人生にても同じことで今順調だから将来も順調とは限らないことを教えられるものと思う。

近畿地方の百九十五カ寺ある観音寺の一部を紹介しませう。皆さんもぜひお住まいの近くの観音寺を参拝されたい。

・ 大阪市天王寺区城南寺町 8	4	攝津八十八箇所十六番
	0 6	6 7 6 2
		2 8 5 9
・ 大阪市住吉区我孫子 4	1	2 0
	0 6	6 6 9 1
		3 5 7 8
・ 和泉市観音寺町		
	0 7 2 5	4 1
		2 3 0 3
・ 和泉市上代町		
	0 7 2 5	4 5
		0 9 9 0
・ 櫻原市小房町 6	2 2	
		おふさ観音
・ 明石市二見町東二見 1 6 4 3		
		防火観音
・ 加古川市尾上町池田 3 9 9		
	0 7 9 4	2 4
		4 9 0 6
		白旗観音
・ 福知山市観音寺町 1 0 6 7		
	0 7 7 3	2 7
		あじさい寺
・ 草津市芦浦町 3 6 3	1	
	0 7 7	5 6 8
		0 5 4 8
		拝観は予約制

追

悼



## 佐伯富先生を想う

元京都女子大学教授 植松 正



京都大学名誉教授  
佐伯富先生は、平成  
十八年七月五日、滋  
賀県大津市堅田にお  
いて亡くなられた。  
享年九十五歳であっ

た。ここに謹んで哀悼の意を表するとともに、心から冥福をお祈りしたい。

先生は明治四十三年十一月、香川県三豊郡大野原（現観音寺市）の真言宗大覚寺派の名刹巨龍山萩原寺住職佐伯行輝師の長男としてお生まれになった。旧制三豊中学校で学ばれ、隣村の故太平首相と同級生であったと聞く。

そこから岡山の旧制第六高等学校に進まれたが、その頃は必ずしも東洋史を専攻するとの確信はなかった。ところが、そこにまことに奇縁といふべきか、ごく短い間ながらそこに赴任しておられた宮崎市定先生との出会いがあった。昭和六年、先生は京都帝国大学文学部に入學、東洋史を専攻され、すでに六高から転じておられた宮崎先生の薫陶を生涯にわたって受けることとなったのである。

のち山口高等商業学校教授として赴任され、戦中戦後の辛酸も味わったが、昭和二十四年、京都大学文学部助教授に迎えられ、昭和三十二年に教授に昇任、昭和四十九年に退官されるまで、学界を主導される諸研究を遂行されるとともに、熱心に後進の育成に当られた。主たる研究業績としては、著書『清代塩政の研究』、『中国史研究』（第一―第三）、『王安石』をはじめとして、概説書や数多くの論文があり、さらに研究の手引きとなる索引の刊行は二十数種類にのぼる。しかしなんといつても先生畢生の名著は、退官後の『中国塩政史の研究』（昭和六十

二年）であり、これによって斯界最高の榮譽である恩賜賞・学士院賞を受賞されたのである。

私は学部・大学院を通じて先生の受業生であつたが、大学院を出て初めて職に就いたのが香川大学教育学部であつた。先生がことのほか香川への思いが強く、私に赴任を勧めておられるように感じたことも、私を香川に導いた要因のひとつであつたと思う。そして二十余年香川に慣れ親しんだが、先生には香川になんとかご出講をお願いし、その後、転勤した先の京都女子大学にも先生が講師として教鞭をとっておられたこともあつて、研究方面のみならず、ご自身の生い立ちや故郷のことをもたびたび耳にしたことがあるので、今思い返すままにそうしたことを記して追悼のよすがとしたい。

先生の祖先の住地は、雲辺寺ケープルの山麓のあたりの池の内あたりという。父君の行輝師は明治元年の生まれ、萩原寺の佐伯行瑜師に弟子入りしたが、その行瑜師が豪僧で、五郷村から「ええじゃないか」の集団がやつ

て来たときに、彼らが必ず通る井関の大池の堤に笹を敷いて座りこみ焼き討ちを免れたという。また萩原寺は江戸期には京極家からの援助を受けていたところ、動乱の明治維新の際には米五十俵分の土地を買い入れて寺の財源確保をはかった。

行輝師については、柞田川の堰のあたりに崖があり、土囊が積んである上で雨が降るとそこを水が溢れるが、敢えてそこで経読みの修行をしたと伺つたことがある。しかも若いころは斗酒もお辞せずの人であり、晋山式のとくに四斗樽を十五個用意して、三日間にわたり村人と飲んだが平気であつたという。また四十歳のころには観音寺の総持寺の住職も兼ねていた。九十六歳で亡くなつたが、その高德の生涯のあいだに、縁あつて、かなりの書画が萩原寺の有に帰したと聞いた。

先生は早くから学問の道を志され、寺は先生の弟の佐伯行實師に任せる心算であつた。行實師は九州大学で社会学を学び、高野山大学林の第一回卒業生でもあつたが、

昭和十五年、惜しくも二十八歳の若さで病没してしまわれた。かくして寺は弟子筋に承継、維持されてゆくこととなったが、先生としても父の行輝師を想つて終世、痛切の思いを遺されることになった。

歴史の研究は、なにことも自前で考えてゆこうとする学問である。先生のご研究は幅広いが、特に宋代から清代にいたる中国近世史、なかんずく経済や財政の歴史に格別の関心を寄せられた。国家財政の大半を支えた塩の専売に目を向けたのもそのためである。べつに讃岐の製塩業からの連想というわけでもない。ただ、塩や茶など、統制物資を扱う政府と結びついた業者・商人の動向や、政府の統制をかいぐる違法な闇商人の暗躍、秘密結社の存在には大いなる注意を払っておられた。したがって史料にはなかなか残りにくい歴史の暗部にも迫つてゆくこととされる。そのためには同時代の内外の政治情勢の背景に解明の手がかりを求めるのが第一歩である。政治と商業との関連は世界史的にみても大きなテーマであるが、

中国の場合には、同郷的結合をもととした徽州商人や山西商人がよく知られており、これが中国史全般に大きな影響を与え続けてきたと先生は考えておられた。

そうした政治と商業の結びつき、商人の活動の全国的展開のあり方を身近な例に引き比べて感じておられたのが、我が国の近江商人の存在である。かつて長宗我部氏が伊予から攻め込んできたときに秋原寺に泊まったことがあり、そのなかにいた近江出身の平田氏が隣の五鄉村において井堰の池を造り、新田開発に貢献することになったのだとうかがったことがある。かつて私が近江商人のふるさとといわれる滋賀県内の各地をご案内したときなど、宿願が叶ったと大変喜ばれたのだった。思えば、先生が讃岐に生まれ近江に亡くなられたことは単なる偶然ではないような気がしてくる。先生の生涯をかけた研究生活から自然に導かれたところがあるようだ。ところで、観音寺市と滋賀県の草津市は姉妹都市連携を結んでいる。草津市志那町の出身で、俳諧の祖と称される日本

中世の連歌師山崎宗鑑が、晩年観音寺市に一夜庵を結び、その地で没したとのいわれによるものである。先生は、このことも背景として近江商人の存在を想定しておられたように思う。

最後に、先生が活動されたのは京都という、いわば「都会」であるが、先生は都会風の浮華を遠ざけ、却って純粹で実直で一途な「地方」の氣風を重んじ、また愛されたと私には思える。日本社会の行く末にも決して無関心ではおられなかった先生であれば、恩師宮崎先生も同様だったと思うが、掛け値なしの真人間の出現をむしろ地方にこそ期待されていたような気がするのである。

佐伯富博士略歴

明治四十三年十一月 香川県三豊郡大野原町に生まれる。  
昭和三年三月 旧制三豊中学校卒業  
昭和六年三月 旧制第六高等学校卒業

昭和十年三月

京都帝国大学文学部史学科卒業  
東方文化学院京都研究所嘱託  
東方文化研究所助手

昭和十五年八月

京都帝国大学人文科学研究所助手

昭和十七年（末）

山口高等商業学校教授（十九年、山口経済専門学校と改称）

昭和二十四年五月

京都大学助教授（文学部）

昭和三十二年

京都大学教授（文学部）

昭和四十九年

京都大学名誉教授

平成元年

その間、史学研究会理事長、東洋史研究会副会長などを務められる。恩賜賞・日本学士院賞を受賞（『中国塩政史の研究』一九八七より）

平成十八年七月五日

逝去。（大津市堅田、琵琶湖大橋病院）享年九十五歳。

既報の佐伯富博士の訃

『東洋史研究』第六十五卷第二号

『史林』第八十九卷第五号

『東方学』第百十三輯

生涯の全著作は『佐伯富博士著作目録』（二〇〇六）に著録されている。

## 故佐伯先生 恩賜賞・学士院賞

### 授賞記念品を母校・同窓会本部に預ける

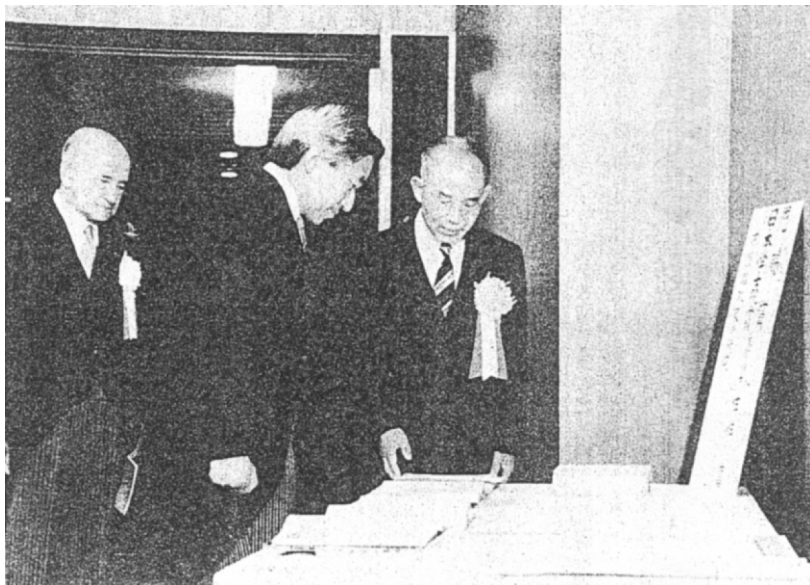
三中・40回 合田 英之

去る七月十日（火）午前十時、母校を訪問して、故佐伯富先生（三中・二十四回昭和三年卒）の畢生のご研究「中国塩政史の研究」が世界に誇れる日本を代表する業績として、今から十八年前の平成元年六月十二日、日本学士院会館に於て、香川県人として初めて天皇陛下より恩賜賞「御紋付銀花瓶」を授賞し、日本学士院より「日本学士院賞賞牌」を夫々賞状・賞金と合せて授賞されました。この名譽の品二点をご遺族の上田節子様（佐伯先生の第五女で京都府城陽市在住）のご希望で佐伯先生の一周忌を記念して母校にお預けしたいということでお預りし、三宅昭二同窓会本部長、副会長、石川義昭事務

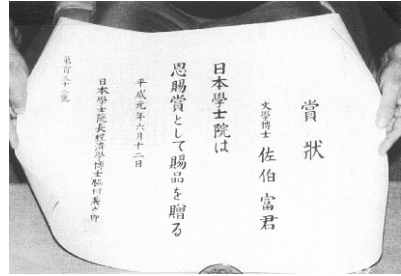
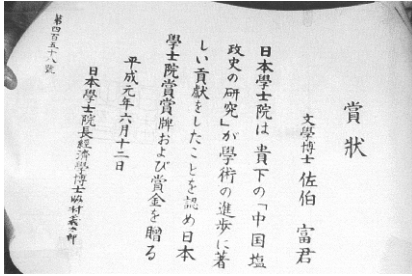
局長、事務局次長並びに豊嶋校長のお立会いの下で本校同窓会本部にお預けしました。尚この二点の他に先生の著書「中国塩政史の研究」一冊を学校へご遺族上田様よりの寄贈品として差上げました。これらの品々は今後学校にて責任をもって保管して頂き、生徒達の向学心を養う一助となるよう折につけて展示もされるようお願いして辞去しました。

ご参考までに佐伯先生のご業績を偲ぶ写真を以下掲げます。尚、同窓会誌燧四号（昭和六十三年版）の三十頁『先達を訪ねて』『佐伯富先生との対談インタビュー』に先生のお話しが詳しく出ていますのでご参考にして下さい。

天皇陛下にライフワークの中国塩政史について、資料などの説明をする佐伯富先生。後方は紹介者の脇村義太郎日本学士院長 = 平成元年6月の恩賜賞、日本学士院賞の授賞式に先立って上野の学士院資料陳列室



日本学士院展示室



「中国では、古代から清の時代まで、  
 塩が国の政治・経済と深く結びついてき  
 ました。歴代王朝の盛衰が塩の商人の活  
 動と密接で、正確にいえば塩は時の権  
 力の消長に、重要な役割を果たし、権力  
 の衰退を促したり、拍車をかけたりした  
 ものなんです。尋らじに欠かさない塩を  
 抑えることで、多大な利益がありました。  
 だから時の権力を受ける財政基盤に、塩  
 の占める比率が大きければ大いはいはく、  
 その地盤や製塩は権力の弱環や減りに影  
 響を及ぼして、います」



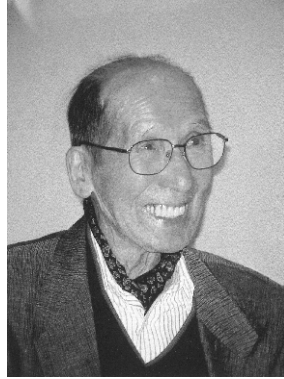
この箇所は平成元年 12 月、新聞社の取材の際  
 先生が述べられた言葉です。



本校校長室にて 同窓会本部役員・本校校長と共に

## 父のこと、よもやま

田中照三氏次女 篠原 苑子



元気で長生きするには好奇心と、若い頃から鍛えた体。よく言われることですがまさに父がそうでした。

旅への憧れは晩年までうせることなく、旅行社からのダイレクトメール、新聞雑誌のツアー記事をしっかりとチェックしていました。

亡くなる数か月前のこと、ニュージーランドへのツアーにひとりで参加を申し込んでしまいました。かかりつけの医者に援護射撃してもらい、何とか中止してもらっ

たものの、その後「機嫌ななめの日が続きました。

普段道を歩いても乗り物でも、きよろきよろ観察、写真・ハミリ撮影：新しい機械類にも興味深々。オーディオなど何度も買い替え、最後は九十歳も過ぎてからでした。梅田のヨドバシカメラで自ら選んだ品物は届きましたが、コンポの配線が必要で、それを私達に頼むのを潔しとせず、やさしく対応してくれる孫の来訪でようやく好きなCDが聞けるようになったのです。

「僕はアナログ人間」とデジタルを毛嫌いしていましたが、丁寧に説明すれば携帯電話も持ち、インターネットで世界を広げることが出来たかもしれません。共に暮らした者として反省点の一つです。

さて、「鍛える」についてですが、父の場合はあくまで楽しみながらということでした。スキーは戦後、物のない時代に早くも再開したらしいのを最近知り驚きました。姉が、「おとうさんはミシンでスキーのどつぐをぬっています」：がっこうからのかえり、えきでスキーにいくお



とうさんにあいました」と小学低学年の頃の日記に書いていたのです。この少し前まで、一兵卒として高知で米軍の上陸に備え壕を掘っていたはずなのに！

良いお仲間にも恵まれかなり高齢になってからも山やスキーに行っていました、ここ十年ほどはさすがに室内での体操に切り替え、ヨガ、太極拳、ストレッチ等々自分流に組み合わせたメニューを一時間ほどかけて毎朝実行していました。五体投地もどきの動作の際に一回「こと」に手を打っていた、パン！という音が今も耳に残っています。

世の中のことに対する興味、考えかた、それを話す様子には少しはらはらさせられる面がありました。叔父の追悼文にある少年時代の父に、すでにその片鱗が見られ、叔父は気の毒な被害者だったようです。

お酒と共に話のキャッチボールが好きだった父の変化球を「右から左へ受け流し」、相手をしていた母が先に亡くなってしまう寂しかったことと思います。

孫が相手だと舌鋒は少し鈍り、私の長男が小学校低学年のころの会話です。

「アメリカとソ連（ベトナムか中国だったかも）どっちが強い？」

「……強い方がよい……」

なんだか禅問答のようなやりとりで可笑しかったのを覚えています。それに対する孫からの返球はありませんでした。

父が戦前から一日も休まずつけていた日記の二〇〇二年十一月十六日。「十一・徐園、恒例の同窓会、一のテーブル、名簿二番、仕方なし。幸い背中合わせの三のテーブルに観、豊浜平山、果たせるかな平山写真館。話がはずむ。会の盛り上がり、時の経つのも忘れたほど。」と書いています。

毎年、同窓会への出席がその一年元気で過ごせた証しであつたかと思われまします。そして又、三中卒業後、軍隊の四年間を除き九十二歳で人生を終えるまでの殆どを関

西で暮らした父でしたが、故郷への想いは消えることがなかったのでしょうか。

父が名簿二番に上りつめるまで親しくお付き合いました。いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

#### 経歴

田中 照三（たなか てるぞう） 本名（輝夫）

大正二年香川県観音寺市（旧三豊郡）豊浜町に生まれる。昭和六年（一九三一）香川県立三豊中学校卒業。

昭和九年京都高等工藝（現・京都工芸繊維大学）卒業。阪急電鉄に入社。宝塚劇場課勤務、舞台背景・美術デザインを担当。田中良・荒島鶴吉両氏に師事。戦後大阪を中心に舞台活動、諸劇団の舞台美術を担当し、数々の舞台美術を手がける。

関西の各劇団研究所講師・浪速短期大学講師・大阪芸術大学舞台芸術科専任教授・㈱つむら工藝顧問・訪中友好新劇代表・日本舞台テレビ美術家協会常任理事

及び関西支部長等を歴任。

#### 作品歴

宝塚歌劇団「アメリカン・ラブソング」 関西歌劇団「カルメン」 大阪音楽大学「ドン・ジョバンニ」等 オペラの舞台も手がける。演劇界では関西劇団の数々の舞台を手がけ、関係の無い劇団は殆ど無いくらいである。

#### 受賞歴

大阪府民劇場奨励賞 大阪府知事賞 伊藤薫朔賞、「阿Q正伝」の舞台）日本芸能美演家団体協議会表彰。

## 兄貴のこと

三中・35回 田中 岑



わたしの兄は輝夫。幹事長の合田さんは照三様。大阪同窓会では、なんと呼ばれているのだろうか。「てるさん」「てるぞう」「てるさん」は舞台裏方での呼び名であ

ろう。裏方の仕事はきびしく、正確と早さが要求される。「てるさん」はそのつかのま、ほっとさせる響がある。兄は阪急本社の社員として務めあげた。宝塚歌劇のポスターでは「輝夫」、そして青猫座、関西オペラでは「照三」であったと記憶する。

わたしは兄を「あんちゃん」、「にいちゃん」。昭和天皇即位の祝太鼓がなっていた。父が死んだ。葬儀の列がつづいていた。兄は、「下を見るな。真直ぐ前を見て歩け。おれからはなれるな。俺についてこい」と云った。

雪のつもった朝だった。庭の白い雪の中で、アルコール・ランプの、がもえていた。兄は「メダルを持ってこい」とわたしに命じた。仏壇の脇に、母がそっと供えたメダル、即位記念の全国児童画展「小使さん」のメダルだ。兄はビーカーのにえたぎる湯の中にボン。ぐらぐら。メダルの残骸は鉛。メダルのみにくさ。わたしはかな

しかった。メッキにたぶらかされていたことがくやしかった。追い打ちというのだろうか。「金も銀もあるものか」と兄。

中学生の兄たちは大きく、たくましく、大人っぽかった。限りなく、ねたましかった。夏の一日、浜辺のぼくたちを小舟にさそった。浜の波と沖の浪は違っていた。小舟からぼつり出された。はじめての海のこわさ……。

岑。失礼「たかし」と読む。岑六才の写真があった。兄は白線二本の学帽。仕立上ったばかりの制服姿。わたしの肩に手をかけている兄。わたしも姉も白の装い。なんて、いい写真があった。

「おお、もう朝か」、兄とわたしの大阪の夜はチビリチビリと朝までつづいた。酒の肴は、なんの話でもない、前のテレビの映像、身辺閑話であった。限りなくつづき

限りなく酒をのんだ。兄はほんとに、酒ずきだった。

わたしは、好きとはいえない。芝居のおもしろさは芝居のあとにつづく……チビリチビリ、兄との余韻が好きだった。

兄は二十七回・昭和六年卒。わたしは三十五回・昭和十四年。合田さんは四十回、昭和十九年。これが同窓会誌のおもしろさだろうか。

校舎と先生。旧制三豊中学の模型があった。どうなっているのだろうか。

エ  
ッ  
セ  
イ

## 十二世紀ルネサンス（其の二）

三中・39回 小林 多聞

シリア・ヘレニズムとアラビア・ルネサンス

十二世紀において西欧世界がアラビア文明圏から優れたギリシヤ、アラビアの学術を受けとつたのですが、当のアラビア世界は一体いつどのようにして、そのようなギリシヤの優れた科学の伝統を我がものとし、またそれを自分の文明圏の中で、さらに発展させたのでしょうか。アラビア人というのはもともと砂漠の民で、何もとりたてていふほどの学問的遺産はなかつたはずなのに、十、十一、十二世紀ぐらいにわたつて高度の、とくに科学の領域において世界最高の学術的水準にありました。それはシリア・ヘレニズムとアラビア・ルネサンス（アッパース王朝）によつて進歩したわけです。

ギリシヤに於ける科学發達の段階

まず、アラビアにその科学を伝えたギリシヤ科学について説明します。第一段階はギリシヤ本土ではなくてイオニヤ、イタリヤの植民地で起つた科学的な思弁で、タレス、アナクシマン드로スからパルメニデス、ピュタゴラスを経てデモクリトスに終る、前六世紀頃から前五世紀にかけてのものです。これを「植民期の科学」と云います。第二段階は、そうした萌芽的の科学が、ギリシヤ本土のアテナイに移り、さらに体系的哲学的に發展する時期で、アナクサゴラス、ソクラテス、プラトン、アリストテレスに結実するのですが、それが前四世紀ぐらいにピークに達します。これを「アテナイ期の科学」と名付けることにします。第三段階は科学の中心がエジプトのアレクサンドリアに移り、非常に高度な精密科学が専門的に發達を遂げる時期でユークリッド、アルキメデス、アポロニオス、プトレマイオスなどに代表されます。これは大体前三世紀から後二世紀ごろまで続き、これをへ

レニズム期の科学」と名付けます。そしてギリシヤからアラビア世界にとり入れられた科学は、第二段階のプラトン、アリストテレス第三段階の「ヘレニズム期の科学」つまりギリシヤの最高の精密科学でした。

#### ギリシヤ「ヘレニズム科学」の行方

東西ローマが分裂した後、ギリシヤ語を用いる東ローマ帝国すなわちコンスタンティノープルを中心とするビサンチン帝国の方にひき継がれ、そしてラテン語を用いる西ローマ帝国、我々のいう「ローマ世界」には殆んど入ってゆかなかつた。そして第一段階では、ビサンチン文明圏からシリア訳されることによってシリア文明圏に移されます。これが五世紀から七世紀のことで、シリア語によるヘレニズム文化を「シリヤヘレニズム」と呼びます。第二段階ではシリヤ文明圏に入った「ヘレニズム文明」が、イスラム帝国のアップス朝時代にアラビア訳され、アラビア文明圏に移され、さらには直接ギリ

シヤ語からアラビア語に訳されて、ギリシヤ科学の第一級の遺産が大量にアラビア世界に受けつがれます。これが八世紀から九世紀にかけて起り、これを「アラビア・ルネサンス」と呼びます。

#### シリヤ・ヘレニズム

東ローマ帝国 いわゆるビサンチン帝国を追われたネストリオス派らの異端キリスト教徒が西アジアの地域にギリシヤ文化を自覺的に伝播させた結果であります。ネストリオス派は四三一年のエフェソス宗教会議で異端とされ、ビサンチンのギリシヤ正教会を追われます。その説は、キリストは生まれた時は人間であつたが、あとから身中に口ゴスが侵入して、神になつたという説で、キリストの中に神と人間ふたつの性質があるという両性論です。異端とされたネストリオス派の人々は、エジプトに逃れますが、そこで布教の足場を得ることができず、西アジアに移り、ここのシリヤ語を話すキリスト教徒の

間で自由な発展をとげることが出来ました。最初メソポタミアの北方のエデッサという町のキリスト教の学校で、シリア語をもって布教をすすめ、勢力を拡大していましたがエデッサはビサンチン帝国の領土だったので追われて、サザン朝ペルシヤに頼ってニシピスに学校を開き、ペルシヤにおけるネストリオス派の活動の中心としました。

一般にキリスト教を広めるに当って、そのキリスト教神学の背後にはギリシヤ哲学があり、この哲学を用いて神学をつくっているのです。従ってキリスト教神学と一緒にギリシヤ哲学を教え広めてゆかねばならないという関連があるわけです。又ネストリオス派はビサンチンのギリシヤ正教会に迫害されていましたので、それまで使っていたギリシヤ語に何ら愛着はもたず土着のシリア語を使いシリア訳された聖書神学書哲学書を用いました。その結果として、アリストテレス、プラトンの哲学が更に当時の科学は哲学と分離していませんからギリシヤ科学

が、又天文学や錬金術や、医学の書物もシリア訳されて西アジアの地に拡がることになりました。

更に、このシリア化された科学はサザン朝ペルシヤの冬の離宮のあった都市ジュンディー・シャープルという所に移って行きます。そしてホスロー一世（五三一年五七九年）が即位しますと大研究所を作り、これに附属病院や天文台を設置して医学、数学、天文学などの研究を奨励しました。ここでの教育はシリア語で行なわれ、カリキュラムの必要上、ガレノスの医学書やヒポクラテス医学の抜萃、アリストテレスの論理学、それに天文学や数学の諸著作もシリア訳が作られました。また五二五年ビサンチン帝国がアテナイの学校を閉鎖した時、その優れた学者を進んで受け入れ、インドの学者も招聘したので、ジュンディー・ジャープールにはギリシヤ、インド、ペルシヤの伝統的文化が渾然一体となって、当時最高の文化的総合が試みられました。次に来るアラビアルネサンスの科学文化の一つの大きな支柱となったのは、



このジュンディー・シャープール出身のネストリオス派の人々でした。

シリアヘレニズムのもう一つの担い手は、異端キリスト教の分派、単性論者でした。この説は、キリストの人としての性質を全く否定して、始めから神としての性質だけしか認めない異端です。それでは正統派はどういう説かといえば、神と人と聖霊との三位一体を認める立場です。この単性論者も、四五年カルケドンの宗教会議で異端と宣告され、シリア、メソポタミヤ地方に出て、学校を建てるのではなくて修道院に於いてキリスト教神学や、それを基礎付けるギリシヤ哲学、更にそれに結びついたギリシヤ科学の優れたシリア訳をつくり出します。この単性論者のうち、偉大な学者の一人は六世紀のラシヤイナのセルギオスです。彼は医学、哲学、天文学について多くのギリシヤの著作をシリア訳し、またそれについて独創的論文をものしました。もう一人の最高の学者はケンネシユレーの修道院から出た七世紀後半のセヴ

エルス・セボクトです。彼は神学書も書きましたが、アリステレスの「命題論」や「分析論前書」「分析論後書」のすぐれた注釈を書きました。宇宙論、年代学、地理学について著作があり、1234…というインド記数法を紹介したのも彼でした。今はアラビヤ数学と言っていますが。

ギリシヤの学術が、ギリシヤ世界を越えて、西アジアに、そしてついにはアラビアに伝播するきっかけとなったのは、異端キリスト教徒がビサンティン帝国を追放されたが故でした。彼等が追放されたため、それが結果として、サザン朝ペルシヤやシリアのヘレニズム化を惹き起し、やがては「アラビア・ルネサンス」に連なっていたのです。強制されたエクゾダス（旧約聖書、エジプト大移動 大逃亡。）が文明移転にとって、結果的に重要な原因になったのです。

## アラビア・ルネサンス

イスラムの勃興以前のアラビア人は砂漠のベドウィンとして遊牧と略奪と通商との生活を続けていましたが、しばしば部族間の対立闘争にふけていました。しかし七世紀始めムハンマドが出現すると部族対立に終止符をうち、イスラムの宗教の下、一致団結し、またたくまにアラビア半島を統一、エジプト、メソポタミアに侵入、ウマイヤ王朝の時は、東は中央アジア、南はアフリカの北部、西はイベリヤ半島の南部にわたるアラブの征服事業に一段落がつけましたが、ウマイヤ王朝は十二代八十八年の後、打倒され、七四九年アッパース王朝が開かれました。このアッパース王朝の成立はイスラムの歴史における一つの大きな転回点を形成します。それはイスラム世界のペルシヤ化ということです。すなわちアッパース革命を計画し遂行し、成功させたのはホラーサン地方のペルシヤ人であり、この王朝の政治首脳部もまたペルシヤ人で占められ、この王朝自身の家系もペルシヤ人と

の結婚によってペルシヤの血を濃くして行きました。たとえば初期アッパース王朝の歴代宰相を輩出したバルマク家もホラーサン地方の出身でバルマク家のギリシヤ文化愛好は、アッパース王朝に活発なヘレニズム化の運動をまき起し、七六二年に首都となったバグダードを中心として、ここにギリシヤ文化研究が急速に勃興し、アラビア・ルネサンスが見事に花開くのです。そしてギリシヤの学術が栄えていた前述のジュンディーシャープールから多くの学者が招かれ、その最も有名な一人は、ジュンディーシャープールのアカデミーの学頭をしていたネストリオス派のペルシヤ人ジルジース・イブン・ブフティーシエーです。彼の来訪がアッパース王朝下の真の科学的活動の開始を意味します。

七八六年名君ハールーン・アッ・ラシードが第五代カリフとなるや、彼の治下にイスラムのヘレニズム運動は最高潮に達し、アラビアに於いて文化的黄金時代を現出させます。ラシードは前からシリヤ訳されていた多くの

ギリシヤの科学文献をアラビア訳させ、さらにギリシヤ語原典からも、アラビア訳をさせました。その中にはユークリッドの「原論」やプトレマイオスの「アルマゲスト」プラトンの「ティマイオス」やアリストテレスの自然学諸著作などのような多くの重要な書物が含まれていました。さらに第七代カリフ、アルマムーンもアラビアルネサンスの強力な保護者となり、八―五年頃、バグダードに「知恵の館」と称する研究所をつくり、それに大規模な図書館や天文台を附設し、多くの学者文化人を集めて研究をさせました。この時期アラビア人科学者もきら星のごとく輩出しますが、略しましてギリシヤの科学文献をシリヤ訳を介してか、又は直接にアラビア訳することにして最も重要な貢献をした、二人の人物についてだけ述べることとします。

その一人はフナイン・イブン・イスハークです。彼はユーフラテス河畔のクーファ近郊の出身でネストリオス派のキリスト教徒の薬剤師の息子として生まれ、ジュン

ディー・シャーブルの学校に入り、医学を学び、バスラに於いて、アラビア語を本格的に学び、バグダードに来てガレノスの医書の翻訳をしました。そしてカリフ、アルマムーンに紹介され、「知恵の館」における翻訳の仕事を委され、そこで多くの協力者を得て、ガノレス、ヒボクラテス、(医)ユークリッド、プトレマイオス、アリストテレスその他のギリシヤ科学者を殆どすべてアラビア語に訳しました。もう一人は、サービット・イブン・クツラです。彼はエデッサの近くの両替屋の息子として生まれ、ギリシヤ系の異教を奉ずるサービア教徒でした。バグダードに迎えられ、ギリシヤ学術書の翻訳に専念しました。アポロニオス、アルキメデス、ユークリッド、テオドシオス・プトレマイオス、ガレノス等々ギリシヤ科学の重要な著作が、アラビア訳され、フナインの訳の多くも彼の手で改訂されました。

十二世紀ルネサンス（アラビア 西欧）

シリア・ヘレニズム 五世紀から七世紀にかけて、ピサントインのギリシア文明がサザン朝ペルシヤを中心とした中東地域一帯にシリア語に翻訳されて伝達された文明移転。

アラビアルネサンス 八世紀中葉から九世紀にかけて、ギリシヤの学術文化がペルシヤ人の協力でバグダードを中心にアラビヤ訳されアラビア文明圏に伝達され復興された運動について述べました。そのギリシヤ文明の遺産をさらにバビロニア、エジプト以来のオリエント文明、ペルシヤ文明、インド、中国の文明の一部もとり入れて発展させ、アラビアの学術は十一世紀において頂点に達します。十二世紀にルネサンス これを今度は西欧世界がとり入れて、自己の文化の土壌の上に発展させてゆくことになるのですが、先ずアラビア語からラテン語への大翻訳時代となるわけです。教養ある西欧人がラテン語を習った意味が理解出来ます。

そのセンターは、スペインのトレード、シチリヤ島、

北イタリアの三センターであると前述しましたが、西欧とアラビア文明の接触は十二世紀よりも早く、十世紀の中葉に北東スペイン、カタロニアで始まります。カタロニアは一時はイスラムの勢力圏にはいり、後にはバルセローナ伯領として西欧文明圏に属したというように西欧とアラビアの接点でありました。こういう地域には「モサラベ」（アラビア化したキリスト教徒のスペイン人）が数多くいました。彼等はイスラム領主に仕え、アラビヤ人と平和的に共存し、この地域が西欧文明に入った時、アラビヤ文献をラテン訳して、アラビヤ学術文化を西欧世界に伝える役割を果すようになりました。又この地方の知識人も、アラビヤ文明への憧憬は大きくモサラベやユダヤ人を介して接触を保とうと望んだのです。その資料がカタロニア、ピレネー山脈のふもとへのネデイクト派の修道院サンタマリア・デ・リポールの写本のなかに見出されます。

参考文献

十二世紀・ルネサンス 伊藤俊太郎著 岩波書店  
ルネサンスは何であったか 塩野七生著 新潮社  
新潮社

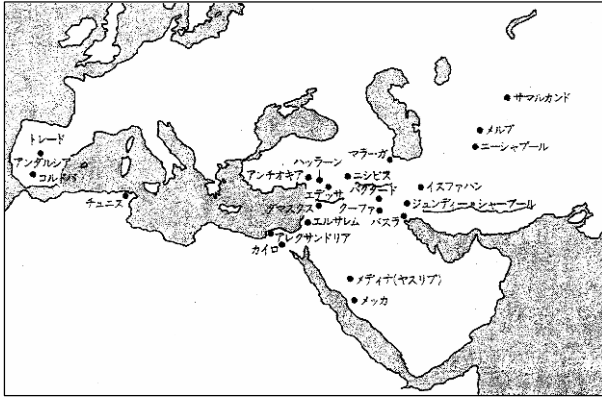


図6 アラビア科学圏

廣兄（ひろにい）さん

三中・40回 合田 重隆

廣兄さんは家庭の事情、時代の変化とは言え大きく揺れ動いた人生だった。

七歳にして母を亡くし、伯父の家に引き取られた。学校の成績が良くて北海道帝国大学を卒業し、学徒出陣で海軍航空隊へ入隊した。そして、海軍航空特攻隊長となり二十年八月十六日には敵艦めがけて出陣待ちしていた前日の十五日に終戦の詔勅が下った。

米占領軍が上陸して来ない内に、即刻自宅へ帰れの命令が下り、東京の焼け残った土蔵倉に父を訪ねて戻って来たというのである。

神の仕業か仏の守護か、時代は百八十度転換し新しい道へ入って行った。

国のために一身を捧げた廣兄さんは、平和産業の立役者となった。

川鉄が千葉に大規模工場建設するにあたり、帝国大学土木科出身者募集に応募して採用された。

それが、溶鉱炉とストリップ・ミルの建設で、日本最大級の工事だった。

廣兄さんの伯父は私の父であり、私は廣兄さんより八歳年下の従弟で、廣兄さんと呼び重ちゃんと呼ばれていた。私が小学生となりもの心ついた頃には廣兄さんはもう中学生だった。中学校を卒業するまでは同じ釜の飯を食った仲だった。やさしい兄を持った嬉しさは忘れられない。

川鉄に就職が決まる前に廣兄さんに嫁とり話があり、私は釣り書きと写真を持って大阪にいた廣兄さんに「見合いたないか」と話しに行った。写真と釣り書きを見ながら「きょう返事があるか」というので、「釣り書きと写真では結婚は決められないだろうから、見合いするかどうかの返事を貰えないか、結婚を決めるのは会ってからにしたらどうか、遠路来たのだから見合いだけは欲しい」と言うことで見合いすることにしてもらって帰って来た。その甲斐あつてか、愛媛の享子さんとの結婚が決まった。

当時は結婚式場もなければ、食料もない時代であった。私は鶏の雛を三十羽育てて若鶏のササ身を食料にして結婚式の料理を作ってもらい両家の結婚式が行われ、めでたく二人は我が家を旅立って行った。

その後、千葉川鉄の仕事をするようになった。ストリップ・ミル（鋼板を圧延する装置）は戦後、造船、車両から始まり、住宅、弱電、自動車と新時代の産業に原材料を提供し、大事業達成のため生涯を川鉄に尽くした。歳月は流れ、平成十年頃、私は廣兄さん、享子姉さん、私の弟にも会いたくて千葉へ出向いて四人で会食した。廣兄さんは豊浜でいた頃の積もる話をして懐かしそうだった。体調が余りすぐれないようで、これが永のお別れ

になるのではないかと思うと目頭が熱くなるのを覚えた。廣兄さんの学生時代、海軍時代、川鉄時代は、すばらしい男の人生だった。海軍航空特攻隊長の私の廣兄さんは、愛しまれて千葉川鉄の華と散って逝った。

八十四歳だった。

「廣兄さん（ひろにい）さん」

三木廣信は三豊中学三十二回卒業で、

二六〇 〇〇一六

千葉市稲毛区天台三 一一 三

三木廣信（故人の妻享子）

## サヌキ豊浜ちようさ祭り

三中・40回 合田 重隆

サヌキ路に秋祭りの季節がやってきた。豊作、豊漁、商売繁盛に感謝し、一家の健康と災害のない平安を祈る祭りである。祭りは毎年十月の第一週の金、土、日である。

人口九千の町に二十三台のちようさが一宮神社に終結しての「かきくらべ」は華麗さ壮麗さにおいて他に比類がなく、まさに日本一と自負してはばからない。

初日の氏参りの日は、夕方からちようさが提灯に灯りをつけて、氏参りに行き、今年も無事で、よい祭りが出来ますようにと祈る。

ちようさの語源は、昔、高松藩へ亡命してきた中国の張さんが太鼓台を作ったので、その名前をもらって「ち



ようさ」と付けた  
といわれている。

祭り近くなれば、金木犀の匂いが漂い始める。待ちかねたように何処からともなく「どんでんどん」と太鼓の音が聞こえてくる。

一の宮神社のかき比べが盛んになりだしてもう二、三十年にもなるが、年を重ねる毎に観衆が増えて今では五万人ともいわれ、かき比べの境内は超満員である。

三台の神輿を一宮神社のかき比べ広場に迎える三時頃、揃いの法被姿の若者達が担ぐ二十三台のちょうさが祭りの総指揮者のマイクに誘導され、観客の拍手にむかえら

れながら「どんでんどん」と太鼓を打ち鳴らし、かき比べ広場に入ってくる。

いよいよかき比べの時來たる。私は数年前に南陽ちょうさの責任者をした。

賞を競って必死の戦いが始まり、一番から順番にちょうさを担ぎ出す。もう最後の方となり「次は南陽ちょうさ」と放送があった。さあ来たとはかり全員の気持ちが一いつになつて担ぐ。足並みを揃えて「ちょうほうさじや、ちょうほうさ」の掛け声で歩き出す。私は後から見守りながらついて歩く。もうみんなは汗だくたくである。

広場を一周して三台の神輿と審査員席の前で足を止めて、一、二、三の掛け声で「そらーさせ、そらーさせ」と三回差し上げる。差し上げた百人の手と足がしつかりと伸びてちょうさが宙に舞った。その姿を見て私は「よっしゃやったぞ」大声を挙げた。握っていた拳が汗びっしょりだった。ちょうさを取り囲んだ五万の観衆から南陽ちょうさが拍手をもらったように感じた。拍手の鳴り方の



多少で賞の順位が決まるという。

こんな男祭りに魅せられてか、南陽ちようさの中に若い女性の粹な法被姿の担ぎ手が混じっていた。

結果発表。「優秀賞南陽ちようさ」と高らかに発表があった。南陽ちようさ初まつてのことだった。

優秀賞を貰った感想はと、テレビ記者のインタビュに答えて若者は「この日、この見せ場があるからこそ、わし等は一年間仕事に打ち込めるのだ」と息をはずませながら言った。若者たちは今、「サヌキ豊浜ちようさ祭り」を平成の豊浜祭りにしようとしているのだ。

#### 評

讃岐秋祭りは東讃が獅子舞や屋台だが、坂出より西は「ちようさ」（太鼓台）一色。中でも豊浜は一台一億円といわれる「ちようさ」が二十二三台も勢ぞろいする。そこが書けている。

（四国新聞読者文芸随筆選者 佐々木正夫）



## 洞窟の仏

三中・41回 東 忠

子供の頃は洞窟、洞といえは何か暗く、おどろおどろしいもので、悪童どもの冒険心もあつておそるおそる洞にもぐり込んだ覚えがあります。この冒険心、探検心は長じてもあるようで、大学に探検部なるクラブ活動もある昨今です。

日本には洞窟が三千以上もあるといわれ、縄文遺跡が多く残つており、当時の人々の住居の跡であり、時には砦として使用された跡もあります。

更に時代のたつにつれてこれらの窟が、修業者の住居となり、修業の場所となりました。これ等の例としては、近くは、高知県の室戸岬にある空海の修業の窟があり、訪れた者に、空海の大洋に対峙し、悟りを求めた姿を想

い出さしてくれるところです。

修業の場所としては、日本のみならず、海外、特に印度では、デカン高原の西部に、エレファンタ島の大石窟、エローラー、アジヤンタの大石窟が有名で、これ等については少し詳しく後述したいと思います。

洞窟は後世に至り、戦争の舞台として使用されることになります。比国のコレヒドール、沖縄、硫黄島等多くの激しい戦争地域となった洞窟。或はルソン島南部のマヨン火山の山麓にある洞窟には今も、戦死者の遺骨の断片が残つております。暗い洞窟で、只管冥福を祈るのみでした。

日本では鎌倉宮の近くの護良親王幽閉の小さな土牢があり悲しい洞のひとつです。

土牢ツバナに茅花流しのせつせつと

ただし

紀州の雑賀崎には、かつての修業の洞、更には平家残党の隠れ洞が、断崖に残っております。

閉ざされし岩屋真下に秋の波

ただし

洞窟には自然のものと人工的なものがあります。自然のものは主として鍾乳洞をさす場合が多く、中国地方の秋吉台、高知の竜河洞等が有名です。これ等に対し、岩山を掘削したものではありません。信州に大本宮を移す予定で戦争中に掘られたものや、先述のコレヒドール、沖縄等がこの範疇に入ると思います。

印度のエレファンタケープは、駐在時代に何度も訪ねた小さな島の大石窟で、大僧院窟となっており、真中にシバ神の大彫像と、大きいストーパーが安置されており、ボンベイからアラビヤ海に浮ぶこの小島に多くの人々が船にゆられて来ます。ストーパーの廻りを多くの人々が取り巻き祈りをささげており、その姿は敬虔に満ちたものでした。

次にエローラーと、アジャンタの石窟寺院について述べます。エローラーは岩山を上から手彫で掘り下り、壮大な石窟寺院を掘り上げたもので、ヒンドウ教、ジャイナ教、仏教の三つの窟に分れており、五百年以上の年月

を手掘りで掘り出したもので、多くの彫像と門柱、壁画があり、その精力には驚くばかりです。

次にアジャンタ大石窟群は、仏教の修業僧の生活と修業の跡であり、紀元前二世紀に仏教僧が住みつき、順次僧院、塔院を拡大していったが、この小乗仏教は急激におとろえ、数世紀後に大乘仏教として復活したものの、これまた衰退し遂にアジャンタは密林に覆われ姿を消しました。一八一九年に至り、英国の軍人によって発見され一躍有名になったものです。

内部は仏像彫刻壁画が立派に残っており、印度の誇る至宝となっております。少し前までは窟内は電燈がなく、外部の日光を鏡で反射し仏像や壁画を鑑賞しておりました。寺院の中心に仏を置き、仏の一生を壁画に描き、これは日本の法隆寺の見本になったとも言われております。

夏の日の鏡で照らす窟の闇

ただし

苦行僧の住みし窟とや闇涼し

ただし

モンソーンの集中的な水の来襲をさけて、溪谷にそつ

た岩石に横穴を掘り、自然に向き合って、仏に祈った先人の姿が感慨を込めて見ることが出来ます。

仏教は十一世紀頃より回教により圧迫を受け衰退し、現在は印度全人口の1%を切る程度になっています。併し遺跡に見る壁画、仏像等による当時の王宮文化、女性像に見る絢爛にして魅力的な美しさ、そして仏の涅槃像を通じて仏教の全盛期を見ることが出来ることもに時代の栄枯盛衰を知ることが出来る洞窟に思いは尽きないものがあります。

夏日受く窟に眩しく大壁画

ただし

現在国際地政学上も大きく注目されているインドは、急速に変化しており、大都市の近代化と生活の西洋化は著しく、七割を占める農村地との生活面での格差は大きくなっております。その農村、山間地域では今も昔のままの生活様式が残っており、これからの発展改革が待たれております。中国に次ぐ人口十億の大国インドの目覚めがひしひしと伝わって来ます。古い遺産の洞窟の仏に

光がさし、多くの人々の目を引きつけるのも近いと思います。オーランガバードに一泊し、エローラー、アジヤンタを見学するのも印度の一面を知る上で意味あるものと思います。

石窟を出つや地平に夏日落つ

ただし



## 短歌にたどる書家の旅

三中・44回 六吹 義教

生れ付き文字の拙い私にとって、書道展は、無縁の存在だが、いつの頃からか、柄になく県展とか市展とかへ頻繁に顔を出すようになっていた。顧みると、それが二十余年もつづいている。よくまあと、我乍ら驚いている。

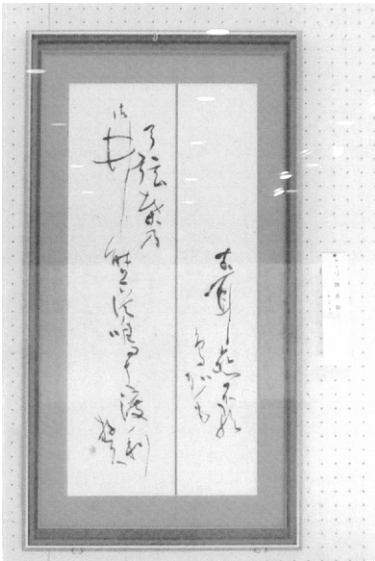
切っ掛けは、どつやら弓削香仙なる女流書家のいざないによる。回数を重ねるにつれて、門前の小僧よろしく、尤もらしい書道通の振りをするようになっていたが、どうしてどうして、書についての見識もなければ、悪筆も能くはならない。

今年も一月に愛媛県立美術館へ出かけた。「書界展」が開られていたが、その作品は、艱深の辞めく漢詩のオン・パレードである。中学時代に習った漢文を頼りに、

逐語訳しても、書の鑑賞には程遠い。うろろろしているうちに、香仙書と落款の作品に面通し、と相成った。折角の招待主への敬意とばかり、恭しく作品の判読にこれ努めた。

功を奏して、臃げながらも、万葉集の弓削皇子の御歌であるらしいことが判った。

いにしへに恋ふる鳥かも弓弦葉の御井の上より鳴き渡り行く



吉野で詠まれたもの、皇子の八首あるとされる歌のなかの一首である。

香仙のあてやかな筆運びが万葉仮名を弥が上にも引き立たせ、歌意の奥ゆかしさを深めるかのようだ。「源氏物語」の梅枝の源氏に肖あやかつて、「たとふべきかたなし」「見所限りなし」とばかり嘆賞に耽たつた。

香仙こと弓削香代子さんは、松山市在住の書師で、昭和二十三年に香川県立三豊高等女学校を卒業している。その彼女が卒業後に三十年も過ぎて、愛媛県の書道界に彗星のように現れ、県展、市展、毎日展などへ数多くの作品を出展し、特別賞をつぎつぎと受賞する栄誉に浴しているのである。

ところが、観音寺一高の卒業生は、その一部を除き、その名が知られされていない。誠に残念至極といわざるをえない。

これまで書道一筋に打ち込み、同窓との繋がりを深める機会を逸した結果であるが、少しでも知名度を高めたい、

との思いで、ここに拙い筆を執ることとした。書道界独特の用語に不慣れなので、あるいは的外れな語も使うかも知れないが、ご容赦願いたい。

父親ゆずりの能筆が今日の香仙を生んだことは、勿論だが、それだけでは、決して香仙は、功成らずであろう。三女卒業後、順風満帆の半生であれば、恐らく香仙の名は世に出なかつた。突然降つて湧いた不幸に、一時は頓挫しかけたが、懸命に立ち上がり、苦難の道を切り拓いた。その成果が艱難汝を玉にしたものである。その経緯を振り返ってみたい。

香仙は、昭和二十年七月四日の高松空襲に遭い、高松高等女学校を離れて、父母の実家である三豊郡常盤村へ転居、三豊高等女学校の三年に編入した。

作家の高橋和巳氏も同年輩だったが、和巳は、「わが体験」と題する一文のなかで、

「敗戦間際（昭和十九年）に田舎に避難した中学生」と自己紹介をしているが、香仙は、和巳に遅れて一年後

に

「敗戦直後の九月に田舎に避難した女学生」ということになる。

和巳は大阪、香仙は高松、それぞれ家を焼け出された転校生である点で、境遇が似ている。

香仙の父、弓削八十一氏は、大正十五年に豊浜警察署長を皮切りにして、香川県下の警察署長を歴任、晩年は、郷里の村長などを勤め、清廉潔白の士として信望の厚い方だった。藤田東湖に心酔し、「正気歌」の遺墨が家宝になっている。

香仙は、小学校時代の恩師の影響を受けて、短歌に熱をあげていたので、転校後、何のためらいもなく、短歌班に入部、乙女の情熱を傾けていた。その才は、すぐ頭角を現し、文化祭では、つぎの応募作品が一席に入選している。

わが校の幸祈ること青空に今日も舞ひ来て鳶の輪をかく

「鳶の輪をかく」という感性が鋭く、女学生の作品としては仲々の秀作といえよう。母校を讃えるものとして、今日でも立派に、通用しそつである。さらに発展して、全校生を一堂に会して「短歌について」と題するスピーチを、一席ぶつた。などと思えば尽きない。

六十年経つた現在も、当時の片鱗を覗かせる歌集が書架の一隅を飾っている。

斎藤茂吉「朝の螢」、島木赤彦「十年」、窪田空穂「槻の木」、若山牧水「野原の郭公」、北原白秋「花檜」、与謝野晶子「人間往木」

いずれも昭和二十二年版もので、当時の女学生の小遣いとしては、よくぞ買ひ揃えたものだ。ただ、白秋の「花檜」の奥付には、つぎのサインが記されている。

一月二十五日に姉からの誕生祝いのプレゼント  
短歌の熱の入れ方が家族ぐるみであったようだ。

三女卒業後、程なく結婚。平穩な生涯を過しつつ、主婦の手慰みに作歌をつづけるもの、と思われた。がそう

であれば、人の感動を呼ぶような歌は到底生まれるものではない。詩の女神は、香仙を眠りの森にとどめることをしなかった。苛酷な試練の鞭を揚げたのである。

不惑の四十路を過ぎて、有ろう事か、夫の不実がもと  
の離婚という破局を迎えさせられた。

着の身着の俵で路頭に迷い出たのである。

歎く間を吾はもたざり職と家ひたすら求め雨の街

ゆく

それまで詠んだ歌とは、打つて変り、どん底の苦悩の  
喘ぎに堕ちた。詩の女神の思つ壺にまんまと、はいつた  
感がする。

いくら歎いても悲しんでも、所詮、生きてゆくためには、  
生活の糧が必要になる。数少ない短歌の仲間を伝に  
して、職探しに奔走した。

吾が生くる意もわからねば耐へがてに夜の鉄路を

歩みし日あり

自殺のほのめく痕跡がある。気丈夫な香仙もつつ病が

かげろつているが、心の傷は容易に癒ゆるものではない。  
漸くのこと、短歌誌の印刷会社に糊口の道を得ること  
ができた。

短歌の吐け口があつたために、齒を食いしばって苦悩  
に耐えることができたようである。彼女の後日談に

「私の狂気を一歩手前で踏みとどまらせてくれたのは、  
ほかならぬ短歌だつた」

という件りがあるが、然もありませんらう。

^幸せといふことしきりにおもふ夜独り職場の掃

除しに来る

職に就いている多少のゆとりが芽生えている詩である。

だが、勤めとは言つても、そこが零細な会社ゆえ、給金  
は雀の涙である。日々の生活たるや、赤貧洗うがごとし。

寒中として炬燵一つもない。パンの耳で飢えを凌ぐことも  
再三だった。爪に火点す譬さながらで、肉食などには無

縁の才月が数年続いた。むしろ臥薪嘗胆に近い日々だつ  
た。と表現した方が適切なのかも知れない。



そうこうしているうちに、好きな短歌にしがみついて、  
飢えを我慢しているだけでは、先行きどうなるのだろうか。  
不安が湧いて来る。老後を考えると、不安はつるるばかり  
だった。

何か資格めいたものでも身につけないと、と焦るもの  
の心当りはない。「書の道」を歩んではどうか、という父  
の勧めに耳を傾けるようになった。それまで、書で身を  
立てるなどは、思いも至らなかつたが、思い立つと、  
筆慰みが好きだけに、寸暇を惜しんで筆を持ち、嘗々  
と独学独習に励んでいた。やがて、数年も過ぎ、温く  
見守ってくれていた父が逝去した。

いまわれのなすべき知らず体温の冷えゆく父の脈  
さぐりつつ

父の他界を機に、意を決して昭和四十九年書界社に入  
門した。

文部省認定硬筆一級、同書道一級と資格を取得したの  
も、この頃のことである。

昭和五十年、愛媛県展に初入選した。書家のスタート  
が切られたわけである。

わが文字の亡父の字に似て書きゆけば不思議さつ  
のる血といふものの

今日まで、五度に及び毎日展の秀作賞の受賞、その上  
での毎日書道会会員、さらに美術会会員、書界社理事等々  
と肩書きもふえて、いまでは、五十余名の塾生の指導を  
手掛け、極めて多忙な日々に没頭している。

香仙の書風に触れておく。師の真鍋土鴻氏は、つぎの  
ように評している。

「外柔内剛、高い技術性を感じさせる。自然な筆のわ  
れ、大小潤濁の変化が実に美しく、何よりも真剣さの漲  
りが良い」

日夜寝食を忘れて研鑽に励んでいる女弟子に対して、  
掛値のない讃辞である。書は人であるといわれている  
が、謙虚でありながら芯が強く、潔白な人柄がそこはか  
と漂っている。

作品一つを完成するのに、数百枚の書き直しを欠かせない、と聞く。そんな彼女も、料紙に対しては、心の咎めがあるらしい。

わが書いてわが反古にする幾枚の紙の生命を思ひ  
かなしむ

われわれの世代は、まだ「勿体ない」が身にしみ付いていて、口を衝いて出るが、辛酸を嘗め尽くした香仙は、殊に敏感のようである。世の書家に対する警告とも受け取れる詩であろう。

香仙がこれまで十年間にわたって、諸々の展覧会に出展した作品を数え上げてみると、丁度、七十点に及んでいる。年平均七点の揮毫という勘定になる。

製作期間は、それほど余裕のあるものではなかつたが、  
 $\times$ 切り当りまで、ぎりぎりの書き直して、紙の反古の山を築くようだ。彼女の性分として、心残りのままの出版は、我慢できないらしい。絶えず無限の完成を期して挑戦しつづけている。

各出展ごとに自己反省をメモっていると知り、強引にせがんで拝見させてもらった。そのなかの一部を書き写してみた。

「 $\times$ 切り前夜まで書いたものの、朝になって不満が残る。一枚書いてから、師へそれを持参する。結局それが選ばれた。知る人ぞ知る也」

「 $\times$ 切までの日数は充分あったのに、消化不良。力のなさを痛感！」

「行草体で作品にしたかったが、字数が多く、大きさに制限あり、遂に叶わず断念する!!」

気真面目な素顔を窺わせる赤裸々な記録である。

七十点の作品の傾向をみると、その六割を漢詩が占めている。李白、王维などの有名誌人ぞろいであるが、所謂創作という彼女の独自の書風で、かなり見応えがある。それが、平成十三年を境にして、ひらがな混りの和歌、俳句の占める作品割合が増えてきている。筆力鼎を扛ぐものの、女手の得意とする領域に移っているようだ。

俳句では、どのような俳人を揮毫しているのか。芭蕉  
子規、漱石、竜之介など

旅人のころにも似よ椎の花 芭蕉

行く秋にとどまる汝に秋二つ 子規

好みもあるうが、その殆どが秋の句ぞろい。

書家の松橋玄光氏が「外柔内剛」の書法にふさわしい  
と指摘する香仙であり、「書道技法のあらゆる技術を使  
って書く」ことを旨として、創作に励んでいる。

平成十五年九十六才で長寿を全うした鈴木真砂女の句  
が思い出される。

硯洗ふ己が行く未見えてゐて

七十八才の作である。香仙もそろそろ齡は近いが、「己  
が行く未見えてゐて」などの境地に達して欲しくはない。

最近刊行され注目を受けている「響きあふ俳句の書」  
でも、歴代の名句を書家四十七人がとりどりの技法を駆  
使して、創作しているようだが、香仙も得意の草書体で、  
その実力を遺憾無く發揮されるように期待したい。

ついで、短歌の領域に目を移す。平成十六年の書界展  
には、香仙の自作の二首が出品されている。それまで、  
書の道に全力投球していたため、いつしか二兎は追い難  
く、短歌の数も少なくなってきたが、往年の逆境に  
詠んだ歌の数々は、笈底に埋もれたままである。惜しむ  
べきだが、そのなかからつぎの二首を選んでみる。



生きゆくは己が心とのたたかひと知りし

夜更けの風つりのりくる 昭和四十七年作

道二つあれば險しき道をゆく習ひいつしかわが裡

に棲む 昭和五十年作

いずれも境涯短歌の典型であり、香仙ならではの歌で  
ある。

現代の書道界では、歌人であり書家である人士は皆無とされている。この現状は多くの書道評論者の指摘するところであり、たとえば、「日本書道新史」の著者春名好重氏によると

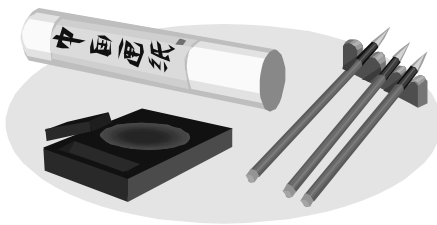
「現代の書家は、自作の漢詩、和歌を書かないで、古詩・古歌を書く。(そういった)書家の書に、現代の書家以外の人は関心がなくなっている。その上、草書、変体仮名は読めない。(したがって)古詩・古歌の詩意歌意は理解できない。書家以外の人は書家の書を見ない」

裏返えすと、書家は、自作の歌を自筆すべし、という提言にもなる。まさに、正鵠を射た論であるが、書家の生半可な短歌に魅せられる人達が幾人いるだろうか。書も短歌も一角でなければ、展示の価値はあるまい。

この点、自作の歌を自筆できる香仙は、書道界にとってユニークな存在である。まだまだ、これからの活躍が期待される。

兎にも角にも、天賦の才かも知れないが、三女時代に

培われた書道と短歌が半世紀後に、異郷の伊予で見事に開化していること、同窓の一人として誇らしく思っている。



## 少年のころ

三中・45回 高橋 寛

地域の小学校から毎年、卒業前の児童に、子どもの頃の話聞かせてやって欲しいとの依頼がくる。これは、その折の話を成人向きにアレンジしたものだ。(文中失礼多謝)

わたしは、昭和五年暮れ柞田で生まれた。

当時、ウォール街の株価大暴落が発端で、世界中が大不況に喘いでいた。その後日中戦争が小一で、小五では太平洋戦争に突入した。

勤勉な国民は、必死で貯蓄し、国債を買っては国を支えた。また“産めよ増やせよ”の国策にどの家族でも子沢山で、着物は大てい兄妹の召し降ろし、履物も下駄か草履だった。

村は殆んどが農家で、自給自足、肉や魚などは、来客でもない限り仲々お相伴に預かれなかった。わたしは、その様な厳しい時代に少年期を過ごしたのである。

小学校へ上がり、兄のランドセルを買ったが、ネンネ臭くて皆と同様、風呂敷包みを腰に縛り通学した。ゆるいと途中で解ける。どしなのがよく店開きをしたが、麦めし・ウメ・コンコ・学用品が散乱し、めしまで拾うからみなどと笑う。なに笑うことはない、中身など似たり寄ったりだ。

地球温暖化の今と違い、讃岐でも多く積雪があり、強い北風に終日電線が唸り、人絹の肌着を容赦なく寒風が貫いた。

「戦地の兵隊さんを想え!!」先生の檄に靴下も足袋も履かず、栄養不足と相俟って霜やけ、あかぎれに悩まされた。

だが幸いにも六年生の中頃まで戦況は目覚しく、わたしたちの遊びに翳りはなかった。だから下校後は鞆を投

げ捨て集団で遊び呆けた。泣いたり泣かせたり、揉まれ強く、いじめもその場かぎりであった。

夏休みの宿題に大得意の昆虫採集があった。大きな菓子箱に綿を敷き詰めトンボ、ヤンマ、蝉や蝶などを類別して飾るのだ。

トンボとり名人で、舎園の杭にときどき真紅のトンボがやってくる。「うわあー別嬪さんぢゃあー」焼けつく地面に裸足でとび出し、そつと近寄りながら人差し指を立て腕をぐるぐる回転させて掴むのだが、相手が相手、心臓がズキズキ疼いたものだ。

蝉は、ハエ取り紙の糊を割り箸にくつつけ釣竿の先に縛って捕る。鮎屋の庭に太いせんだんの木があり、早朝から耳を聳すばかりだった。富男、進、明、勉、和三郎、勇吉それにこの権太、集まるわるがきどもはいつも同じだ。けなげに腰を振っているのに竿先を当てると、ジツジツジーと断末魔の声を上げて荒れ狂うさまは、あたかも魚を釣った手応えだ。

「やった!!」と叫ぶ私の顔に決って目潰のシッコが降ってくる。そう云えば腕白の誉高かったわたしは、トンガラジチ〇〇を指で挟み蛙によくかけた。秋になり小川の水が涸れると、川床に大小沢山のイボ蛙がいる。

蛙は雨が大好きだ。オシッコをするとかちこちから寄ってくる。田圃行きのおツサンが、「ひろっさん、そんなことしたらチンチン腫れらァ」と笑う。「かんまんわい!」わたしは更にきばりながら、尻を振って奴等に分け隔てなくかけてあげる(?)と、びよこびよこ逃げては立ち止まり、両手でくるると顔を洗う。その仕草がたまらない。「塩っぱいしょっぱい、それにこんな熱い雨ははじめてぢゃ」「きつとそう思ったかも。

海へも近く、山田の海は遠浅で干潟の浅瀬は小魚や車海老・貝類の宝庫だった。麦刈時分の大潮には、岸から一軒近くも潮が退き、腰まで漬かれれば大マテがとれる。マテ抜きという銚で突いて捕るのだが、こつちが赤面する程太い。真面で香りも味も秀逸だ。

泳いだり、地引網を手伝い駄賃に小魚を沢山貰つたり海は本当に楽しかった。

夕方忽然と現れた打瀬船がエンジンの干渉音を響かせながら帆を真赤に染めて、金波銀波の上を行き交さまは、さながら錦絵の如く、やがて沖の左手みはるかす彼方に淡茜に霞む伊予の連峰、正面伊吹島への落日は、今もわたしの脳裏に焼きついて離れない。

万民の心を癒し、魚貝の幸を育み、海水の浄化にも底知れぬ恩恵を与え続けてきたその干潟が今は全て田圃と化し、昔日の面影はない。大阪湾・神戸沖等々渚を潰した代償は一体誰に贖えと言つのか。利権は……

田植がすむと稲田に誘蛾燈の灯が点る。これは、カーバイトの明りで稲の大敵の蛾を誘き寄せて殺す装置だが、夜の帳がおりて見渡す限り光の海原と化す光景は、正に幻想的であり、蛙の競演が一そつ情緒を際立たせていた。このように千金の自然に育まれたわたしたち世代だが、遂に戦局が悪化し、中一で勤労奉仕・中二で勤労学徒動

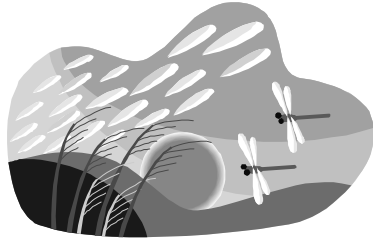
員・中三で敗戦と地獄をみるのだが、児童にはその辺の話も、一夜で十萬余の市民の命を奪った東京大空襲の話も聞かせた。「東京大空襲六十年 母の記録」にこうある。

火を逃がれてプールに飛び込むと、驚いた四歳の輝一ちゃんは、「おかあちゃん、ごめんさい。僕おとなしくするから」と泣いた。二人の赤ん坊と共にその輝一ちゃんを失つた森川寿美子さんの手記にはさらに、死を前に輝一ちゃんは言った。「おかあちゃん熱いよ、赤ちゃんもつと熱いだろっね」。火焰地獄の中でなお妹を気づかつた四歳の子の物語は、ほうつておけば誰も顧みない。

それで本当にいいのか。その悲惨さはずっと後世に語り継がなければならない。

戦争は、二度と起こしてはいけない。そう教えつつも只それだけでは済まされぬジレンマがある。それは、今なお核や軍備増強に狂奔する危険極まりない国が隣にあり、また片や強大な武力を枷鎖に圧力をかけ続ける国も隣だ。その威力に手も足も出ず国益を失い続ける腑甲斐

ない祖国の姿を、明治の元勳たちは悠久の空よりどんな気持ちで眺めているであろうか。



## 郷土と共に生きた父

三女・36回 宇都宮静子

最近、頼りにしていた兄（三男）を亡くし、沢山いたきようだい（七人）も私一人になりました。父の記念碑について書き留められるのは、もう私しかない、何とかしなければと思っていた矢先、同窓会の合田英之幹事長様より、「ぜひ調べて巨鼈に載せて下さい。」と背を押していたき、簡単ですがまとめることに致しました。

父・太平與吉は、明治十年十一月二十六日、旧観音寺町坂本の田淵勝治（田淵稔氏の曾祖父）の三男として誕生しました。当時は次男や三男に生まれた男子は他家に養子に出されるのが常でしたが、私の父も明治三十四年（二十四歳の時）、粟井村の大平家の婿養子となりました。大平家は士族の家であり、大平伊賀守國祐公が天正六年



開創の霊場、法蓮宗（本門流）雲風山國祐寺の壇家であったと聞かされています。

私は昭和二年、七人きょうだいの末っ子として誕生しましたが、私が三歳の時（父五十三歳）、父は亡くなりました。それは父のある祝賀行事中のことでしたが、戸板に乗せられて家に運ばれている様子を母の背で見たのが最後でした。子どもの頃の父についての記憶は、その程度で他には思い出すことができません。しかし、母からは「父はみんなに慕われ、頼りにされていた人」であつたとよく聞かされておりましたので、幼少の頃からそのような父を誇りに思っていました。

さて、観音寺市天神町の菅原神社境内に父の記念碑が建っています。この記念碑は、昭和七年五月（父没後三年）に地域の人々の手によって毘沙門天の境内に建立されました。その後、昭和四十七年に道路拡張のために現在地に移転されています。この時も地域の多くの方々のお世話をいただきました。



昭和30年、毘沙門天境内にて



昭和47年、菅原神社境内にて

この石碑に刻まれている文面によりますと、父は観音寺町会議員、坂本区長、農会評議員、叭代議員、水利総代等、数多くの名誉職に選ばれ、多年にわたつて各種産業の興隆に尽力しています。特に農家の福祉増進に力を入れ、農家経済の改善・成長に貢献したことは高く評価されています。この記念碑は、このような数々の功績を、後世に伝えようと地域の方々協議されて建立されたようです。

氏資性剛直夙ニ公共心ニ富ム観音寺町會議員  
 坂本區長農會評議員吠代議員水利總代等幾多  
 ノ名譽職ニ選バルルコト多年一意専心終始犧  
 牲的精神ヲ以テ東奔西走各種産業ノ興隆特ニ  
 農家ノ福利増進上ニ盡瘁シ地方開發農家經濟  
 ノ改善發達ニ貢獻シタルノ功勞頗ル顯著ニシ  
 テ將來益々氏の奮闘努力ニ俟ツヘキモノ鮮カ  
 ラサルノ秋ニ際し昭和四季四月二十五日歳五  
 十有三歳ニシテ突如病痾ノ為永眠ス是ニ愛惜  
 ノ情禁スル能ハサルモノ有リ依テ郷党人士相  
 議リ氏功績ヲ後世ニ伝ヘンカ為ノ本碑ヲ建設  
 スル所以ナリ昭和七年五月廿日建之

記念碑に刻まれている業績

昭和四年の「第一回、観音寺町会會議録」を見せてい  
 ただきますと、父は十九番議員として出席をしており、  
 六号議案「自作奨励金」について提案をしています。地  
 域の人々のために活躍していた父の様子を伺うことがで

きます。

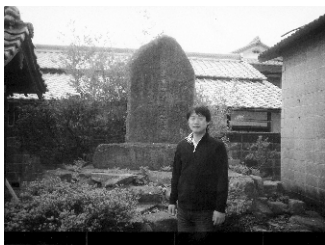
私の母は五十二歳（私が女学校一年生）の時に亡くな  
 りましたが、母は私たちきょうだいによくこの記念碑の  
 掃除を命じました。何人かのきょうだいで石碑の周りの  
 草取りをしたり落ち葉を拾ったりした記憶があります。

今考えれば、地域の人たちが建ててくださった記念碑を  
 大切にしなければ、地域の人たちが建ててくださった記念碑を

私は現在、兵庫県西宮市に住んでいます。郷土を離れ  
 て六十五年になりますが、ここ数年来より、この記念碑  
 や記念碑を通して浮かんでくる父の姿に思いを馳せるこ  
 とが多くなりました。

昨年の秋、石碑等について観音寺市役所にお尋ねをい  
 ましたところ、白川市長様や関係する皆様から、こ丁  
 寧に資料を送っていただきました。それらの資料を拝読  
 するにつけ、郷土と共に生きた父について、ますます尊  
 敬の念をもたざるをえません。

郷土の皆様のおかげに感謝いたしております。



田淵稔様の娘婿 山口宇統様



田淵稔様の妹  
山下淳子様



田淵稔様ご夫妻と共に



田淵稔様の娘 山口典子様



荻田千代子様 明様 (神戸在住)と  
田淵稔様



娘家族と共に



私 (宇都宮静子)



奈尾数美様  
(昭和 24 年女併卒)

## 余部鉄橋を見学して

三女・38回 荻田 幸江

秋もようやくたける頃、山に野にすすきが風にゆれ休耕田のあちこちで咲き乱れるコスモスの花を見かける十月二十九日、余部鉄橋を見学する一日の旅にお誘いを受け、参加させていただきました。

余部鉄橋は、明治の末期から大正時代にかけて十余年の歳月をかけて人家を見降ろす高い場所に架設された鉄骨の橋です。八十余年の歴史に別れをつけ、取り毀される事になり全国から見学に来る多くの人々に惜しまれて来年平均成十九年三月に姿を消すとのことです。

急な計画で気にかかる事もあり迷いましたが、子供たちには家の事を頼み出かけることになり、本当によかったと思っております。

早朝しぐれていた天気も六時過ぎには秋らしい爽やかな日和になり恵まれた一日の出発でした。

十五人の少人数の日帰り旅行でしたが、前回にもまして楽しい旅で年齢も様々、環境も違っても同じ学校で過ごしたことを心置きなく話ができ、雑談しながら流れていく風景を楽しみました。行定表通り瀬戸大橋を渡り、姫路東から播但道を和田山まで走行の途中山並みの中腹に霧がかかり雲の上を車が走る様子にみとれていました。添乗員の話では、めったに眺められない景色とのこと嬉しくなりましたが、紅葉の季節には未だ早いせいか木々は夏の姿を残している車窓をみていると、何時の間にかうとうとしてこうのとりの里を過ぎ昼前に目的地の香住海岸に到着しております。

国立公園香住海岸を遊覧船「かすみ丸」に乗船して風もなく穏やかな紺碧の日本海にでました。あちこちに突出した島々や岩山は、日本海が出来る以前の地層のまま横縞の岩肌、縦縞のそり立つ地層を見てみると次には

岩の柱四角あり六角ありと見事な景観に驚きました。その小島の中には小舟が通れる洞窟も島によっては波の作った産物でしょうが、女船張さんのガイドを兼ねた説明のあつちを見たり振り返ったりと楽しみました。

昼食は日本海の海の幸との話でしたが、後できくと十一月になるとカニが解禁になり、今日いただいたカニはロシア産たこのことでしたがりました。一休みしてお土産にかれの一夜干しを買いました。いよいよ目的の余部鉄道に向かって乗車、香住駅で電車に乗りしばらく走ると鉄橋にかかります。下に民家が沢山みえ左側には日本海を眺めているとあつという間に過ぎてはまさか「駅で下車、迎えに来たバスで後戻りして鉄橋を下から見上げる」となり、鉄塔を間近にみながらカメラに収まり旅の思い出にしました。

赤い素朴な鉄塔が日本海の潮風にも耐えて長期間持ち続けた事実から感動しました。

帰路は湯村温泉で足湯を楽しみ疲れを忘れて帰りまし

た。竜野西インターで夕食も済ませ午後九時に皆さん揃って元気に事故もなく仁尾に帰りました。最高齢の私ですが皆さんに支えられて楽しい旅が出来たことを心から御礼申し上げます。本当に有難うございました。



## 大平総理と現代中国の発展

観一・7回 齋藤 文一

現代中国の壮大な発展と人々の活気あふれる有様を二十回卒の真鍋氏が燧三十一号でレポートしていた。

それを読みながらふと思った。

もし大平正芳という政治家がいなかったら、このようなペースで中国は発展し得たであろうか。また、当時なにごとが大平さんをしてそのように行動させたのだらうかと。

そして往時が蘇った。

おおかたの方々はよくご存知のことながらその一部を掘り起こしてみたいと思う。

三十五年前、共産主義革命のあらしのなかで疲弊し、国内外に敵あまたを抱えた毛沢東中国共産党首脳部と、それを歴史的使命とした田中首相大平外相コンビが日中

国交正常化交渉で火花を散らした。そして数日、日中国交正常化の共同声明にこぎつけ、同時に日中平和友好条約の締結を約束した。

外相はまた、その二年後に懸案の日中航空協定・貿易協定・記者交換覚書をまとめて、日中関係をより開かれたものとし、往来を容易にした。

時は下つて七十八年、福田内閣によって日中平和友好条約が調印され、翌年訪中した大平総理は円借款や技術供与・文化交流など中国に温かい手を差し伸べた。

この時、毛沢東・周恩来は既に亡く、鄧小平時代が幕を開けようとしていた。

彼は「四つの現代化」を高々と掲げ中国の雄大な発展を思い描いていた。

翌八十年、ビジネスのために訪中した私は、大平総理が開始した物心両面にわたる暖かい対中国政策がいかに力強く同国の発展を支援するものであるかを見た。それはわれわれの民間経済活動と相まって、中国の爆発的発

展の契機となることを現地で確信した。

【一】毛沢東時代末期の中国の疲弊と打開努力

中華人民共和国の発展過程を大きく三区分すると、第一は毛沢東主導の時代、第二は鄧小平指導の時代、第三は江沢民及びそれに続く時代となる。

「毛沢東主導の時代」はまさに風暴激動の時代であった。

毛沢東中国は多くの戦争を行った。

国共内戦によって蒋介石政権を台湾に追放して中華人民共和国を宣言し、その翌五十年には朝鮮戦線に参戦して三年にわたって戦った。つづいて台湾解放をかけた金門島への砲撃戦・チベットの指導者ダライ・ラマをかくまったインドとの国境戦争・ベトナム戦争への骨の折れる支援・中ソ国境紛争、特に珍宝島（ダマンスキー島）でのソ連近代軍との激闘などである。

一方国内で毛沢東は不断の権力闘争・思想闘争を行っ

ていた。百花斉放・百家争鳴後の反右派闘争。五十八年からは大躍進運動を開始し、人民公社を設立して食糧や鉄鋼の大増産などを号令したが、これは大失敗した。食糧不足で一千万人をこえる餓死者を出し、旧来工法で造った鉄は不良品で使いものにならなかったという。

国家主席を劉少奇に譲る。

劉少奇と鄧小平は経済調整政策に転換した。しかし十五年からは再び毛沢東主導のプロレタリア文化大革命が起り文革小組が実権を握った。劉少奇・鄧小平らは吊るし上げられ、劉は党籍を剥奪されて獄死する。文人老舎が入水自殺を余儀なくされるなど知識人などの多くが迫害されて深刻な被害を受けた。六十八年には漸く紅衛兵運動が沈静化。その後国家副主席林彪がクーデターを図り失敗した。

また、西側諸国とは勿論、周辺国の共産党とも深刻な路線対立があった。フルシチョフソ連首相の平和共存路線に対し、中国はこれを批判、中ソ論争が激しくなり、

ソ連は対中支援技術者の引き上げを行った。日本共産党とは絶縁し赤旗が毛沢東路線を批判した。

中国は孤立疲弊し、「自力更生」を掲げる毛沢東は革命定着までに日暮れて道なお遠い状態であった。特に珍宝島の戦いで近代兵器の洗礼を受けた中国は、ソ連にたいして核を含む著しい軍事的脅威を感じ、米ソ二大強敵を腹背にして対峙することは避けなければならなかった。

そこで毛沢東は敵（ソ連）の敵（米国）に接近するとともに、中華人民共和国を世界に開く方向に舵をとり、七十一年三月突如ピンポン外交を開始した。米国とはキッシンジャーを招き入れて接触し、同年十月国連復帰を果たす。翌年二月にはニクソン米大統領が訪中する。

この頃、中国の関心の対象の一つは東の隣国、繁栄する日本であった。日本を取り込んでその敵視姿勢を緩和させ、西側世界の対中包囲網の一角を崩し、技術や資本を取り入れるためにも中日復交政策の推進が必要であったと推察する。宮本指導下の日本共産党は暴力革命路線

の毛沢東中国とは絶縁していたため、左翼・中道政党、さらに進めて保守党やマスコミの一部にも働きかけて、日中正常化の雰囲気醸成に努めた。

しかし佐藤政権は台湾・米国への思い入れが強く動かなかった。

いよいよ局面の転換期が近づいていた。

田中内閣の成立である。公明党の竹内委員長等にも周恩来総理が復交条件を託した。更に孫平化・肖向前氏らを訪日させ日本政府と接触を図るなどして、同年九月には田中首相・大平外相を中国に招き、日中国交正常化の交渉を行う運びとなる。

【】大平さんとイターナル ナウ

大平さんはしばしば「イターナル ナウ」（永遠の今）ということを言った。

「現在は永遠であり、襟を正して立ち向わなければならない。人生は日々刻々の真剣な実践の連続以外のもの



ではない」と言っている。

それは、滔々たる歴史の流れの中で、過去・現在・未来を見通して現在の意義を認識し、「今我は何をなすべきか」を自問しながら「今」を精いっぱい生き抜くために精進した姿であった。

中農の家に四男四女（長女長男は夭折）。その第六子として生をつけた大平さんは中学四年の時腸チフスに罹って四ヶ月療養した。また、優しかった父親を翌年に胃潰瘍で亡くした。三豊中学卒業時の席次は七十三人中十九番で、客観的にみて前途洋々と言えたであろうか。

その大平さんが、奨学金を貰いながら高松高商から東京商科大学（現一橋大）に入り、高文行政科に合格し、大蔵省に入った。大蔵省時代池田氏と知り合い、政界に転じてからはその側近として政界を遊泳し、保守本流を歩み、領袖となり、総理大臣までになった。

周辺には思いやりをもって接し、信義に篤く、理想を求めつつも現実をふまえて着実な歩みを踏み行った。

そこには『受動の自分』でなく、『時務を自覚した主動の自分』がいた。

七十三年の外相当時、国連で演説し「日本が世界平和の受動的享受者から能動的な創造者になる」と述べたのもその姿勢の表れとみる。

余談であるが、大平さんが総理大臣に就任するとき、雄心会員であった私は側近を通じて「どうか歴史に光彩を放つ総理大臣になっていただきたい。そのために、『恒久平和』という指標を指しいただきたい」と書き送った。

しばらくして、朝日新聞第一面に載った大平新総理のインタビュー困み記事を見ると、最後の方で「趣味……『座右の銘』【恒久平和】とあった。これは勿論私のような者がかいた書簡のためではないと思うが、理想を希求しながらも現実をしつかり踏まえて行動する人であった。

大蔵省入省四年目二十九歳の時、大平さんは興亜院蒙

疆連絡部経済担当となつて張家口に赴任し一年半を過ぎた。帰国後も同院経済部勤務、同院調査官などで、中国に出張するなど日本国の大陸経営に参画する。これらを通して中国大陸を肌身で知り、また彼の国の文化に親近感を持つていた。

その遠因に三豊中学の影響はなかつたのだろうか。

「私の履歴書」日経版によると、「三豊中学時代、中井虎男先生の数学と、細川敏太郎先生の漢文が忘れられない魅力ある講義であつた。・・・細川先生は神宮皇学館出身の漢学者で、そのリズムミカルな講読は、若い私の心を強く引きつけて放さなかつた」とある。

大平さんの人格形成や東洋思想啓発に三豊の学窓が付与した影響が、実体験と相まって、中国文明風土への愛着をもたらした面もあるのではないかと考える。

その大平さんが、自らの政治生命をかけて日中国交正常化を行うことを意図した。

奇くも、盟友田中角栄さんも兵役で中国に往き、その

風土を体験していた。

【大平さんと日中正常化並びに対中支援政策の展開】池田内閣の外相時代、野党の穂積議員から質問されたとき、「将来、北京が世界の祝福をつけて国連に迎え入れられるようになれば、日中国交回復をはかるべきである」と答えた。

佐藤改造内閣で通産省を降りたころ、外務省の中国問題専門家を呼んで、いろいろと疑問点を糺すなど研究を積んでいった。

同じころ田中角栄も同様に勉強していた。

大平さんが「日中国交正常化をやるう」と言ったとき、決断と実行の田中さんも流石すぐには返事をしなかつた。だが、「三三曰して、「よしやるう」と言った。そして、「外は任せた、内は俺がやる」と外交の細部は大平さんに任せた。

田中内閣が発足し、外務大臣に就任した大平さんは、

初登庁即日、橋本恕中国課長を呼び、「田中首相の承認は得ている。直ちに日中国交回復への準備を行うように」と命じた。

当時日本は台湾の蒋介石政権を中国を代表する政府として国交を行っており、与党や外務省内には強力な台湾政府擁護派がいた。蒋介石総統には「恨みに報いるに恩を以てす」として一切の賠償を放棄し、邦人を無事帰還させてくれた大恩があった。国民の多くもまだ暴力革命路線の毛沢東中国という印象を拭いきっていなかった。

同交渉を行うには先ず国内の説得が大変で、自民党の日中国交正常化協議会には賛成反対議員ら三百十五人が参加して大激論が行われた。外相が熱心で忍耐強い説明を行った結果、同協議会はついに田中訪中を決議した。

他方、国際的にも台湾政府はもとより、対米、対ソ関係などに深い配慮が必要であった。

田中首相と大平外相はハワイでニクソン大統領と会い、日中国交正常化交渉を行うことへの理解を求めたうえで、

七十二年九月二十五日訪中して同交渉に臨んだ。

出発にあたり大平外相は眞鍋賢一当時秘書に「万が一この交渉が不調に終わった場合、自分は日本に二度と帰れないかもしれない。またこの交渉によってはどんな危険があるかもしれない。留守中のことはよろしく頼む」と言って出かけたという。

交渉では大きく三つの問題があった。第一は台湾蒋介石政権との国交を打ち切り、当面する中共政府とも戦争状態を終結し、中華人民共和国を唯一正当政府として認めること並びにその実行要領。第二は日米安全保障条約が存在する現実に中国側が容認の態度をとるかどうかが。第三は日中戦争における賠償問題をどう処理するか、であった。

交渉は外交巧者の毛沢東主席・周恩来首相・姬鵬飛外相を相手に極めて困難なものとなった。大きなことから小さなことまですべて大平外相にまかせて一言も言わなかった田中首相は自ら全責任をとる覚悟であった。

「あのなあ大平、しょうがないじゃないか、このまま友好訪問だけになったんじゃ『お前ら何しに行ったんだ』と言われる。国内はもたん。だが政治責任は俺がすべてかぶる」と言っていた。

高島条約局長の発言に対して周恩来首相が厳しく反応し、宿舎に帰って夕飯も食わずに落ちこんでいると、田中さんが、大学を出たやつはこういいうときはダメだなあ。修羅場に弱い」と言った。大平さんが「そんなこと言っていて、じゃあ明日からの交渉はどうやってやるんだ」というと田中さんがニヤリと笑って「君らは大学を出ているんだろ？ 大学をでたやつが考えるんだ」と言ったのでみんな大笑いした。そこで「とにかく飯を食おうよ」となって、大平さんも気を取り直したという。

三日目、毛沢東主席との会談を境に遂に交渉が進展、問題点も成功裡に解決、七十二年九月二十九日調印を終えて翌日上海経由帰国した。

この時約束していた日中平和友好条約の締結は七十八

年福田内閣によって実行された。

翌七十九年訪中した大平総理は発展途上の中国にODAによる有償無償の資金協力・技術協力・文化交流などを約束する。

「わが国は貴国の要請にこたえ、いくつかの優先度の高い港湾、鉄道、水力発電などの基本建設プロジェクトに対し、政府ベースの借金を供与することを表明します。またわが国は、技術協力あるいは留学生の受入れをはじめとする文化学術面などで貴国の人作りに積極的に協力していく用意があります。貴国の努力とこれらの協力が相まって、貴国の二十一世紀へ向けての建設の礎となることを心から願います・・・」と講演した。

これらは勿論日本のためではあるが、一方国際社会の包囲下で孤立し、人的物的に疲弊し自力更生中の中国側からみると、毛沢東主席・周恩来総理・後継指導者らの目の覚めるように素晴らしい外交成果であった。大平首相は従来の政策を一変し対中支援方針に道を開いた。こ

れ以降、中国は日本の対外援助の優先的供与先となり、その後の政府に一貫して継承される。

### 【一】八十年代の現実

大平総理が訪中し資金技術文化協力を約束した翌八十年四月、「一九八〇年日本自動化技術工業展覧会」が中国の天津で開かれた。日本側はメーカー百十九社、商社四十社が先進の自動化工業機械を展示し、われわれリース・金融グループはその一角に三社合同のブースを設けた。住友・三和・協和銀行系のG、O、S社である。手分けして、経営管理、リース・金融の説明を各社社長が行った。

私が声をかけて参加していたO社は、展覧会終了直後、関係展示物を携えて北京に赴き、中国当局とリース合弁会社設立交渉に入った。「ゆっくり急げ」と本社が督促しながら交渉一年、自由世界最初の中国との合弁企業設立に漕ぎつけた。同行S社は青島で同じく合弁リース会社

を設立、長銀系のN社が上海に合弁リース会社を設立するなど日本の金融機関系リース会社がこれを契機に中国進出を果たした。

近代的工業機械システムが乏しかった中国において、日本のリース会社は何十万台の機械などを貸し出し、中国工業近代化に力を与えた。一方私は諸般の状況を勘案して、わが大平総理が設定した、対中ODAの資金枠の活用を勧めた。まずは日本政府の長期優良な資金を紹介する一方、金融やリース利用のメリットを中国の各主要国務機関に啓蒙しながら、しばらく状況の推移を見守った。文書の翻訳作業は、中国貿易商社西日本貿易で活躍していた観一同期の故後等正輝君に協力願った。

当時の中国は経済再建途上であり、外貨が極端に不足し、技術水準も十分でなかった。まだ世界的に対中警戒感が残っていて、ソ連とは対立、西側からはチンコムほか経済的締め付けが強かった当時、大平さんが開いた日中間のオープンな往来関係が政府・産業界・学術分野な

どで、同国の発展に飛躍的な効果をもたらすこととなった。例えば毛主席が苦勞した鉄鋼生産は、日本の製鐵会社が協力して宝山製鉄所に世界最新鋭の製造設備を建設してオペレーション技術を伝えた。

鄧小平指導下の中国は実に秀抜意欲的であった。「工業・農業・国防・科学技術」の「四つの現代化」を新憲法の前文に謳い、同分野を一流のレベルに引き上げることを「國家總目標」として、堅忍不拔ひたすら努力を傾注した。

また、共産主義政權にもかかわらず、人材を外国に留学させ、将来の國家建設のために育成することを怠らなかつた。

これらの政策に伴ってインフラの整備協力・機械・技術・運用システム・資金を提供することを日本は始めた。その結果同国が飛躍的に発展することは目に見えており、私は「われわれが今中国經濟融合爆発の信管に火を付けているのだ」という実感を現場で持っていた。こ

のとき、日本は中国を敵視ないし警戒すべき隣国ではなく、ともに発展すべき友邦とする道を選んだ。

日本の國家戰略上これが敵国に塩を送り「あだ」となるのではなく、相互に良い關係を生みだして順調な発展をたどる契機となるように祈りたい気持ちであった。

外貨不足で、機械は大いに導入するが支払いについては見通しが暗かつた。わが国のリース会社も、やがて積もる不良債權のために大変苦勞する事態に陥つた。

種々曲折があり一部に苦汁を舐める場面があつたものの、八十年代日中關係は發展し概ね良好に推移した。

#### 【 】 天安門事件後の日中關係

八十九年の天安門事件を契機として、新たに江沢民時代が到来する。

江沢民朱鎔基上海グループでは米欧との關係が深化していく。それとともに、江沢民政權の體質の故か、反日教育もあり、日中關係の推移は予断を許さない状況に進

んでいく。

天安門事件で人権が問題となり、アメリカは日本の対中ODA援助を問題にした。しかし上海グループはその人脈でアメリカを説得する一方、日本に対しては天皇の中国招請訪問などの切り札をつかつて雰囲気緩和をはかり、日本政府は援助の継続を許容する。

日本の対中援助は中国の一般市民にはあまり知られておらずマスコミもさほどとりあげない。その事実を、われわれ日本の納税者もよく知らされていない。日本に反感を感じている現在の中国の若い人々の中には中国が日本から援助を受けてきた事実自体を認めたくないという感情もあるときく。

毛沢東時代の末期とそれに続くころ、中国が敵国に囲まれ、思想闘争のため人的物的に疲弊し、経済再建を余儀なくされる苦しい時代があった。大平さんはその中国と国交正常化をまとめ、更に援助を始めた。日本政府と財界は誠の心をもって、中国を支援し、その後もそれを

一貫して続けた。八十五年から二十一年の十七年間のうち十五年は日本のODA供与優先順位第一ないし第二位に中国が指定されている。世界DAC諸国から中国が受けた年ごとの援助額の平均五十八・六パーセントは日本からのもので、二十三年、日本の対中国ODA累積額は円借款約二兆一千億円、無償資金協力千四百億円（供与枠ベース）、技術協力千四百五十億円（留学生受入れや各省庁の技術協力を除く）。対中国技術協力では研修員受入れ・専門家の派遣・調査団の派遣協力・ボランティア派遣・機材供与・技術協力プロジェクト・開発調査などが行われている。

一昨年、中国の対日暴動が発生したときには、あの頃の状況を知っていただけに、私は衝撃を受け、「なぜだ」と慨嘆した。「日中友好」、「一衣帯水」、「日中不再戦」、「子々孫々の友好」、「技術交流」などは中国が対日工作向けに造った単なる合い言葉であつたのかと。

そうではなかつた筈。「信を彼の国の腹中に置き」中国

を継続一貫して助けた日本。田中大平の政策転換で日本の対中政策は敵対関係から新しい関係に入ることを想定していたはずである。その日本に対して反日教育を一貫して続けた江沢民政権。日本の指導者の中国を刺激する言動。この辺は何とか大人の話し合いで相互理解を深めて解決出来ないものか。

【二十一世紀の日中関係】

「男児三日会わざれば刮目して見るべし」という言葉がある。今や巨像は動きだし、とどまるところを知らない。

かつて、ソ連から支援を受けていた中国はGDPでロシアの三・五倍の規模となり、毛沢東が苦労した粗鋼生産は世界総生産額の三分の一となり、困窮していた外貨保有額も日本を抜き去り一兆三千億ドルを突破している。経済規模は今世紀前半には日本を抜き、いずれ米欧と肩を並べまたは凌駕する世界最大の経済大国となり、

軍事力もそれに相応しいものを持つようになる。

兎角われわれは与えられた視座から相手を見て、行動しがちである。

一時的風潮に惑わされることなく、ナショナルインタレストに配慮しつつ、人民の幸せを第一に、近隣が永く仲良くつきあえるように配慮施策し、お互いに発展していきたいものである。

歲月はうつつても日本の名譽ある存立に不可欠のものがある。

「よく教育され、道義に篤く、技術・文化において高い水準を築き上げて維持すること。それによって日出るアジアの東にあつて光輝く平和国家であり続けることである」

そのために「永遠の今」の課題を人智を尽くして求め、施策し、強力に実践していかなければならない。

中国を訪れて、その素晴らしい発展を見て賛嘆するときには、われわれの先輩大平さんの時務を知り中国を愛



する先見性ある行動が、中国の発展の礎の一角をなして  
同国とそれに関係する世界を静かに潤していることを一  
寸想い起こしていただきたい。

同窓生として、日本国民としてこれを喜ぶとともに彼  
の国の心ある一般人民にも認識いただきたいと思う。

#### 【参考資料】

【大平正芳回想録・伝記編・追想編・資料編】(回想録  
刊行会)、【去華就実】(大平正芳 人と思想)(記念財  
団)、【私の履歴書】(春風秋雨)【風塵雑俎】(大平正芳  
著)、【鈍牛待望論】(大隈秀夫著)、【回想三豊中学】(中井虎  
男著)、【風暴十年】(周鯨文著)、【世界週報】(時事通信社ほ  
か

## 新聞制作から鉛が消えた日

観一・11回 小野 喬啓

日本の新聞制作は現在に至るまで百三十五年の歴史が  
ある。毎日新聞社史によると一八七二(明治五)年二月  
二十一日、東京日日新聞社(東日)が横型・木版刷りに  
よる「片面二色の紙面」でスタートした。これが日本で  
最古の新聞らしい。

その後、木活字を使った印刷からグーテンベルクによ  
る鉛活字を使った活版印刷に移り変わる。以来、技術革  
新の変遷をたどるのだが、新聞制作の歴史は、その大半  
が鉛合金を高熱で溶かして活字を鑄造し、刷版の原型を  
作るホット・タイプ・システム(Hot Type System・HTS)  
である。

この方式による新聞制作の職場環境は劣悪につきた。

インクと油、鉛を溶かす際の熱風、ガード下のような機械の騒音と振動などに満ちていた。輪転機にかける鉛合金の刷版は一枚がなんと十八kgもあった。このため印刷職場の作業者は熱風や鉛公害、腰痛などに悩まされたそうだ。当然のこととして熱や鉛を使わないCTS (Cold Type System) 方式の新聞制作が業界の悲願であった。

一九六〇年代になると電子技術は著しく発展して、トランジスタをはじめとする半導体素子やコンピュータが出現する。産業機器の目覚ましい進化は、新聞作りを変えていく。一九六五(昭和四十)年ごろには先端電子技術を取り入れた写植機・サブトン(写研製全自動写植機)が登場した。この写植機は文字の書体やサイズ・位置などの情報を指定できるし、記事の本文や前文を簡単に入力することもできた。さらに情報をさん孔テープ上に羅列すれば、このテープを読み込んでフィルム版下が自動的に組版できるのだから画期的だった。新聞業界に大きな波紋を与え、悲願であったCTS化の実現にさらに一歩

大きく踏み出すことになる。

その後、各新聞社は「脱鉛活字・CTS化」へのプロセスエクストリームを一層強化させ、新聞制作のCTS(電算組み版システム・Computerized Typesetting System)化の競争がエスカレートするのだった。

六〇年代後半から始まった脱鉛活字・CTS化は急速な動きを見せ、まず地方新聞社の佐賀新聞社が六八年三月に活字の全廃に成功した。日本新聞協会に加盟している新聞社のなかでは最初である。全自動写植機・サブトンを使った大張り方式のCTS (Cold Type System) 化だった。これは記事や写真を印画紙又はポジフィルムで断片的に出力し、新聞一ページを張り合わせてレイアウトする方式で、工程の複雑な大規模新聞社向きとはいえなかった。

大規模新聞社の本格的なCTS化の開発は六〇年代後半から始まる。米田社と日本経済新聞、朝日新聞がタイプアップしてフルページ方式(ディスプレイ上で紙面

全体をレイアウト）を目指した本格的なCTS化である。約十年余りの技術開発を重ねて七八年三月に日経が、八〇年九月に朝日が築地新社屋で活字の廃止を達成することができた。全国紙の脱鉛成功は、新聞業界に大きな衝撃を与え、流れは全面CTS化へと向かう。

毎日新聞社も将来の「脱鉛組版」を見越して六九年一月、東京本社にプロジェクトチームを作り、コールドタイプ組版（CTS）システムの開発に着手する。案内広告組み版を実用後、さらに高度なCTS化を技術目標として模索中の七〇年六月、BMから「毎日プラン」の新聞制作ソフトの提案を受けた。BMは日経、朝日両社のシステム作りを主導して、ある程度の開発目処をつけたので、次は毎日となったのだろう。

このとき大阪新館建設を迫られていた毎日には開発に要する時間的な余裕はなかった。役員レベルのCTS委員会を設置され、事務局役の新聞研究室はBMをはじめ、富士通、東芝―日電グループから提案のヒアリングを受

けた。七九年十一月までに大阪本社向けのCTS提案書が三社から出された。最終的には大規模新聞社向けCTSの実績はなかったものの、印刷新聞業界向けシステムの開発には実績があり、新聞制作の基本機能を広くパッケージ化する方針を打ち出していた富士通提案に決まった。

後に、このパッケージ化されたソフトは「PRESS」と名付けられ、先行していたBMの新聞制作ソフト「PS」と新聞業界を二分することになる。（PRESS:Progressive Editing Support System）

二〇〇二年時点でBMを選択した新聞社は日経、朝日、中日、北海道などの数社に対して、富士通を選択したのは毎日、読売、京都、神戸、北国、山形、西日本、山形など数十社にも及んだ。後に「PRESSユーザー会」も結成された。

全国紙における大きな技術開発や設備の導入は、東京本社が先行するのが通例であるが、大阪先行となったCTS開発は異例だろう。富士通が選定された要因の一つ

に、同社営業の大阪拠点が、たまたま毎日大阪本社のすぐ近所にあったことも幸いしたようだ。富士通の営業スタッフ（観一同窓）は、朝な夕なに受付を「顔パス」で通れた。それともかく富士通はコンピュータの国内トップメーカーとして、後発ながらCTSへの参入を強く決意していた。当時、地方紙の北国新聞、ブロック紙の西日本新聞と商談が進んでいたが、IBMと対抗していくためには、全国紙のブランドは欠かせなかった。

そのころ読売は、活版—凸版輪転機時代の最強設備といわれた大手町社屋を建設してから日が浅く、CTS導入は急がず、技術動向を見守る姿勢と伝えられていた。だからいきおい、毎日がターゲットとなったのである。

毎日大阪本社の窓口は当時私の上司であった連絡部長の河原崎晃一（後にCTS開発室長、常務・技術担当）だった。河原崎は紙面伝送ファクシミリの開発をはじめ、メーカーとの接触には経験が深かった。だからメーカー選定には技術力の良否は当然ながら、営業の熱意が重要

なファクターになることをよく知っていた。富士通に対しては毎日ブランドが商談に有利に働くだろうという見立てもあった。

大阪本社に開発用CTSが第一次として搬入されたのが八二年五月である。その後、第二次搬入を経て数年間という短期間で精力的にシステムの開発と検証をした末、西部本社に八六年九月、東京本社には八七年二月にそれぞれ本格的な富士通のCTSが導入された。

こうして脱鉛化に成功したのだが、短い期間でのCTS開発は先行各社や業界の注目も浴びた。大阪本社では九二年十二月の新館移転に合わせて最新CTSに更新、当時としては新聞業界にあって最強の全面CTS化を完了している。先行していた他本社の全面CTS化移行完了と合わせて、毎日新聞社から名実と共に鉛が消えた。

全社のCTS化が完了するのは光ケーブルや衛星回線を使って、すばやく印刷工場へデジタル紙面伝送できる設備が強化されたときだった。遠隔地を含め全国十六箇

所の印刷工場では、高速オフセットカラー輪転機で高速印刷、短い時間でカラー写真を沢山載せた印面のきれいな新聞を作る事ができるようになった。

この新聞制作の革命的な変化は読者にとっても大きなメリットをもたらした。鮮度の高いニュースとビジュアルなカラー紙面を手にすることが出来るようになったことである。

全面のCT化から十五年になる。早いものだと感慨深い。後輩たちの報告によると、当時のCTシステムはすでに数年前になくなり、今はいっそう進化したシステムに更新されているという。新聞制作技術の進歩は絶え間なく続いているようだ。

最後に、記しておきたい。

前記の富士通大阪営業スタッフは観一・7回卒の長谷川光雄氏（当時大阪営業部長）です。また、当時富士通本社の流通・情報営業本部長の石井武俊氏（観一・14回

卒、のち取締役）も深く関わり、現在の新聞業界全体のCT化に大きく貢献されました。

（毎日新聞社終身名誉職員）



## What? 「巨鼈」

観一・12回 大西 啓介

What? 「巨鼈」が観一・10回前後以降の卒業生のいつわらない感想です。

正直言って、私も雲辺寺山＝巨鼈山とは七年ほど前まで知りませんでした。先輩達に聞くとある人は高屋の山だ、とか言う人もいました。巨鼈さん＝萩原寺の近所の人でさえ知らない人が多い。

新・かおんじ市内を走ると、第六十六番札所・雲辺寺の看板がてんこ盛りも、巨鼈山は曼陀まんだ隧道上り口の池田・佐野地区に道路標識があるのみです。松山道から北を見ると世界に冠たる瀬戸内海、南には巨鼈山が望めます。山を見る方角によって今風な表現で恐縮ですが：アラシ・セイウチに見えます。

三豊の人にはともかく池田の方々にも剣山をさしおいて崇高な巨鼈山すうです。今では当地以上に水無し県・香川の水甕すうです。雲辺寺山は大先輩の弘法大師が二〇五年前に開祖する前から、西讃の人にとって信仰の山でした。私は幼少時、元旦に三回も登りました。昨年百一才で亡くなった父は死ぬまぎわまで、うんぺんじうんぺんじ……とおらんでました。

山は今も、平野に水をもたらし、燧灘のイワシに餌を与え、伏流水とあいまって食品工業を盛んにしているわけです。

私も観一卒業後「燧」に親しんで来ただけに「巨鼈」を配られて初めWhy?と思いましたが、「巨鼈」が創刊されて、百五年の歴史がある上に、現在の礎を築いて下さった三豊中学の諸先輩に感謝の気持で一杯です。



四国 88ヶ所の1つ、雲辺寺ロープウェイの案内板。巨龍山 雲辺寺と明示されている。



巨龍山 = 雲辺寺を遠望（大海亀の背中のような稜線が見える）、  
（手前は予讃線の列車）

## 衣笠に通う日々

観一・17回 白石 憲一

新聞社に入って、最初の赴任地が京都だった。全国で吹き荒れた「学園闘争」も東京ではもう下火になっていたが、関西ではまだ校舎に学生らが立てこもっている大学もあって、都大路には騒然とした空気が漂っていた。

デモの取材で、学生に殴りかかる機動隊員の写真を撮った。乱暴はけしからんと、長い原稿を書いたが、ボツ（不採用）になった。学生気分の抜けない「正義感」にかられてデスク（次長）に、「納得できない」と詰め寄った。その時、返ってきた言葉が「機動隊員の一人でもオブルグしてこい」だった。

オルグなどといっても、今時の学生には分からないかも知れない。今から振り返っても、ずいぶん乱暴な話だ

が、その時は妙に胸にすんと落ちた。高度成長の余韻が残っていた社会も、記者たちも若かった。

その時、列島のおちこちに転動した。還暦も間近になって思いがけなく、古都、そして学生との縁が復活した。

金閣寺近くの衣笠にある大学で週に一度、教壇に立つようになった。一年が過ぎた。未知の世界に入る前に、知り合いの教授から、あらかじめ心がけておいた方がいいと、幾つか助言された。その一つ。

「私は新聞記者は長くやってきたが、教えるのは初めてです。なんてことは絶対しゃべってはいけません。今の学生は謙遜なんて美德は通じませんから、そのまま真に受けて、真面目に話を聞こうとしませんからね」

そのアドバイスは大切にしているが、相手は数百人。大教室でのマイク授業とあって、真面目に聞いているのか、いないのか、手応えがなかなかつかめない。

講義の中身は、ジャーナリズム論というが、要するに新聞社での経験を伝えるということだが、これも、新聞を読



んでいない学生が多いという。時世を忖度すればどこまで丁寧に説明すればいいのかわつか、さじ加減が難しい。

それで、少しでも新聞になじんでもらおうと、毎回授業の冒頭に、その日の朝日、毎日など全国紙五紙の朝刊（主に一面のトップ記事）の比較、解説をしている。コミュニケーションペーパーと呼ばれる用紙に感想などを書いてもらっているが、「たいへん参考になる」とおおむね好評だ。

それにしても、もう少し、双方向のある授業をしたい、と少人数のゼミ形式の「企画研究」を募ってみた。テーマは、「日本は変わったのか。七十年前の『検証』と『提言』だ。

日本が泥沼の日中戦争に突き進んだ『盧溝橋事件』（一九三七年七月七日）が起きて、今年で七十年の歳月が流れる。敗戦で世の中はすっかり変わったはずだが、最近、戦前を知る人たちの間から、「あの時代に似てきた」という声が聞かれるようになった。そう言われてみれば、確

かに名目は違っているが、「武装実力組織」である自衛隊が、イラクに派遣されて久しい。「戦争法」ともいわれる有事法制もつくられた。

本当のところ、戦前と今の日本の社会では、何が変わり、何が変わっていないのか。そのところをきっちり検証して、あるべき社会のために提言できることがあれば、それを「政策」というかたちで出してみよう。それが、呼びかけのおおまかな趣旨だ。

やっぱり、堅いというか、難解だったのか。一年前にもほぼ同じような呼びかけをしてみたが、応募は一人しかなく挫折した。今年は、ごく少数ながら四人を確保、やっと船出することが出来た。とはいうものの今のところは、七十年前の新聞や法律を読んだり、お年寄りの話を聞いたりの手探りの状態で、これからどこの港に辿り着くことができるのか、はつきりしない。

それはともかく、住み慣れた新聞社にいるよりも、衣笠に通う日々の方が、気分が若返ることだけは確かだ。

## 古本屋三十年 第五回

観一・19回 中尾 隆夫

今年の四月十日から五月下旬にかけて天王寺の大阪市立美術館でフランスのギメ東洋美術館の所蔵する浮世絵名品展が開催された。この展覧会は二年前の二〇〇五年に、東京の太田記念美術館が館始まって以来最初となる海外浮世絵展をこのギメ東洋美術館で開催したお返しともなる展覧会で、同館の所蔵する五千点もの浮世絵コレクションの中から一九〇点ばかりを選びすくって展覧したものだ。ギメ東洋美術館はもともとリヨンの実業家エミール・ギメが収集した四万点にも及ぶ東洋美術の一大コレクションで、その殆どが彼自身の東洋旅行で収集した物であるというから驚きである。ギメの父はウルトラマリン（群青、顔料）というものを発明した化学者で、

その生産のために造った工場がギメ家に莫大な財産を齎すことになった。彼の母親は宗教絵などを描く画家だったようで、この両親のもとで幼少より学問に精を出すと共に音楽や絵画・陶芸などの芸術分野にも親しんだことが、後に彼をして世界の文化、特にアジアの仏教文化に目を向かしめることになる。二十五歳でリヨン郊外の顔料工場を父親から引き継いで社長として実業界にデビューしたギメは、懸命に仕事をする傍ら合唱団やブラスバンドの音楽活動にも力を入れたが、本来の学問好きという知識欲が契機となり（一説には初期資本主義の発展の中で起こった彼の工場での労働争議が嫌になったともいうが）フランスを離れてスペイン、ギリシア、トルコ、エジプト、ルーマニアなどに海外旅行に出かけ、異民族の歴史や文化に直接触れたことが貴重な経験となった。その中でも彼の人生に一番大きな影響を与えたと言われるのがエジプト旅行であって、エジプトの古い遺跡群は彼の心を虜にし、考古学の方面に初めて興味を持たせ

た。

次第に彼は考古遺物の収集をも開始し、彼の旺盛な知識欲は考古学に留まらず人類学や哲学、果ては宗教学にも及んでいった。その目はジャボニズムの影響もあつてか、いつしか極東の日本に迄向けられるようになり、キリスト教中心の西洋文化とは異なるアジアの宗教、仏教やそれを取り巻く仏教文化に多大の関心を持つようになった。

明治九年、極東アジア行きを敢行した彼はついに八月二十六日に日本の横浜に到着した。日本に来る前に立ち寄つたフィラデルフィア万博の会場で知り合つたレガメーという絵描きをイラストレーターとして雇い、しかもギメはフランス政府直屬の極東宗教調査員という資格である。

明治九年といえは明治の新政府が執つた宗教政策で神道が国教になり仏教が抹殺されようとした時代であつて、あらゆる仏教施設が破壊されあらゆる仏像が焼き払われ

ようとしたいわゆる廃仏毀釈の時代であつた。これ以後約二か月余、神戸を發つ十一月迄に彼が集めた仏像はなんと六百点にも及び、他にも仏画三百点、それに数多くの陶磁器や書物などもあつたという。彼が苦労して集めなくても当時は仏像を売りたい日本人の方から押しかけて「貴方が買ってくれなければ焼き払わなければいけない」などと言って、半ば無理やり押し付けたようなことだつたらしい。だから多くの仏像や仏画は本当に安い値で買い取られたことと思うが、もしギメがこれ等の仏教美術を買つていなかつたとしたら、と想像する時、今さらながら彼の功績に感謝するばかりである。この後彼は中国・インドを回り考古遺物や仏教美術などを収集し、また仏教の研究調査をして帰国した。ギメはこの東洋旅行で得た成果の一部を一八七八年に開かれたパリ万国博覧会で公開し、ジャボニズムの高揚に一層貢献した。

その後リヨンに東洋語学校や博物館をも開設した彼は、一九〇〇年、パリ日仏協会を設立して益々熱心に東洋学

を学ぶことになる。リヨンに創設された博物館はその後パリに移され、一八八九年に宗教博物館として開館された。

以後、朝鮮美術やインドシナのクメール美術、チベットの仏教美術や中央アジアの仏教文書等々を加えて東洋美術部門を益々充実していくのであるが、そのギメ美術館に、一九四五年、ルーヴル美術館の東洋美術部門がそっくり移管され、現在の「国立ギメ東洋美術館」が出来上がったのである。

ギメが日本に行った時、川鍋暁斎という浮世絵師と知り合い、暁斎とレカメーがお互いの肖像画を描き合ったというエピソードが残されているし、その川鍋暁斎を帰国後もヨーロッパの人達に紹介したというから、ギメが浮世絵師や浮世絵に関心を持っていたであろうことは一応理解出来るが、彼がどの程度浮世絵を収集したかに付いては残念ながらよく分らない。現在のギメ東洋美術館が所蔵する浮世絵コレクションは、ジャボニズムの影響

下にあつた当時の絵かきやコレクターによって収集されルーヴル美術館に寄贈されたものが殆どであつて、彼自身によるコレクションは案外と少ないようである。

さて私がこの展覧会を見に行ったのは五月中旬の火曜日だったかと記憶するが、平日にも関わらず館内は大変な賑いで、今さらながら浮世絵人気というものに驚いた。

混み合つた場所を飛ばして空いている所の絵を見ながら取り敢えず場内を一周、二周目には写楽のコーナーで足を止め、七点の役者大首絵をじっくり鑑賞してまた場内を駆け足で廻る。最後のお目当てが、本展覧会最大の呼び物となつている「龍虎の図」だ。この双幅は凡そ百五十年前に葛飾北斎によつて描かれた肉筆浮世絵で、元々一對の掛け軸として一緒に表具され一箱の箱に収まつていたはずである。ところがどうした訳か、何時の間にか離れ離れになつて、片方の虎の絵は太田記念美術館の所蔵となり、もう一方の龍の絵は日本から遠く離れたフランスのギメ美術館の所蔵となつた。二年前の二〇〇五年

に東京の太田記念美術館が開館二十五周年を記念して館所蔵の浮世絵を初めて海外のギメ東洋美術館で展観することになった時、同館の副館長永田生慈氏（北齋研究者としての彼の名は専門家の間で広く知れ渡っている）は責任者としてバりに飛び、彼等と一致協力して展覧会を大成功に導いた。浮世絵展終了翌日より彼は直ぐさま、この返礼としての浮世絵展を日本で開催すべく、ギメ美術館の所蔵する約五千点もの浮世絵の中から日本へ持っていくべき優品約二百点を選択する作業に入った。その調査中に今回の目玉となった北齋の龍の図が発見されたのだが、その模様は氏が図録の中で説明しておられるのでそれをご参照頂ければ幸いである。龍の絵を見た永田氏が咄嗟に、自分の館の所蔵する虎の絵と一対を成すものである、と判断されたであろうことは想像に難くない。ともあれ平素の彼の北齋に対する情熱が、何時の頃からか分からないけれど長い間離れ離れになっていた龍と虎を再び巡り合わせた、と言っても過言ではないだろう。

ともかくも北齋の龍虎の絵の前で二丁三十分もじっと見ていただろうか。前に近づいたり後ろに下がったりもして見ても如何したことか、あまり大した感激も湧いてこない。そろそろ帰るべくとぶと振り返って龍の顔を遠目で見てみると、不思議にも龍の顔が優しく微笑んだのである。おやっ、と思ってもう一度近づいてみると、微笑んではないものの、龍の顔が何となく龍らしく見えないのである。龍（竜）というのは元々中国で生れた架空の生物で、皇帝の威厳を象徴するものとされた。中国の龍は五本の指、というか五爪で描かれ、五爪の竜は皇帝以外の誰にも許されなかった。日本では三爪で描かれるのが普通で、その顔には大王の趣と他を威圧する迫力がある。龍の顔が本来どんな顔なのか、なんてことは我々にはどうでもよいことであるが、北齋先生にとっては大問題であったのであろう。そのうちこの龍の目や鼻が何となく人間の目や鼻のように見えてきた。そうか、この目はひょっとしたら北齋自身の目なんじゃないだろう

うか、と思え出した。そう言えば虎の顔にも随分特徴があつて、北斎描く所のこの虎は他に見る虎とは全然違っているではないか。上から下を見下ろす龍の目には、九十年という長い人生をひたすら絵を描くことだけに捧げてきてもまだまだ満足しきれない不連続の北斎が見えるような気がするし、下から厳しい眼差しで龍を見上げる虎の目には、余りにも偉大で遠くの存在ではあるがそのうち貴方を追い越してみせますよ、とでも言わんばかりの若き日の広重の姿が見て取れるような気がしてきた。いやもしかしたら時の政治を堂々と風刺して浮世絵師の気骨を示したあの国芳さんの方であるかも知れない、なんて、一人で勝手に合点して会場を後にすることにした。

そもそも「浮世絵とは何ぞや」と言われると中々簡単に答えられそうにもないが「浮世を映した絵である」と言つと簡単である。しかれば「浮世とは何ぞや」となる。「我々の住む世間のこと」と答える。「世間を映した絵が浮世絵」と言われても、あまりピンとこない。それ

もその筈で、日本で浮世絵なるものが生まれた江戸時代の初め頃、浮世と言えば即ち「心うきうきの世界」、つまり遊里の世界を指したからである。当時の江戸の遊里と言えば吉原のことで、吉原の太夫や遊女、或いはそこで遊ぶお大尽や町人、はたまた吉原の町や廓などを描いた絵が浮世絵ということになる。現在の我々が浮世絵と呼んで思い浮かべるあの晴信や歌麿の美人画や、北斎や広重の風景画のイメージとはかなり違っているかも知れないが、本当に当時の吉原は江戸市民の憩いの場で、この四方を塀で囲まれた一角で起こつた悲喜交々の逸話が浮世草子や読物として大変多く残されている。吉原は江戸文化そのものと言つてもよい程で、吉原の案内や遊び方、また花魁遊女の個人紹介に至るまで、一々ちゃんとした書物として出版されていたのだから実に驚くべきである。身分制度に縛られていた江戸時代に、兎に角金さえあれば上下の差別なく遊ばせてくれるというこの別世界を誰もが憧れた。そうした吉原の風流文化が花咲く中に菱川

師宣が現れ、吉原風俗や美人画、或いは武者絵や江戸名所等々を描いて浮世絵師の祖と言われるようになる。万治三年に鱗形屋という版元から、『吉原枕』『吉原鑑』の吉原案内書の挿絵を描いてデビュー（但しこれ等の本には署名が無く、現代の学者間では師宣作かどうか意見が分かれる）した師宣は、寛文十二年（一六七二）に『武家百人一首』を描いて初めて「絵師菱川吉兵衛」と自署を入れる。五年後の延宝五年の正月に刊行された絵本『小むらさき』にはその一部分に男女交合の図が挟み込まれて、今日我々の言う春画の嚆矢となった。またこの年彼は『江戸雀』十二冊を描いて、江戸の名所を彼独得の人物図と共に紹介したので大いに人気を得た。翌延宝六年に『吉原恋の道引』や『古今役者物語』等を出すに至って師宣風と言われる浮世絵的画風を確立する一方、彼は、『絵本雑書枕』や『和合同塵』という秘画の入った絵本をも描き、この方面にも彼の優れた力量を發揮し始めるのである。しかし何と言っても師宣の名を天下に高らかに

しめたのがあの井原西鶴の小説『好色一代男』の挿絵を描いたことである。好色一代男は天和二年（一六八二）に大坂で売り出されて大評判になった浮世草子と呼ばれる軟派の小説で、この挿絵は吉田半兵衛が誰が大坂の絵かきを描いたのであつたが、江戸版を刊行するに当たって、純江戸風な本に仕上げるべく売り出し中の師宣に白羽の矢が立った。好色一代男の内容と師宣の画風が完璧なまでに一致して江戸版の初版が二年後の貞享元年に刊行された時、武士の治める江戸の町にも徒ならぬ衝撃が走ったことだろう。兎に角師宣の挿絵により江戸版の出来栄は非常に宜しく大いに売れたという。好色一代男の挿絵を描いたことは確かに彼にとつてラッキーではあつたが、以後は他人の小説に挿絵を描くことも殆どなく、彼独自の絵本（挿絵本と違って純粹に絵だけを楽しむように作られた本、僅かに字句の説明などが入っている場合もある）の世界を創り出していく。彼の絵は依然吉原風俗や男女を描いた図が多かつたものの、その世界は武

者絵や年中行事などにも広がりを見せ、歌舞伎や浄瑠璃を題材にしたものも現れてくる。天和三年（一六八三）に出版された『大和絵づくし』三冊本中の『武者絵づくし』という絵本の序文に「爰に房州海辺菱川氏という絵師…絵をすきて青柿のへたより心をよせ倭国絵の風俗三家の手跡を筆の海にうつして浮世これにもとづいて自工夫して後この道一流をじゆくしてうき世絵師の名をとれり…」と記して、ここに自ら浮世絵師第一号を名乗ったのである。

師宣が浮世絵師なら、師宣が描くものが即ち浮世絵と理解すれば問題は簡単であるが、師宣の絵本には「大和絵師菱川師宣」とか「日本絵師菱川吉兵衛」の署名はあっても「浮世絵師菱川師宣」の署名は全然見い出せない。絵本の序文には「浮世絵師の名をとれり」と書いたにも係らず、末尾の奥付には堂々と浮世絵師と署名出来なかった訳は、浮世絵とか浮世絵師という言葉自体が当時の日本では殆ど知られていなかった言葉であって、たぶん

師宣自身が思い付いて使用した新造語ではなかったか、とさえ思えてくる。実際これ以後の江戸時代にも浮世絵という言葉を使った例はあまり無いのである。

師宣は芭蕉と同じ元禄七年に六十四歳で亡くなったがその生涯で確認される絵本や挿絵本は大体六十種ほど、それ以外にも画風から判断し師宣作とされる物が約百種類ある。彼の絵本は現代でも非常に評価が高く、二三年前に東京の古書店で三百万円の値が付いたものを見かけたが、三百年前に出来たとは思えない位本当に綺麗な本であった。絵本が彼の作品を代表していることに間違いは無いが、師宣を語る時忘れてはならないことがも一つある。それは彼が一枚ものの版画の創始者でもある、ということだ。現代の我々が想い浮かべるあの歌麿の美人画や北斎の富岳三十六景のような綺麗な色が付いた浮世絵はまだ出来上ってはいないものの、絵本の絵よりは二回りほど大きな一枚ものの絵を考え付いたのである。それに絵本だと開いた時の両面の図の中央が切



れているので如何しても絵が一つに繋がらない欠点がある。それを一枚の絵にするとすつきりとして非常に見易い一つの画面が出来上がることになる。こうしてまだ墨刷りの一色ながら、一枚ものの版画が誕生することになった。ただ一枚のものと言っても本当に一枚だけで売ったものではなくて、十二枚とか二十四枚を一組にしてセットで売ったようで、「吉原の躰」「上野花見の躰」と言った風俗図から、「曽我物語」「酒吞童子」などの歴史物、「衝立のかけ」等々の秘画も見られ、これ等は大体延宝頃から始まったようである。この一枚ものの組物の版画はまだ色も何も付いてない墨一色のものだったが、中には筆で色を付けた（手彩色）特製版も作られた。

墨摺りの一枚ものの版画が、いつしか朱・緑・黄の三色刷りの紅摺絵に発展し、天明二年の多色刷り版画（これを鈴木晴信グループが錦絵と名付けた）の完成によって所謂「浮世絵」として日本を代表する芸術にまで到達する。ここでちょっと頭を整理しておこう。最初は師宣

等が描いた風俗画を浮世絵と称したが、風俗絵本の中から一枚刷り組物の版画が生まれ、その一枚刷り版画が多色刷りの錦絵（錦の織物のように美しいという意味か）になるに及んで、今日の我々はこれ等色刷りの版画を浮世絵と呼ぶようになったのである。師宣時代の墨摺りの版画も勿論浮世絵と呼んで差支えはないが、専門家の間ではこれ等を「初期浮世絵」と称して色刷りの浮世絵と区別しているのが現状である。

さて、浮世絵の裏の部分が春画である。勿論浮世絵に裏も表もない筈であるが、いつの頃からかこういう風になられるようになった。同じ浮世絵師が描いた作品でも男女の性交の場面を描いた絵は裏であり、普通の美人画や風景画が表である。例えば師宣の時代、彼は吉原の風俗画を沢山描いたが、吉原の風俗を描くに当たって最初は茶店の外観から内観に至り、待合所から厨房の様子なども細かに描いてのち太夫や遊女の客接待の場面に至るのであるが、この場面において秘戯画が織り込まれた。

これは多少意図して描かれたかも知れないが、吉原風俗を描く一環として描かれたと見る方がむしろ自然である。風呂も当然混浴であり、部屋の間仕切りも有るか無いかの時代に男女のセックスが彼方此方でちらちら垣間見られるのも当たり前時代に、そして公然の遊郭が全国各地に置かれた時代に、日本の絵本や浮世絵の中に春画が描かれたとしても、今日我々が思うほど卑猥なわけではなかっただろう。否それどころか、これこそが即ち江戸庶民の文化そのものではなかったか。事実春画や好色本が生まれた寛文・延宝の頃より幕府によって一回目の好色本禁止令が出される享保七年（一七二二）迄の五、六十年間というものは、春画（江戸時代には枕絵と言われた）は本屋や草紙屋の店頭で堂々と売られていたことからもよく分かる。享保時代になって好色本の禁止令を出した將軍さんほかの吉宗様で、前号では中国の書物や外国の書籍の輸入緩和政策について書いたが、今回は反対に禁止した方である。その時の町奉行が大岡越前守忠相

であったというから益々面白い。好色本の禁止令は凡そ

一、只今迄、有来り候板行物之内、好色本

之類ハ風俗之為ニモ不宜儀ニ候間、段々

相改メ絶版申シ付クベク候事

というものであった。それ迄は版元名や絵師の名を堂々と入れていた枕絵や好色本に、これ以後それ等の名前が消え（入れる場合は絵師は隠号を用いた）秘密の出版となっていた。なぜ枕絵が享保時代になって急に取り締まられたのか、というとそれは枕絵が目に残るくらいに氾濫していたからであろうと推測されるが、やはり吉宗の享保の改革の延長線上でのことであろう。ともかくこの政策により多くの枕絵本や西鶴の好色本が潰されたと言っから、成程好色一代男の原本が稀少な訳である。ただ好色一代男の挿絵には秘画は入っていないことから考えると、享保の好色本禁止令はつまるところ風紀の取り締まりを主に意図していたと見ることが出来る。

明和二年上方からやって来た新進気鋭の絵師鈴木晴信

はそれ迄の江戸には無かったスタイルで絵曆（江戸時代は太陰曆を用いたので毎年大小の月順が変わった為、絵曆という趣向を凝らした小さな刷物を創作して年末にお得意様や仲間に配った。これが流行して段々エスカレイトし、他人を驚かせるような趣向の刷物を制作しようとする熱意になり、当時行なわれていた三色刷りの紅摺絵をはるかに超越して遂に明和二年、多色摺り木版画となつて浮世絵が誕生した）の中に美人画を描いて一躍大人氣を得た。またこの絵曆が色刷りの綺麗な版画に仕上がつていた為、晴信はこれを錦絵と名つけて草紙屋の幟に立てて大いに宣伝した。以後色刷り版画は錦絵の名で定着し、清長・歌麿・写楽・北斎・国貞・英泉・国芳・広重等々が出て浮世絵界を賑わせたが、写楽を除いて他の絵師はいづれも枕絵を描いた。

錦絵時代の枕絵になると性交の場面をクローズアップしたり、局部を異常にデフォルメしたりしてエロティックな迫力が増してくる。それが錦絵というカラー版で表

現されるので益々リアルで生々しい露骨な図が展開され始める。ここにおいて彫りと摺りの技術は最高潮に達し、国貞描く『吾妻源氏』三冊には、ボカシや空摺りの粋を尽くし、金・銀・にかわなどの材料もふんだんに使われ、陰毛一本一本に彫師の全身全霊を注ぎ込んで、枕絵ながら真にあっぴな出来栄である。松平春嶽が幕閣への密かな贈り物にする為に作らせたという伝聞と共に元箱入りで現代に伝わっている。享保の好色本禁止令以後、地下出版化した枕絵ではあったが、寛政二年・天保十二年の二回の取締りにもめげることなく延々とその命脈を保ち続け、幕末に至るまで優作・駄作・珍作の別を問わず、実に夥しい数の枕絵が創作されることになる。

「枕絵を見ずして浮世絵を語るなかれ」とは浮世絵を研究する人の態度を言ったものであるが、浮世絵を研究しようとすると必ずこの表と裏の両方を勉強しないと片手落ちになってしまう。とは言うものの、現代では普通の人が枕絵を目にする機会は殆どないし、研究しようと

も日本の公共機関で春画を収集している所などは皆無である。(実を言つと一か所あるにはある。)大学の先生が白昼堂々と枕絵を学生の前に並べて講義する姿を誰か想像出来るだろうか?ともかくこれ迄は、専門の浮世絵研究者でも枕絵に対してある程度の知識は持つていたに違いないが、本気で裏の浮世絵を研究した人は全く無い。と言つよりむしろその部分を避けて来た、と言つ方が正しい。なぜなら裏の浮世絵は、戦前戦後を通して公共猥褻物として官憲により厳しく取り締まられてきたので、それを所持すること自体は目に見られたが、売買することは絶対的に禁止されたからである。そんな厄介な物を一体誰が好き好んで研究などするだろう。

ところが、日本にも気骨のある?人間がいて、官憲何するものぞ、と果敢にこの分野を研究し続けた一人のアマチュアがいた。その名を林美一という。若き日は保険会社のサラリーマンだったり、大映京都撮影所の宣伝マンであつたようだが、いつしか春画の虜になり、この日

陰の出版文化を見直そうと心に誓つた。江戸文学を読み漁るうちに彼は軟派系の浮世草子や人情本等々に興味を持ち、その軟文学研究の中で春画本に出会う。彼の春画趣味は、あくまで読み物の延長線上としての本であつたようで、書物文化の一端としての春画本の研究にあつた。江戸幕府の数回に及ぶ取締りにも屈することなく生き続けたこれ等の艶本を、現代において出来るだけ正確に認識することが、彼の使命となつた。彼のライフワークである『艶本研究』十二冊の中で「なぜ艶本を研究するか」を毎号の巻頭で語っているが、要約すれば、卑猥な性風俗本としてどちらかといえば字識者のおエライさん方から敬遠され続けてきた春画を、純然たる書物として普通に研究されうる対象とすること。浮世絵や浮世絵師研究にはやはり春画は欠かせない資料であり、春画を研究することによつてのみ得られる知識が大いにあること。性交渉の場面を描いたからと言って春画を直ちに現代の猥褻写真などと同等に扱ふことの間違いを世間に認識させ

ること、等々である。そしてこの艶本研究の第十二号、北斎号（昭和四十三年）で、第一号の『国貞』（昭和三十六年）が筆禍にあり、裁判が継続中であることも報告している。春画を見たこともない検事側の鑑定人が調査書を提出し、春画を見たこともない裁判官が裁き、国貞号の読者を証人として証言させても誰一人これを猥褻と言う人はいない、と書いている。我が同朋小松秀樹が『医療崩壊』の中で「医療裁判が警察の手で裁かれるのは適切とは思えない」というような意味のことを書いていたが（勿論私も医療と猥褻とを同一視する気持ちは毛頭ないのであるが）その考え方には心から賛同したい。

「猥褻が芸術か」という問題は結論を出すのが非常に難しい。この観点でいくら論争しても決着が着く筈もないだろう。ただ、長年古書を扱う中で触れ得た春画というものを本屋としての目で眺めるとき、私が一番不思議に思うことは、なぜこれ程迄に多くの春画類が延々と制作され続けたのか、ということである。封建時代の江戸

時代にあつて、延宝の頃に師宣に始まった春画が実に二百年もの長きに亘つて度々の厳しい取り締まりにも耐えて生き続けられたのか、しかも笑つてしまいたくなる位手を替え品を替え、あの手この手の限りを尽くして創り続けられたのか？確かに娯楽の少ない当時であるから、本ほど楽しい慰みものは無かつただろうし、これ等の春画も民衆の要求があつたからこそ制作され続けたことも事実であろう。しかし古今東西を限らず本の出版はそれを作る側、即ち江戸時代の版元の意思が大いに反映されてしかるべきである。版元達の春画制作の意図が一体何所に在つたのか？

残念ながら私は、現在の時点ではまたこの明確な答えを得るには至つていない。ただ春画の中に潜むアイコンーやユーモアの精神を見逃してはいけないことだけはつきりとしている。そして春画を作る側の人達に、常にお上を意識した反骨の精神が見え隠れしていることも指摘しておきたい。春画は表面の一部だけを見れば、完全

に工口芸術だと言えるかもしれないが、これ等を作った浮世絵師や版元の心意気は、ちよつと違つた所にあつたように思われてならない。私は本屋として、江戸時代に於ける二百年の春画史を何とか見極めてみたと思う。



## ある映画監督

観一・20回 多田 健治

薄型テレビ・DVDプレーヤーの普及に伴い、巨匠監督のDVDセットが販売されるようになった。数年前より黒沢明・小津安二郎・木下恵介・成瀬巳喜男が出て、『今度こそ』と期待していると、昨秋『没後五十年…』と仰々しく登場。学生時代に『雨月物語』を、七、八年前に神戸新聞地で『山椒大夫』『楊貴妃』『赤線地帯』を観て、『他の作品も!』と願つたが、なかなか機会を得ず飢餓感が頂点に達していた。昭和二十七年『西鶴一代女』でベネチア映画祭監督賞を、翌年の『雨月物語』、翌々年の『山椒大夫』で同映画祭二度の銀賞と、三年連続で受賞した。因みに『雨月物語』と金賞争いしたのは、オーディリー・ヘップバーンのデビュー作『ローマの休日』も

うお判りになった方もお在りでしょう、溝口健二です。  
 “何故かくも多くの名作を撮り得たか？”の疑問を解く  
 ポイントは、その生い立ちと社会人生活にある。一九七  
 六年版岩波新書九六一 “ある映画監督 溝口健二と日本  
 映画 新藤兼人 著”を参照しつつ、独断・推測を交え  
 て解明したい。新藤は、溝口の脚本や助監督を長年務め  
 た。

東京下町の生まれ。土族出の父は山気が強くひと儲け  
 を企んでは失敗の繰り返しで、赤貧洗うが如し生活。遣  
 り繰りに苦労する母の姿は、癒えることの無い深いトラ  
 ウマとなり、少年の胸に沁み付いた。二歳上の姉は小学  
 校入学前に養女に出され、やがて芸者となった。どぶ板  
 の鳴る下町どん底生活の長屋には、脱出不可能な貧困が  
 あった。浮かび上がろうともせずさして不満も持たず、  
 流れる俚に生きて逆らおうとしない。飲んで食って子供  
 を作って、それで満足していた。溝口はそれを見た。そ  
 の中がなじがらめに閉じ込められた自分の姿も見た。

小学校卒業前に養子に出されたが程なく舞い戻り、凶案  
 屋の弟子になった。貧苦のどん底の十七歳時、母と死別。  
 父と以前にも増して衝突する毎に芸者から松平子爵（高  
 松藩は伯爵）の囲われの身となっていた姉毛に入り浸っ  
 た。家の犠牲となり家族の重圧に喘ぐ女を、目の前で見  
 なければならなかったのである。「祇園の姉妹」「祇園囃  
 子」（噂の女）で芸者を描けば生き生きと生彩を放ったの  
 は、姉の環境で培われたものだった。為す事も無くただ



ぶらぶらしているのを見兼ねた姉が伝手を頼りに探し出した仕事は、何れも長続きしなかった。姉宅の敷居が高く、なつたのか琵琶の師匠宅で知り合つた俳優宅に入り浸り、

三度の飯にありつくという体たらく。二十二歳時、俳優夫人の勧めで映画界入り。俳優は過剰で雑用係の助監督は不足し、志望の俳優ではなく助監督。大震災で東京向島から京都へ撮影所移転。ここでも仕事を離れると遊里を徘徊し、同棲した雇女ヤトナ 仲居兼酌婦 と痴情のもつれから刃傷沙汰となり、背中にカミソリ傷を負うという放蕩振り。晩年、入浴中に傷痕を見て驚く知人に、『こんなことで驚いていたらダメですよ、これでなきゃ女は描けませんよ』と嘯いたという。前夫と子供を残して出奔しヤクザと再婚のダンサーと二十九歳時に結婚。その後放蕩はなりを潜め、少年の日姉に頼つた様に、精神面・生活面で妻に頼りきりるようになった。『近景に上下を貫通する数本の太い柱・樹木を配し、遠景に人物』シーンを散見するが、強い頼れる者への憧憬発露であろうか？

十年後妻は発狂。『自分が感染させ、それが原因で発病』と自責の念にかられ作風は変わり、(西鶴一代女)(雨月物語)では贖罪的なかげが窺える。

演出は他監督と異なり演技指導をしない。『あなたのその時の心理は、それで良いのですか』とか、『もつと相手の気持ちを反射させなさい』とか言うだけ。『先生、ここはどう動いたら良いのか教えて下さい』とでも言おうものなら、即時にビシヤリと跳ね返ってくる。『あなたは役者でしょう。それでゼニを取っているのでしょうか。それなら演技ができる筈でしょう。僕は監督だから役者の真似なんかできませんよ』という様に、全て理屈攻め。演技の誤魔化しの効かないロングカットを多用し誤魔化しの効くクローズアップを避け、俳優を追い詰め能力を十二分に引き出そうとした。独特のワンシーン・ワンカットは、この結果生まれた。昼休みも外出しないで魔法瓶を手元に置き、監督椅子に座つたまま無人のセットを凝視していたという。緊張中断を避けたのだらうが、『こ



れでもいけない、未だ充分でない。もつと何かがあるに  
違いない、こんなことで満足してはならない!』とばかり、  
必死に自分も追い詰めていた。『後世に残る作品  
を!』という奇麗事ではなく、『失敗すれば、クビになり  
転落』という恐怖からであった。喋り難い・不自然なセ  
リフは、『生活の匂いが無い』として修正され、毎朝シナ  
リオ変更部分が黒板に書かれていた。全ては、『本物の人  
間を生々しくリアルに即ち俳優の単なる演技ではなく、  
人間の匂いのある実態そのままの所作を撮る』ため。

“リアリスト溝口健二”と称される所以である。従って、  
“知悉の社会・人間なら生き生きと迫真を持って描けるが、  
不知の社会・人間は描けない”となる。底辺でもがき苦  
しみながらもただひたすら男に捧げ尽くす女を『残菊物  
語』(近松物語)『浪花女』で、男を手玉に取る強かな女  
を(浪華悲歌)『祇園の姉妹』 O.L・芸者を演じた十九  
歳の山田五十鈴は、『演技ではなく地か?』と思わせるほ  
ど自然体で迫力があつた。で描いた。それらの女の内に、

母・姉・雇女・妻・諸々の女を見ることが出来る。武士  
社会の(元禄忠臣蔵)や上流夫人・社会の(武蔵野夫人)  
(楊貴妃)が失敗作なのも理解できよう。

(西鶴一代女)は“大店の嬢はんが、皮肉な運命に翻  
弄され転落”の物語である。松平三万石(この石高だと  
維新後は子爵)の側室となり男児を産むが、暇を出され  
た。以降、男のランクは落ちていくばかり。男児が藩主



となりあわよくば逆転サヨナラホームラン 夜鷹から玉の輿 かと期待させたが、冷徹にも見送り三振させた。もがき苦しむ女を迫真に描いているが、どこにも救いは無い。エンディングで女の業を一身に背負って夜の闇を彷徨する田中絹代の巡礼姿は、真に凄惨の限りであった。映画と異なり、姉は正室に収まった。「雨月物語」は上田秋成の古典的怪異物語を、宮川一夫のカメラが、「幽玄世界の絵巻物」として絶妙に捉えた。ラストで、荒廃した故郷に男が帰ると、荒れ果てた家には田中絹代演じる亡霊の妻が待っていた。夫の帰りを待ち焦がれた妻の魂が、仮の姿を借りて帰ってきた夫を優しく迎えて労う。妻へのオマージュである。「山椒大夫」では、鵑外原作を仏教的無常感の下に解釈し直しているが、「田中絹代演じる生き別れの母を若くして死別した母に、弟を奴婢の身から脱出させようと入水する安寿を姉に置き換える」こともできよう。希望を失い自暴自棄の弟を『昔の厨子王はこんなじゃなかった、お父様のお言葉をお忘れか！』

と窺める香川京子は、凛々しく毅然としていて美しかった。最終作「赤線地帯」のラストでは、老娼婦と成人した息子の対面を残酷・冷徹に描いた。撮影中には歯肉出血があつたという。昭和三十一年八月白血病で死亡、享年五十八歳。作品九十本、現存三十数本。

蛇足…水谷浩のセットは実に精緻で興行きがあり、宮川一夫のカメラは白黒のコントラストが巧妙に強調され、映像美も楽しめる。



## リハビリテーションの現場から

観一・32回 小嶋 令子

作業療法士として働き二十三年になります。現在はりハビリテーション専門学校の講師をしながら、在宅患者さんの訪問リハビリ治療を行っています。ここ数年の間、にめまぐるしく変化する介護保険制度のなかで、年々患者さんやご家族からの、不安な声・悲痛な訴え・落胆のため息、を耳にすることが多くなっています。

昨年4月の介護保険制度改正後、車椅子や介護用ベッド等、福祉用具を借りる際に介護保険給付が受けられなくなったケースが増えています。これまで福祉用具に対する介護保険給付が受けられていた要介護1・要支援の患者さんが、改正後は給付の対象外になってしまったからです。これに認定されてしまうと、患者さんにとって

必要で、本人が継続を希望していても、容赦なく取り上げられてしまいます。介護用ベッドを使用していることで手すりが使え、寝返りや起き上がりが必要なく一人で出来ている人や、ボタン一つでベッドが昇降させられることによつて、なんとか立ち上がりが可能になっている患者さんの、ただ「出来る」ということだけしか評価しようとならない為、ベッドがなくなった後の生活の予測をしないまま簡単にベッドを取り上げてしまうのです。患者さんは床に敷かれた布団から動き出せず、機能低下と共に自立度も低下し、家族の負担が極端に増えています。また認定基準もここ一三年の間にごんごん変わっており、高齢により状態が悪化しているにも係わらず、介護度4から介護度1に変更されたケースもありません。専門家の目から見ても不適切な認定度となっている場合が多いです。軽く評価されることによつて給付限度額が大幅に下げられ、必要なサービスもどんどんカットされています。改正法は予防を重視する名目で要介護者を減

らし、給付を抑制して財政面の立て直しを図るのがねらいのようです。また今の介護保険の認定調査では、高齢や怪我・病気特有の（日によって大きく変動する体調の変化）は汲み取ってもらえません。歩けると評価されたり、歩けなくても外に出られると判断されると、要支援と認定され通所対象となります。買物に行けず食事の準備ができなくても、汚した洗濯物が洗えなくても、痛みや痺れで体が動かない日があっても、昨日まで受けられていた訪問リハビリや訪問ヘルパーによる訪問サービスは、全て打ち切られてしまうのです。

活動性が高くリハビリ治療を頑張りたいという患者さんたちの認定が、かなり低く治療の機会すら奪われていく今の現状には大きな問題があります。中枢神経疾患による運動麻痺や高次機能障害、感覚障害などは、日にち葉の怪我や病気と違い、専門家による専門治療を受けなければ、異常発達し悪化してしまう厄介な後遺症だからです。ほおっておいても身体は硬くなるし、がむしやら

に頑張ってみても、痙性を亢進させ反って悪化してしまうのです。改善はもちろん機能を維持させることも大切な治療なのです。

地域包括センターを中心とした介護予防事業では、安易に通所でのリハビリを勧めているように思われます。厚生労働省が介護保険制度改革において予防重視型システムへの転換を強調する根拠として、要支援・要介護1といった軽度の方々においては高齢による衰弱や骨折・転倒などの「廃用症候群」が多いためとしています。つまり家の中にこもって不活性になっている方たちの介護量を減らそうという発想です。しかし、原因疾病が廃用症候群の実際の対象者の割合は二割〜三割程度（厚生労働省はリウマチなど関節疾患も含めていますが、単なる不活性ではないため除いた）であり、適応しない方々のほうがはるかに数が多いのです。また訓練機器やトレーニングマシンを多数そろえ事業所に通所をすすめても、脳血管障害による身体の麻痺・高次機能障害・感覚障害・

失調症・パーキンソン・関節リウマチ・変形や関節炎による痛み…等の治療には対応しきれていないのが現状です。それどころか不用意に間違った訓練をすることで、患者さんの痛みを増幅させてしまったり、麻痺による痙性を亢進させ、運動麻痺を悪化させる危険が大いにあるのです。通所リハビリでは、個別の問題には対処できないにも係わらず、それらの身体障害に対しての適切な評価もされず、介護予防の言葉のなかで、「家から外に出させる」ことだけに主眼が置かれてしまっています。

一、下肢の関節手術後で介護度1の患者さんのケース  
手術後退院し、なんとか杖歩行できる状態で在宅生活となる。訓練目的でデイケアに行ってみたが、もともとひどい冷え性のためエアコンの冷風に体調を崩してしまい、担当ケアマネージャーの配慮で訪問リハビリを開始した。順調に回復し、ようやく一人で屋外歩行ができるようになった頃、介護認定調査があり、要支援2と判定

された。自動的にA市の地域包括センターのケアマネに担当が変更となるとすぐに訪問リハビリの打ち切りが通知された。これから寒い冬に入る年末時期であり、「ひどい冷え性で冬の通所は辛い。せめて冬を越して春になるまで、ちゃんと歩けるようになるまで訪問リハビリを続けさせてください」とご本人は懇願されたが、A市のケアマネージャーは「要介護から要支援になったから訪問サービスは利用できないと法律で決まりましたから、デイケアに通所してください。」の一点張りであった。パンフレットには数々の訪問サービスの項目と内容が列挙されているにも係わらず市のほうからも「使えるサービスはありません」とか「法律が変わりましたから」と嘘を言われた。実施要項の中には訪問サービスをしてはいけないという文言は無く、必要性があれば訪問によるサービスは受けられると書いてあり、本当は要支援になって介護予防訪問リハビリが利用できる制度があるはずなのに、明らかに嘘を言っている。担当セラピストも医療

的側面から継続の必要性を訴え、患者さんに対する市の嘘の説明に抗議したが、説明もせず今後のケア方針も明確にしないまま一方的に訪問リハビリは打ち切られた。困って県に問い合わせると「県は指導する立場に無い、市の方の担当者に今度話しておきます」と言う。何の連絡も無いので、もう一度市に尋ねに行くと「県を通して国から指示されることなので私たちには責任は無い」という。その後患者さんはデイケア通所も希望されるはずもなく、A市から何のケアサービスマ用意されることもなく切り捨てられた。担当セラピストは患者さんの在宅生活の維持を最優先に考え、医療保険での治療継続が可能かを県に確認後、春になるまで訪問リハビリを継続して実施し、今ではなんとか安心して家で生活できるようになった。

二、脳血管障害による重度半身麻痺のある介護度1の患者さんのケース

左半身だけで車を運転できるように努力して、積極的に外に出て行こうと頑張っている。さんは、麻痺側に疼く様な強い痛みを持っている。その痛み治療の必要があり病院に外来通院を頼みに行ったが、病院の都合で断られた。他の選択肢が無く訪問リハビリを希望された。

C町の介護保険担当者は痛み治療の必要性を認め、訪問リハビリでの治療を開始した。痛みの治療を行うことで悪化を防ぎ、生活行動範囲も徐々に広がっていった。ところがC町がB市と合併したとたん、B市から介護認定調査員が来て介護度1から要支援2に急に変更になった。自動的に地域包括センターのケアマネージャーに担当がかわり、いきなり電話で「来週から訪問リハビリはできません」と言われた。サービスタ終了時には、ケアカンファレンスを持たなくてはならないはずが、利用者の意見は全く聞かず、訪問担当セラピストにも病状確認の連絡

は一切無かった。突然リハビリを中止された患者さんが困り、「痛みの治療をしないと動けなくなるので、このまま続けさせてほしい」と要望したが、(要支援になったので訪問はできない)という理由で聞いてもらえなかった。これまで担当していたC町のケアマネージャーは、何度も治療継続の必要性を地域包括センターのケアマネージャーに説明した。また担当セラピストが同席し、訪問リハビリ治療の必要性を説明すると、地域包括センターのケアマネージャーは理解を示した。しかし、それでもB市の担当者は認めないということだった。市の担当者に直接話したいと申し出たが、地域包括センターのケアマネージャーに対応させるだけで出てこなかった。何の説明も無く、ただ「ダメだ」ということで打ち切られた。困って県の長寿社会対策課に相談したが、「市の担当者に話してほしいときます」と言っただけで何の改善もなかった。

現在、自治体によっては介護保険担当者に相談に行っ

ても一括で切り捨てられる対応のところがあります。利用者から上がってくる問題や要望や不満の声は、市の担当者の段階で揉み消され、どこにも届いていないのです。揉み消され相談する所さえ無い患者さんや家族は、泣き寝入りすることになります。泣き寝入りしたことを市の担当者は「利用者さんには充分説明に納得していただきました」と言っ。悪質なのは、この前例を作っておいて、他の利用者から同じ様な問題が上がって来た時に、無理矢理説明する理由として「他の人は皆納得してますよ、あなただけ特別にする訳にはいかないですよ。あなただけするということになる」と他の人のことはどうすればいいんですか、前例がありませんし」と無茶苦茶な論理で責め立てます。セラピストが「患者さんの困っていることや要望を、橋渡ししていくのが担当窓口の仕事じゃないんですか？法律が変わったとしても、患者さんにとって不利益が生じたり、たちまち生活に困るという状況は法律の方を変えて行かなきゃいけないんじゃないです

か？」と聞くと、「私は雇われなので上から言われてや  
っているだけ」と言つ。「あなた方にとって何が一番大事  
なことなんですか？」と聞くと、「利用者の意向が一番大  
切です」と事も無げに言つ。「矛盾してないですか？」と  
たずねると黙っている。「A市」の福祉政策は、今のまま  
で良いと思いますか？」とたずねると、「市長と話すん  
だつたら勝手にどうぞ、私には関係ない」と逆ギレる。

福祉の担当でありながら、福祉のことに何の責任も感じ  
ていないのです。医療保険も介護保険も患者さんを中心  
とした医療行為でありながら、行政サイドは直接患者さ  
んの身体の全責任を持つて係わっている医師を始めとす  
る医療関係者の意見をもあまりに聞こうとはしません。  
保険財政が最優先であるように説明し、行政主導の決定  
を下しています。県や市の担当者は、公の場では「困つ  
たことがあつたら何でも言つてください」と言います。  
しかし以上のような対応が現実であり、患者さんや家族  
はどこにも相談できる所が無いのが現状なのです。

また要支援と認定されたたん、今まで担当していた  
ケアマネージャーから、地域包括センターのケアマネ  
ージャーに切り替えられてしまつのも問題です。ケアマネ  
ージャーの選択は患者さんの自由であつたはずが、強行  
に切り替えさせられてしまつのです。患者さんや家族は、  
今まで身体の事や家庭環境のことを理解してくれていた  
身近に相談できる人まで失つてしまい、不安でどうして  
良いか分からなくなっています。

そんな中、患者さんの希望を行政側に認めてもらおう  
と、必死で駆けずり回っている正義感とやる気のあるケ  
アマネージャーが、行政との板ばさみになって悩み、無  
力感に苛まれ辞めてしまつのを見るととても残念でたま  
りません。またサービスがどんどんカットされる中、事  
業所自体も経営が悪化し、人員を減らしたり閉鎖してし  
まう所も増えていきます。今の介護保険制度は利用者の二  
ーズに比べられるようなサービスの種類や内容を充実さ  
せるという当初の理念から、大きくかけ離れた状態にあ



ります。

百人患者さんがいれば百通りの症状があり、同じ症状の人は二人といません。それを一括りにすること自体無理な話であり、個々を無視している事になるのです。歩けていれば介護度は皆同じというのはおかしい話です。

転倒危険の要因にも人それぞれ違いがあります。せめて直接患者さんの治療に当たっている医療の専門家が、悪化や危険を予測した上で治療やサービスの必要性を訴えていたり、本人や家族が必要だと訴えている事例に関しては、聞く耳を持ち理解し、医療・介護の中心である患者さんの身体のことを一番に考え、医療やサービスの継続を認めてもらってもいいのではないのでしょうか。

昨年の厚生労働省研究班の調査では家族の介護をしている人の四人に一人はうつ状態にあり、介護者が六十五歳以上の場合三人に一人が「死にたいと思ったことがある」と回答をしています。人は誰でも死が訪れる瞬間まで健康でいたいと願っています。しかし今元気で働いて

いる私たちも他人事ではなく、年も取りまですし、いつ大きな怪我をしたり病気をするかわかりません。重度の障害を抱え深刻な後遺症と一生戦って行かなければならない状況に陥ることもあります。高齢化が益々進むこの日本では、介護する側の年齢もどんどん高くなっており、老老介護の家庭も少なくありません。現場で患者さんやご家族の声を直接聞く者として、誰でもが介護や医療の選択が自由にでき、ほんとうに安心して暮らせる世の中になることを切に願っています。



文芸コーナー（短歌・俳句）

# 漢詩

観一・9回 高嶋睦徳

曼珠沙華

一たび豊穰を斂めて、  
淡靄を帯び

一斂豊穰帯淡靄

耕田十里、夕陽斜なり

耕田十里夕陽斜

鐘声の阡陌、人語絶え

鐘声阡陌絶人語

彼岸の紅華、二月の花

彼岸紅華二月花

〔仄起式〕下平声六麻韻・平成十八年十一月・第六十九作

## 〔語解〕

曼珠沙華：彼岸花。ヒガンバナ科の多年生植物、秋の彼岸のころ赤い花が咲く。有毒植物だが、鱗茎は薬用。

豊穰……豊かな実り。

淡靄……うすもや、かすみ。

阡陌……田圃のあぜみち。

二月花……旧暦の二月で、今の三丁四月ころの花の盛りの頃。桃の花などをさす。

## 〔通解〕

豊作だった稲刈り作業が一段落し薄い霧がたち込めた田んぼには夕日が射し込んでいます。

時刻を告げる鐘の音が聞こえてくるあぜ道には、すでに人の影も途絶え、真つ赤な彼岸花が咲き乱れています。「霜葉は二月の花よりも紅なり」と詠じた杜牧の心境もこのようであったのではないかと思いつかべています。

## 〔解説〕

作者は田圃の土地改良事業に長年従事し農地の区画整理を手掛けてきました。農道が整備されコンクリートの水路や畦が多く見られ、農作業は飛躍的に省力化されました。しかし残念ながら田圃風景から、深紅の彼岸花を見る機会が失われてしまいました。未整備の昔ながらのあぜ道で、鮮やかに咲き乱れている姿にホッと安心しました。

〔作者〕 観音寺市栗井土地改良区 理事

〔詩軒 露風舎〕「吟道 臥風流 母神吟和会」に所属

水際すいさい城じょう

玉藻たまもの風光ふうこう、潮しお、潭たんを作なす

玉藻風光潮作潭

潜龍せんりゅう海うみに歸かえりて、煙嵐えんらんを吐はく

潜龍帰海吐煙嵐

千年せんねんの要衝ようしゅう、興亡こうぼうの跡あと

千年要衝興亡跡

凜烈りんれつたる寒風かんぷう、松籟しょうらいを含むふく

凜烈寒風松籟含

〔語解〕

水際城……水城・海と陸が接している所の城。  
玉藻……史跡 高松城にある 高松市立玉藻公園。  
潭……深い淵。  
潜龍……水中に潜んで未だ登らない龍。  
煙嵐……立ち登るつむじ風。  
要衝……重要な要所  
凜烈……寒さの厳しいさま。  
松籟……ヒュウヒュウと松に吹く風。

〔通解〕

水城みづしろと言われた玉藻城の景観は、瀬戸内海の深い淵につながっています。城の内堀をつなく水門は、何時でも臨戦態勢が整い、力を蓄えています。  
御家騒動により改易された生駒家に代わり、初代藩主松平頼重公は、水戸黄門の兄として、中国・四国の監視の使命を帯び、今日まで長い間その役目を果たしてきました。海から吹き付ける冬の激しい潮風は磯馴松いそなれまつとして松を南側に曲けてしまいました。

〔解説〕

数年の歳月を費やし、瀬戸内海の海水を外堀、中堀、内堀に引き込んだ城は、日本三大大城の一つと呼ばれています。城の東北端にある三層の月見櫓は、瀬戸内海を航行する船を見張り、北側に面した松は、海の烈風に晒されてすべて南に折れ曲がり、内苑御園の木々は護られて、素晴らしい庭園を保持しています。

〔作者〕

妻と散策

〔仄起式 下平声十三覃韻・平成十八年十一月・第七十二作〕

〔詩軒 露風舎〕「吟道 臥風流 母神吟和会」に所属

たま 七 ぎよ えん  
玉藻御苑

さんそん ないえん たんせい あら  
三尊の内苑、丹誠を表わし

三尊内苑表丹誠

さんすいこ こ か かくじょう あわ  
山水此に枯れ、客情を憐れむ

山水此枯憐客情

りゅうたい りんね しゅうらいしず  
流滞の輪廻、松籟静かに

流滞輪廻松籟静

しゅうみりょうせき せせい き  
須弥嶺石に、泉聲を聴く

須弥嶺石聴泉聲

〔語解〕

玉藻……史跡。高松城にある。高松市立玉藻公園。

三尊……三尊石：君主、父、師の三者を象徴して縦に立てた三本の庭石。

山水此枯：枯山水：日本庭園の一つで、実際の水を用いるのではなく、敷き詰めた白砂や小石を水面に見立て、砂等に描いた文様で流水を表現している。

流滞……流れたり、よごんだり。

輪廻……流転、転生。魂は因果応報に因り転々と生死を重ね不断である。

須弥嶺石……須弥山……大海のただなかに屹立する山で、太陽がこの山より登れば昼となり、山に隠れば夜となる。世界の中心に聳える山の石。水の流れは、この須弥山石の泉より湧き出ると想定している。

〔通解〕

讃岐高松城の玉藻公園は三尊石を中心に庭師が長年にわたり丹精込めて作り上げた御庭です。石こそ日本庭園の象徴とした枯山水の庭は見る人を引き付けます。削られた岩肌の文様は壮大な水の輪廻を物語り、松に吹き付ける風は今日とはとても静かです。内苑の北東隅の小高い丘に鎮座する須弥山石からは泉から湧き出る水音が聞えてくるようです。

〔解説〕

山石、川石、沢石の絶妙な配置や、重さ十一トンの手水鉢、一枚岩の石橋を見ていると、喧噪の世界から隔離された深山にわくわくといった感覚となり、石が語りかけてきます。

〔作者〕 一級造園士、妻と散策

〔詩軒 露風舎〕吟道 臥風流 母神吟和会〕に所属

〔平起式 下平声八庚韻・平成十八年十一月・第七十三作〕

五こ月がつ

三女・41回 河田 光子

十年後

観一・1回 岩田美代子

白き皿トマトオニオン盛りつけて

パセリも添えよう五月の朝あした

十年後のわたしを探す街の中

背な美しき古い人がゆく

みどり児のはげしく泣きぬし窓の辺に

ハーモニカの音聞きぬる五月

守るより攻めたい気分唐辛子

多めにかける大根おろし

細りし背の友も同じに吾あをみしか

常磐村植田四ツ辻亡き母の

まぶしき五月の再会久し

故郷の地名なくなりました

蛭

観一・7回 東 美千子

皇月過ぎ 水無月になり 蒸し暑く

蛭の環境 心配になり

我が家は 小川にのぞみ 初夏涼し

古希になりても ホタルに出合え

すゞ風や 今年も庭に 蛭きて

沈む心を 慰めてくれ

ふる里

観一・9回 内海 善子

デパ地下の菜の花ラベルにふる里の

香川とあれば諸手に抱う

菜の花あえ胡麻の香立つを置く卓に

夫との会話はずみし夕餉

島かげを漁船白波立ててゆく

水彩画のごとき瀬戸内ふる里

こと  
言 だま  
霊

## 日脚伸ぶ

観一・19回 鈴木マチコ

三女・27回 西原 ゆき

子のおかげ 父から聞いた その言葉

私も見習い 使って暮らす

灯を点けて欲しき日暮よ風邪に臥し

み仏の供<sup>く</sup>華<sup>げ</sup>に惜しまず寒牡丹

産まれたて みどりこのごと さなえ乗せ

ゆうつくりと 軽トラは行く

利久忌や 稚<sup>わか</sup>き<sup>な</sup>路を少し煮て

停年で読書三味の庫ちゃんと

ハイタッチして 仕事に行く

雛飾る母の遺影のかたはらに

長き手紙やうやう書きて日脚伸ぶ



遍路

三女・30回 清水 正子

千早赤坂村

三女・41回 藤田八重子

お遍路に明日発つ杖を玄関に

ゴンドラに札所引寄せ山青葉

お遍路に島の薄曇のみち平

夏草や古みちひとり遍路ゆく

遍路発つ献燈堂に満ちあふれ

冷え冷えと燭たくの灯一つ蔵王堂

楠公の産湯の井戸やいとど鳴く

秋寂ぶや如意輪堂に辞世の句

村の名の千早赤坂ほとけ草杜鵑草

金剛山宿の松茸つくしかな

(杜鵑草は秋に咲く植物の花です。)

百もも千ち鳥どり

三女・41回 長野 美枝

青あお信しな濃の

三女・42回 田中千鶴子

節分に嫁ぎきたりて五十年

青信濃 右駒ヶ岳こま 左木曾

久々に訪ひきし母校百千鳥

野沢菜の「おやき」頬張る「一茶茶屋」ほお

さみだるや笠の空海旅姿

八ヶ岳やっの 黄金こがねの波 ニッコウキスゲ

訪ねたる滝のしづきに合掌す

夏霧なつぎりのはれ間晴れ間に 富士の山

秋芝を刈り整へて座禅石

合歡咲いて 日照時間の 長い里さと

ふるさと

三女・42回 三好 昭美

梅あかり

三女・42回 森 晴美

田圃みち歩け歩けと朝雲雀

柳生街道 御土居の奥に 梅あかり

久に訪う産土神の樟若葉

ままごとの おすまし客に 初つばめ

ふるさとの神前結婚若葉燃ゆ

僧堂に 警策の音 春浅し

溝浚え人のつながり変らずに

迫り来る 夕立に向ひ 小花咲く

不動明王滝のしぶきを受けて立つ

サングラス はずし野点の 席に坐す

# 初音

観一・4回 富士田浩子

置き土産二声三声初音かな

通院やつつじの笑顔に出合ひけり

夫<sup>つま</sup>テレビ<sup>わたし</sup>私<sup>わたし</sup>やっぱり初湯かな

見せつけて木蓮素敵と仰がるる

遠望もよし近景も桜花<sup>おうか</sup>かな





# 同窓会報告

## 三中三十九回卒業生同窓会の記

三中・39回 高橋 正澄

平成十八年十月二十六日 十二時開会

観音寺グラウンド・ホテルにて

昨年は晩翠であつたが、お出でいただいた井沢先生が座ると腰が痛いので椅子がええなあといわれたので、今年椅子席にした。井沢先生は我々が四年生のときに新卒で赴任されて二年間西洋史を教えていただいた。独特の話し振りと左で書く縦横無尽の板書を今でも思い出す。十八年春、先生は思わぬ事故でなくなられ、今年は先生のおいでない会になつた。

何年か前ご案内の電話をかけたとき、「僕も八十を過ぎたので、次は行けるかどうかからんから、今回は出ます」



とのご返事でした。それから何回かご出席いただきました。私も昔の教え子の会のご招待をいただくとそのような返事をするにしています。私も無事三中を卒業してのちは、お会いすることもなく、昭和三十六年ころで

したか郡市対抗教員野球大会とかがあり呼ばれて行って見ますと、井沢先生が監督さんでした。考えて見ますと私たちの頃も野球部長だったようでしたから二十年ものあいだ観一野球部のお世話をいただいたのかなあと思いますが。ついでながら、そのとき私は高校のグラウンドで場外に打ち込んで先生にほめてもらいました。

さて、会の方ですが、そういうことで井沢先生の思い出を語る会のようにもなり、しめやかににぎやかに終わりました。

写真は昨年秋季晩翠でのものです。真ん中の一番頭の黒い方が井沢先生です。(本年の写真は割愛しました。)

今回の参加者名

横山 伯夫 高橋 嘉男 松山 翠 大広 仁  
船積 新吉 松井 重文 橋川 博 大広 幸一  
大塚 義雄 藤田 健一「十九年六月逝去」  
多田 誠一 上杉 弘 高橋 正澄





## 三 中四十回生（昭和十九年卒）の 同窓会について

三 中・40 回 横山 昭美

### 最近の同窓会実施経過の概要

一、第三十回、徳島祖谷大会：平成十五・九・十七

最終回のため、四十六名という多数の参加者を得て、盛大に実施できた。

二、天の橋立大会（番外）：平成十六・十・二十六

参加者：二十四名：県外（十一名）県内（十三名）

宮津市はちよつど台風・高潮災害の直後であったが、雨中強行実施した。

三、三中40回生、有志忘年会：平成十七・十二・五

観音寺市『きくや』参加者：二十名

四、三中40回生、有志忘年会：平成十八・十二・五

観音寺市『きくや』参加者：二十一名

満八十歳（傘寿）：卒業後六十二年経過した。

観音寺市市制五十周年記念誌を希望者に配布。

県外組（六名）観音寺名物干し海老を渡す。

物故者に黙祷：藤川大三郎君、藤川博幸君、

岡田 昭君

高橋 達君より千葉の『ピーナツ・バター』

を頂く。終戦後初めて口にした、美味しい『アメ

リカの味』を思い出し、感無量。

参加者

東京組（一名）大西昭作（川越市）

京阪神組（三名）合田英之・飯 豊人

三好道雄

山陽道（二名）宮川 一（周南市）

松浦良行（岡山市）

香川県（十五名）安藤菊夫（坂出）

（三豊市）：安藤 章・綾金二郎

近井 進・大久保完・今川文夫

関 兼義・臼杵 貢

(観音寺市) … 内海復義・秋山孝雄

秋山隆之・田中 覺・西川利秋

原 矣 ・横山照美

忘年会以後、一月に高橋朝則君、五月に相次いで横山弘君と岩倉禮一君が御逝去されました。八十五歳の大きい『命の峠』を乗り越えられるかどうか、はなはだ心許ない限りです。お互いに『一、十、百、千、万』の実行を毎日心がけては如何でしょうか。

『一』… 毎日一時間、本を読む。

『十』… “ ” 十回、声を出して笑う

『百』… “ ” 百回、深呼吸をする。

『千』… “ ” 千文字を書く。

『万』… “ ” 一万歩、歩く。



## 三中第四十三回・四十四回卒業生 平成十九年同窓会報告

三中・44回 石原 敏夫

私たちは、太平洋戦争開戦直後の昭和十七年四月に入  
学し、四年生の夏、終戦を迎え、翌年と翌々年に分かれ  
て卒業した仲間である。まさに太平洋戦争の申し子とも  
言える同窓生である。

同窓会では、三中校歌を斉唱するが、その都度、必ず  
といってよいほど琴弾山の松籟に包まれた気がする。あ  
の日は、毎月八日の大詔奉戴日だったか、十二月八日の  
開戦記念日だったと思う。全校生徒が、戦勝と出征兵士  
の武運長久を祈願して琴弾八幡宮に詣でた。石段を登り、  
隊列を整え、威儀を正して神前に額ずいたとき、汗ばん  
だ頬をなでる松風と全山から湧き起こる松の枝葉のざわ  
めきに包まれ、言い知れぬ感動に襲われた。あのとときの

光景がよみがえってくるのである。

同窓会が発足したのは約四十年ほど前に遡る。発足当  
初は、三豊・観音寺地区を三ブロックに分け、各ブロッ  
クが輪番で世話役となつて断続的に開催していた。その  
後、還暦を過ぎた頃から同窓生への思いと会への期待が  
高まつてきた。一方、ブロック輪番制では、運営上、い  
ろいろと支障を生じることがあつた。そこで、新しい世  
紀を迎えたのを機に、平成十三年より毎年一回の開催と  
し、期日についても覚えやすい「一月十一日、十一時よ  
り」に改めた。以来、本年まで続いている。これは、幹  
事役をお願いしている相馬繁一氏、島田重太郎氏（平成  
十六年逝去）、宮尾正樹氏、秋山 照氏、和田正雄氏のこ  
尽力によるものである。御礼を申し上げたい。

今後の在り方については、正式に話し合つてはいない  
が「可能な限り継続していきたい」というのが大多数の  
会員の意向ではないかと思つている。

さて、本年の同窓会は次の要領で開催した。

一日時	平成十九年一月十一日(木)
二会場	十一時より 観音寺グランドホテル
三日程	受付 記念写真撮影 開会 物故者への黙禱(物故者七十二名) 世話人代表あいさつ 校歌斉唱 懇親 閉会 本年のスタッフ
(一)	受付
(二)	プロック世話人
(三)	世話人代表 相馬 繁一
(四)	司会・進行 宮尾 正樹
(五)	庶務 和田 正雄
(六)	秋山 恭夫
	秋山 照
	久保 豊
	阿野 勲
	歌唱担当

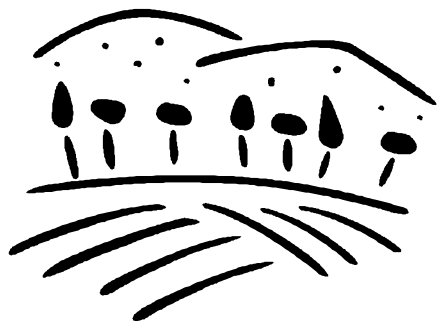
三十四名の有志が集い、互いに、今日ここで再会できた幸せを喜び合い楽しいひとときを過ごした。参加者は、香川県内在住者が大半を占めるが、今回は、県外から、穴吹義教・石山良一・加島正美・曾根正行の四氏の参加を得て、会はずまず盛り上がった。数年前には、北海道稚内市から池田光男氏がわざわざ帰郷され、一同大いに感激し、話が弾んだことが心に残っている。

懇親の場では、心おきなく話し合うとともに、少々アルコールも入ると興に乗って日頃磨いた美声を披露し合う仲間もいた。一方、別のテーブルでは、貴重な戦中・戦後体験をもつ私たちは、今、何を為すべきかを真剣に論じ合っている仲間もいた。

こうした盛り上がりの中で予定の時刻を迎え、来年月十一日十一時の再会を祈念し合いながらお開きにした。



旧制三豊中学校第43回・44回卒業生同窓会 H.19.1.11 於 観音寺グランドホテル



## 喜寿を祝う同窓会

「はるけくも来たるものかな、

そしてこれからも……」

三中・45回 小野 賢治

三 中 第 四 十 五 回 卒 業 生 平 成 十 八 年 度 例 会 報 告

我々三 中 第 四 十 五 回 生 の 同 窓 会 も 回 を 重 ね て 今 年 は 三 十 七 回 に な る 。 よ く も ま あ こ れ ほど 続 いた も の だ と 思 っ っ 。 そ の い き さ つ に つ い て は 、 一 昨 年 平 成 十 七 年 発 行 の 「 巨 龍 第 九 号 」 所 載 の 「 三 十 四 の 軌 跡 を 回 想 す る 同 窓 会 」 で 詳 し く 述 べ て あ る 。 今 年 は 表 題 の よ う な タ イ ト ル で 三 十 七 回 目 の 同 窓 会 を 開 催 し 、 長 く 続 いた 我 々 の 同 窓 会 に 終 止 符 を 打 つ こ と と し た 。

発 送 し た 案 内 状 の 文 言 は 次 の よ う な も の で あ っ た 。

朝 夕 は し の ぎ や す い 秋 冷 の 季 節 に な り ま し た 。 諸 兄 に

は 如 何 お 過 ぎ し て ご ざ い ま し ゃ う か 。 こ こ に 平 成 十 八 年 度 の 同 窓 会 の ご 案 内 を 申 し 上 げ ま す 。

昭 和 の 初 期 に 生 を 受 け て こ の か た 、 我 々 も 喜 寿 を 迎 え る 歳 に な り ま し た 。 動 乱 と 変 動 の 来 し 方 を 思 い 、 こ れ か ら の 行 く 末 を い つ ま で も 、 な お い つ そ う 元 気 で 過 ぎ し た い と い う 意 気 込 み を こ め て 、 「 は る け く も 来 た る も の かな 、 そ し て こ れ か ら も ……」 と い う サ ブ タ イ ト ル に い た し ま し た 。

な お 、 昨 年 の 同 窓 会 で 出 席 者 諸 兄 の ご 了 解 を 得 ま し て 我 々 の 同 窓 会 も 、 今 年 三 十 七 回 目 に 当 た る 「 喜 寿 を 祝 う 同 窓 会 」 を も っ て 終 焉 と さ せ て い た だ き ま す 。 今 後 は そ れ ぞ れ の グ ル ー プ の ミ ニ 同 窓 会 に バ ト ン タ ッ チ を し て 発 展 的 解 消 と い う こ と に な り ま す 。 長 い 年 月 に わ た っ て ご 協 力 を た ま わ り ま し た 諸 兄 に 対 し 幹 事 一 同 あ つ く 感 謝 申 し 上 げ ま す 。

昨 年 の 同 窓 会 に 元 気 で 出 席 さ れ て 、 我 々 一 同 で 米 寿 を お 祝 い 申 し 上 げ た ば かり の 恩 師 の 井 澤 先 生 が 去 る 五 月 二

十二日に急逝されました。まさに晴天の霹靂でござい  
ました。三中四十五回卒業生一同ここに謹んで故井澤滋先  
生のご冥福をお祈り申し上げる次第です。

下記の要領で今年の同窓会を実施いたします。名残を  
惜しむ意味もこめて、例年にまさる多数の諸兄のご出席  
をお待ちしております。

以上のような呼びかけをしたところ四十三名もの出席  
があった。なかでも、在米の米谷隆君（ペンシルベニヤ  
大教授）が前回の出席から十二年振りで出席してくれた  
のは特筆すべきことであつた。昨年逝去なさつた井澤滋  
先生をはじめとして、これまでに物故された同窓生に黙  
禱を捧げてから今年の同窓会の開会となつた。日程は次  
のようなものであつた。

一日時 平成十八年十一月五日（日）十六時より

十六時 受付 ロビーで随時懇談

十七時 懇親会

二 場所 琴弾荘（観音寺市有明町）

三 ゴルフコンペ（希望者のみ）

日時 平成十八年十一月六日（月）八時より

場所 詫間カントリークラブ（三豊市詫間町）

幹事の片岡敬典君から歓迎の挨拶があり、その中で  
我々の同窓会も今年で一応の終焉とする旨を伝えて、こ  
れまで永年にわたつてご協力をいただいた同窓諸兄にあ  
らためてあつく感謝を申し上げた。

京阪神地区を代表して高橋寛君が近況報告や、毎年六  
月に開催している京阪神地区の三二同窓会の予定と参加  
のお誘いの話をされた。京阪神の諸兄は我々の同窓会に  
はたいへん熱心に協力をたまわり、最初の頃からずっと  
同窓会開催の大きな推進力になっていただいた。深く感  
謝申し上げる。京阪神からの今年の出席者は、阿守正司、  
清水文夫、白川俊郎、鈴木知津雄、田中恒俊、高橋寛、  
徳重里司、原田正徳、森岡敦雄、以上九名（敬称略）の

諸兄であつた。また、愛知県日進市から今年も森俊人君が参加をしていただいた。

関東地区から出席された真鍋久勝君が挨拶に立つて、東京地区の現況報告と三三同窓会の開催状況について報告をしていただいた。真鍋君に続いて遠来の米谷隆君からアメリカにおける近況や井澤先生の思い出などについて話をされた。米谷君は平成七年の阪神・淡路大震災の年の同窓会以来久し振りの出席で、懐かしさもまたひとしおであつた。

最後に松繁壽義君から挨拶があつた。松繁君は観一同窓会本部の会長としてずっと苦勞をされているのであるが、本部の現況や会長として出席した東京、大阪をはじめ各支部の近況についても報告をされ、そして観一同窓会の運営について、我々第四十五回生から頂戴したご協力に対してあつくお礼を申し上げると挨拶を締めくくられた。我々の代表として同窓会長という重責を果たされていることは我々の誇りであり、永年にわたりご苦

勞様と申し上げたい。

懇親会の開宴の発声は大喜多良夫君にお願いをした。大喜多君は三本松にお住まいのお医者さんで、同窓会への出席はずいぶんと久し振りのことであつた。彼のひょうひょうとした雰囲気は昔ながらのもので、和やかな同窓会に花を添えていただいたようであつた。

このようにして始まった懇親会は、いつものように賑やかな歓談の輪が広がつた。口には出さなかつたがこれでおしまいなのだという気持ちは何処となく感じられて、名残を惜しむ風情がただよう雰囲気であつた。

今年の同窓会には一つの大きな贈り物があつた。それは井下泰介君から篆刻の色紙シシヨクが出席者全員に寄贈されたことである。井下君は人ぞ知る篆刻の大家で、彼が心をこめて刻んだ三中の校訓がそれである。赤い字で三中の校訓「至誠」、「進取」、「剛健」を篆刻で刻み、その下に黒字に白抜きで「香川県立三豊中学校校訓」と彫りぬいた力作である。三中の古い伝統をこよなく愛する井下君



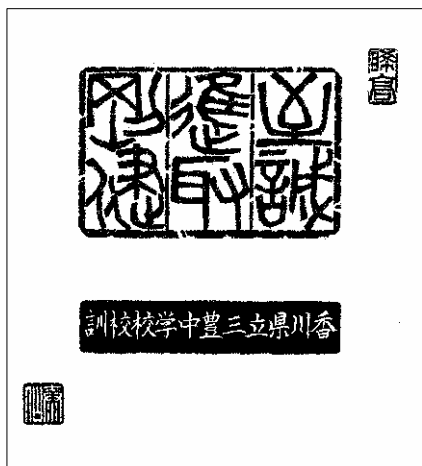
の作品だけに、我々の心に響く作品である。校訓の色紙とともに寄贈された他の作品も同封して出席の諸兄にお配りをした。我々の魂のふる里「校訓」で我々の同窓会の締めくくりをすることができたことは、何かしら運命的なものを感じたことであつた。あらためてここに井下君に対してあつくお礼を申し上げる。

我々が三中に入学した頃の校庭朝礼を覚えておいでであるうか。五年生の全校週番が朝礼台の上にながらうて号令をかけ、校訓を大声で唱えたものであつた。「校訓斉唱一つ」「至誠」「一つ」「進取」「一つ」「剛健」と唱和して三中の一日が始まっていたのである。井下君が校訓の色紙を寄贈してくれたこの機会に、あの三中時代の「校訓斉唱」を再現することとした。号令はスポーツマンだった高橋寛君にお願いして、昔ながらの「校訓斉唱」の雰囲気浸ったのであつた。そしてこの高揚した気分の中で我々のもう一つの魂のふる里「校歌」を斉唱して、若き日の余韻を楽しんだ後お開きとした。校歌斉唱の音

頭はいつものように安藤恒良君に務めていただいた。

昭和十八年に三中に入学して始まった我々の同窓生としての交友は、かくして一応の終焉ということになつたのであるが、「校訓」と「校歌」にはじまって、また「校訓」と「校歌」で締めくくることができたことは、いかにも我々の同窓生を象徴しているようであつたいへん嬉しい限りであつた。これまで三十七回の同窓会を開催して、我々第四十五回生の絆の強さを実感したのであるが、その間同窓生諸兄ならびに幹事諸兄には並々ならぬご協力をいただいた。この諸兄のご協力なしには我々の同窓会は語れないと思うのである。ここに記してあらためてあつくお礼を申し上げる次第である。

「同窓会報告」の寄稿を終えるにあたり一言お礼を申し述べたいと思います。同窓会誌「燧」に始まり、平成九年からは京阪神の同窓会誌「巨龍」の誌上で私たち三第四十五回生の「同窓会報告」を掲載していただきまことにありがとございます。私たちの同窓会活動の記



井下泰介君寄贈の校訓の色紙

録を、いつまでも資料として残しておくことができるとは私たちの無上の喜びとするところであります。合田英之先輩をはじめ「巨龍」の編集委員の皆様にあつくお礼を申し上げます。観一同窓会京阪神支部の隆盛と同窓会誌「巨龍」のますますのご発展を祈り上げます。



三中第45回卒喜寿を祝う同窓会 平成18年11月5日 琴弾荘にて

「燧」「巨龍」寄稿者一覧

三中第45回生関係分

誌名	号数・発行年月	寄稿者一覧	寄稿者
燧	創刊 昭 60/11	40年ぶりの広の町	田中恒俊
	4 昭 63/10	40年ぶり呉で邂逅・45回生が学徒動員の地で	佐長 緑
		私のサヌキうどん展 三中45回生阪神地区同窓会回想	守谷英隆 玉井利昭
	5 平 1/10	京都山科への誘い	高橋 治
		観音寺第一高等学校この一年	小野賢治
	6 平 2/10	観一精神の高揚を	小野賢治
		小野校長を囲み鴨川畔で冬の京情緒を楽しむ	佐長 緑
	7 平 3/10	京都養源院にて	高橋 治
		還暦を祝う同窓会・神戸に24名が集い痛飲	佐長 緑
	8 平 4/10	接吻とは	高橋 治
		佐長君に捧げる鎮魂 三中45回生京阪神同窓会	田中恒俊 高橋 治
9 平 5/10	洛北・雲ヶ畑へ	高橋 治	
	神代、昔、昨日、そして今日 45回生阪神同窓会100万ドルの夜景を楽しむ	多田通夫 田中恒俊	
10 平 6/10	第二の故郷・高松	多田通夫	
	ふりむけば史跡“京都元六条御所との出会い”	高橋 治	
11 平 7/10	阪神大震災西宮での体験記	財田志幸	
	三豊中学45回卒業生京都に集う	阿守正司	
	同窓会の報告・三中45回	田中 怜	
巨龍	創刊 平 9/10	トマト「桃太郎」の誕生 男女合同で2回目	高橋 治 田中 怜
	2 平 10/10	50年夢の如く	高橋 治
		三中45回生京阪神同窓会	田中恒俊
	3 平 11/10	「良寛さま」を上梓して	高橋 治
		長瀾寄する50年	小野賢治
	4 平 12/10	私の三中時代	高橋 治
		シルクロードの旅 2000年に古希を迎えて	高橋 治 白川俊郎
	5 平 13/10	100周年記念を終えて	松繁壽義
		100年の思いを抱き、いざ未来へ	小野賢治
		西城の旅	高橋 治
		古希を祝う同窓会 新緑の信貴山に集う	小野賢治 阿守正司
6 平 14/10	曾良の足跡・沓岐	高橋 治	
	温故知新	安藤俊一	
	21世紀幕開けの同窓会 青葉茂れる笠置山に集う	小野賢治 田中恒俊	
7 平 15/10	一寸の光陰	高橋 治	
	琴弾八幡のお祭りを懐かしむ同窓会	小野賢治	
	三中45回生京阪神同窓会の記	玉井利昭	
8 平 16/10	瀬戸内海ジクザクの船旅	高橋 治	
	三中入学60周年の同窓会・いま校訓を考える	小野賢治	
9 平 17/10	世界遺産の高野山に集う	田中恒俊	
	「34の軌跡」を回想する同窓会	小野賢治	
10 平 18/10	平和の福音・宗教家の立場より平和について	中本仁一	
	恩師井澤滋先生追悼の辞（付経歴）	松繁壽義	
	学徒動員から60年目の同窓会 はるかなり「ああ紅の血は燃ゆる」	小野賢治	
11 平 19/10	喜寿を祝う同窓会 「はるけくも 来たるものかな、 そしてこれからも……」	小野賢治	

印は同窓会報告を示します。

上記の寄稿者一覧については、阿守正司君、高橋寛君にお世話を頂きました。



## 三女三十六回卒同窓会

三女・36回 宇都宮静子

日時 平成十八年十一月十七日(土)  
場所 岡山県倉敷市  
鷺羽ハイランドホテル  
出席者 十七名

紅葉の美しい季節に、岡山児島において三女三十六回卒の同窓会が開催されました。

阪神地区より参加いたしました私達三名(鈴木、西興、宇都宮)は、十七日朝、新大阪駅より岡山へ、そして児島駅にて当日参加の皆様と合流し、鷺羽ハイランドホテルへと参りました。

前日より児島へお越しの皆様は、十六日に後樂園やチ

ボリ公園にも行かれ、夜はホテルにて楽しいひと時を過ごされ、当日、私達を出迎えて下さいました。

全員が揃ったのホテルでの昼食会は、大変なごやかな雰囲気の中で行なわれました。

昼食後は、皆で児島観光港より遊覧船に乗って海から瀬戸大橋を観光した後、児島駅にて解散となりました。

後日、幹事の森本様より当日の写真集をお送りいただきました。その中に同窓会に参加された方からの便りが紹介されていきましたのでその一部をここに掲載させていただきます。

「こちらに出て来て初めての同窓会参加で、皆様のお顔も忘れてしまつてうるたえてしまい、大変失礼致しました。子供の頃、観音寺の港から鷺羽山へ船で行った事があつて、うる覚えの中、なつかしかったです。主人も岡山の人で、なつかしかったのか付いて行くといつので、参加させて頂き、喜んでおりました。」

「岡山の名所をあちこちと巡り、今も情景が目に残つ

ています。天候にも恵まれ、楽しかったです。これが最後かと思うと淋しくなりますが、又何か機会を作ってお逢いいたしましょう。」

「十七日はとてもいいお天気に恵まれ、幸せでしたね。一年ぶりにお逢いして、とても楽しい一時を過ごすことが出来ました。お料理の味も上品で、どれも美味しく味わせていただきました。皆さん喜ばれたことと思います。」

大変残念なことではありますが、昨年の観音寺での同窓会で決まりましたように、今回が三女三十六回卒の最後の同窓会となりました。

皆様のご多幸をお祈りしながら、最後の同窓会の報告の幕を下ろさせていただきます。



## 三女三十九回・四十回卒

### 白杵での同窓会

三女・39回 安藤ふみ子

日時 平成十九年六月三十日・七月一日

場所 大分県白杵市 ホテル「久楽」

(白杵市南海添一組「宝蓮寺」集合)

出席者 十三名

(東京四名、大阪七名、四国一名、白杵一名)

梅雨も終りとして大雨を心配したが、天気にも恵まれ、海も山も美しい白杵に集った。風も心地好かった。白杵にお住まいの佐藤美恵子さんは宝蓮寺の坊守りさんで、大変な準備をお一人でなさり私共を迎えて下さった。御家族揃っての御歓迎に感謝。一同宝蓮寺さんに集合し

色々御馳走になり、本堂にお参りの後、寺庭にて写真撮影。後バスにてホテル「久楽」へ。同じ村であり乍ら卒業以来初めてお逢いする、安藤達子さんとは抱き合って喜んだ。久々振りの人も多く好い雰囲気の間となる。様々な事で迷いつつの出席であったが、子供の様に再会を喜んだ。会場のホテルは古くて立派な建物、静かな入江にあつて美しい海岸、島々も見え、夕べと朝の海を満喫した。

同窓会には夕食の山海の珍味に舌鼓を打ちつつ観音寺市のビデオを見つつ、又話に花が咲いて、時を忘れて盛上った。特に畑晃子さんは話上手で特に軽妙な料理解説は楽しく座を盛上げ、又締めてもくれた。翌朝の海は心地よくホテルの庭で海を見つつ揃って校歌を声高らかに合唱・海辺に下りて記念に石を拾った。

十時より白杵石仏観光・御案内の佐世弘重先生の解説にて、素晴らしい石仏にお逢いした。大勢の石の仏様の歴史に自然の偉大さ、大きさを思った。昼食には名物の

「蓮御膳」を美味しく頂いた。御当地の珍しい料理の数々も。此處「うさみ観光センター」では蓮の実の甘納豆、かぼす羊かん等の土産を買った。三時過ぎ解散。東京組は黒川温泉へ。大阪組は市内観光、等と。臼杵は城下町であり、古く大きな寺々の寺町通りを隅々まで巡って案内して頂き、又文学者野上弥生子文学記念館、酒造業の生家などを訪ひ、三時半に臼杵の町に名残惜しんだ。素晴らしい同窓会の旅であった。





## 二八会十四回一泊旅行記

観一・4回 横山 計次

今年は、平成十九年六月三日(日)～四日(月)、奈良(薬師寺・唐招提寺・奈良まち散策)に決定した行程の案内状が三宅会長名で送られて来ました。

この二八会一泊旅行は、第一回は平成六年に還暦を祈願して伊勢神宮参拝を皮切りに、現在第十四回平成十九年奈良一泊旅行と続いている由緒ある行事の一つであります。今回の場所の決定と、その内容につきましては、石川良夫君を中心に関西地区の者達が数度の打合せと現地調査を重ねて決定したものです。当日が近づくにつれて天候が気になりましたが、幸なことに旅行当日は晴天に恵まれ安堵いたしました。

我々京阪神地区の者達は、新大阪駅で観音寺からのバ

ス組と新幹線組の人達を出迎え、男性二十五名と女性十七名、総勢四十二名で午前十一時にバスに乗り込み目的地の奈良へと出発いたしました。

奈良に到着後、門前にある「萬京」で昼食をとり、その後、薬師寺参拝、法話、平山郁夫の大唐西域壁画の見学と進んだのち、写経組と唐招提寺見学組の二組に分かれることになりました。唐招提寺見学組は大変な賑わいであつたようですが、小生は写経組であつたため、本稿では写経についてのみ感想を後述させていただきます。

今回の旅行で特筆すべきことと三点

その一、食事がすばらしかったこと

特に春日ホテルの会席料理は淡味で京風。量もほどほどで古都にふさわしいものと感じました。朝食も茶粥などもあり心のこもったものを感じました。

その二、美しい花に恵まれたこと

よしきえん  
(1) 吉城園のつつじの見学

(2) 靈山寺のバラ園の見学  
れいざんじ

(3) 牡丹の花（二八会の女性達）とのかたらい

その三、写経で心に残ったこと

般若心経二百七十六文字のうち、今回写経をしていて、

特に私の心に残ったものは左記の十二文字でした。

『心無<sub>しんむ</sub>礙<sub>いげ</sub> 無<sub>む</sub>礙<sub>いげ</sub> 故<sub>こ</sub> 無<sub>む</sub>有<sub>う</sub>恐<sub>おそ</sub>怖<sub>ふ</sub>』

帰宅したのちこの意味するところを調べてみました。

しかし、「心を覆うものがないから、恐れがない」という程度しかわからず、そこで私なりに次のように解釈することにしました。

私は毎日橋本C C で三〜四時間ゴルフの練習をしています。この三〜四時間はアツという間に過ぎ去ってしまいます。そしてその後は、爽やかな気分になります。

このように一生懸命になってささやかな欲望を満足させることができる状況もまた『心無<sub>しんむ</sub>礙<sub>いげ</sub>』なのか、と感じている次第です。心を覆うものがなくなると眠くなってきたようですのでこのあたりで失礼いたします。



二八会第 14 回一泊旅行 奈良旅行（春日ホテル） 平成 19 年 6 月 3 日  
（観一 4 回卒）

## 亥の子会 近江に春を惜しむ

観一・5回 三崎雄一郎

亥の子会も今年で六回目となると同期生の多くが出会  
うと直ぐに心安く談笑するため、十二時には早くも中締  
めの時の賑わい。ロビーから無理やり外に出てもらって、  
湖水を前にした庭園で写真撮影を和氣藹々のうちに済ま  
せる。

桜散りそむる四月十四日、我が亥の子会は琵琶湖畔、  
西大津の旅亭紅葉で第六回目の例会を催した。

「湖水朦朧として春を惜しむに便りあり」と去来抄に  
あるが、当日は前夜の雨が上つて比叡、比良の山並みは  
緑鮮やかに、振向くと東の近江富士が間近に見え、しか  
も湖水朦朧として舞台は完璧。

昨年岡山区が亥の子会の仲間入りし今年中京地区初  
参加、因つて亥の子会の実態は「中京岡山区阪神観一五  
期生の会」名簿では百人を超す大所帯である。中谷明美、  
曾根節子両女史にお手伝い頂き、幹事の西山千恵子さん  
が受付の準備を始めた十時過ぎより続々と同期生が集ま  
り予定の十二時迄に申込者三十九名が揃つた。

懇親会は「比叡の間」で滋賀を熟知した高橋啓君の司  
会が始まつた。亥の子会名付けの親で会長の福田定秋君  
が直前に頸椎の痛みで欠席となつた為、大平俊平君が代  
理で挨拶をした。彼は長らく途絶えていたこの同期会を  
再び立ち上げた一番の功労者でもある。恒例の遠来者に  
よる乾杯の発声は、今回初参加の中京地区から五期生の  
ヒーロー名古屋在住の大矢根博臣君（第二回にオープン  
参加）彼のもとに一同唱和。

例年福田君が持参する瓢酒、今年は頂けないと思つて  
いたらよくしたもので長船正君が代りを持参していた。  
飲み易くてのど越しが良い、来年もよろしく。各テーブ  
ル賑やかに、孫の話が多いのは女性達、男は遊びの話と

生臭い話、未だ枯れてない。なかには「君は私の憧れの君。試合には必ず応援に行つたわ」彼とのツーショットに微笑む人。

亥の子会も回を重ねる毎に常日頃付き合つている人達も多早くも散会後の相談をするやら、次の日曜はとか忙しい限りである。なかでもあるクラスでは、仲よし旅行で前日京都に一泊今日は揃つて会場に来たとか、こんな風に会を利用してもらうと幹事冥利に尽きると最高の気持ちになる。是非、他のクラスも続いて欲しい。懇親会では偏に、賑やかに楽しく寛いで貰おうと、今年は敢えて趣向を凝らさず、その為些かメリハリに欠けたことは否めない、次回の課題かも。その中で、お土産に用意した季節外れの「亥の子餅」意外と好評で苦労して探した甲斐があつたようだ。

楽しい時間は瞬く間に過ぎ、司会者が来年の幹事は兵庫県勢と発表。石川八千代さん、岸井玉枝さんを中心によろしくと言つ事では校歌(三中)斉唱、岡山から

参加の岩田正君の元野球部主将らしからぬ飄々とした中締めの後解散。

ロビーで話の続きをする人、琵琶湖をバックに写真を撮る人、三井寺まで散策するグループ、石山寺、義仲寺を訪ねる詩人、歌人。名残の桜を求め湖北の海津大崎まで足を延ばされる方々も。

芭蕉曰く、「古人も此国(近江)に春を愛すること、おさおさ都におとらざる物を」と。今にして尚、真成る哉。

今年海外旅行で欠席される人、調子を崩されて欠席の人明暗分かれた。古希から二年海外旅行も今のうち、来年は楽しかった話を披露して下さい。具合を悪くされている福田君、高橋君、三好君、中西さん、筒井さん、他五期生の方は非来年は元気になった姿を見せて下さい。来年の四月第二土曜日。未だ出席されていない五期生の皆さん、一度参加して下さい。癖になりますよ。

参加者三十九人（オープン参加七人）

秋山 勝美・石川 繁子・石川八千代・石村 伸子  
大西佐恵子・神谷 繁子・岸井 玉枝・合田 房子  
坂田きよこ・白川 裕子・曾根 節子・鳥取 和子  
平井 節子・福田 幸子・中谷 明美・西山千恵子  
松永 妙子・森口 郁子・盛山多枝子・山地 佳子  
和田 昌子・渡辺 良子・岩田 正・大平 俊平  
太田 義男・大西 章照・大矢根博臣・荻田 圭二  
長船 正・高橋 啓・谷井 正弘・玉井 徹  
床田 弘幸・平山 武・藤村 喜系・牧野 孝明  
三崎雄一郎・守谷 弘・矢野 勲（敬称略）



## 平成十九年関西観八会総会報告

水郷と古き商家の町並の近江八幡にて

観一・8回 関西観八会世話人一同

今年二月上旬

『我々観八会の仲間はこの四月で「卒業五十周年」を迎え、平成二十一年には「古希」の祝いを迎えます。還暦までは厄落としてでしたが、これからは喜寿、米寿、白寿とお祝いが巡ってきます。このようなお祝いの第一弾として、平成十九年度の総会は「卒業五十周年」の祝いを兼ね一泊旅行「水郷と古き商家の町並の近江八幡を楽しむ関西観八会」を計画致しました。』

の内容で九十四名の会員に案内状を発送しました。

果たして何人参加してくれるか心配でしたが、案内の趣旨が通じ三十二名の方から出席の返事を頂きました。

なかでも関東より益子節子さん、片山美千代さん、郷里香川から小笠原晶子さん、早川登美子さん、そして高橋昭成君が駆けつけるとの嬉しい連絡を頂きました。

総会のスケジュールは

場所：近江八幡 ウェルサンピア滋賀

行程：四月十二日（木）総会・懇親会（集合十六時）

十三日（金）水郷めぐり・昼食・町並散策

としましたが、せっかくの近江路の旅を活用してオプショナルで女性の大半とエスコート役の男性は、十二日朝早くから彦根城に行き満開の桜の「国宝・彦根城築城四百年祭」を見学しました。

懇親会は永田寛会長の挨拶、高橋君の乾杯の発声で始まり、還暦以来毎年会合を重ねているものの「何十年ぶりの再会」といった参加者もいて、旧交を改めるシーンが各所で見受けられました。

座は佳境に入り、その中でも今年の三月に川原重子さんがZERO展に出展した作品が「文部科学大臣賞」を

受賞したことを紹介され、それを皮切りに各人の近況報告に移り、みなさん熱心に拝聴しているうちに場面は二次会へと転じていきました。カラオケにおしゃべりとお決まりのコースで時の経つのも忘れ「今のこの時」を存分に楽しんだことと思います。

翌十三日は行事のメインである水郷めぐりに出かけました。この「近江八幡の水郷」は国の重要な文化的景観の第一号でもあります。四艘の手こぎ舟に分乗しヨシの群生地の間をゆつくりと進み、その水路の右手の堤には満開の桜並木が、左手には色鮮やかな菜の花畑が広がるのかな春の景色を心ゆくまで楽しんだ船旅でした。

下船後は近江八幡の町並み、開祖・豊臣秀次が築いた八幡城を囲む八幡堀周辺を色々なグループを作りながら満開の桜の中を散策し、日牟礼神社の近くでは多くの会員が「たねや」の饅頭・ケーキを買って求めています。

昼食は大岡暉子さんの発声の音頭で始まり、そして今年度観一同窓会京阪神支部の副会長に推薦を受けた脇剛

司君の締め挨拶で、再会を楽しみに一泊二日の行事を終えました。解散のあとは三々五々にJR近江八幡駅までの古き商家たたくまいの見学や湖産物などの土産の買い物をしながら帰路につきました。

なお、今回の総会のお世話には畠中康行君、田中雅子さん、そして滋賀県での開催ということで地元の木下雅道君・田尾和夫君にご協力いただきました。

今年の総会は以上の通りですが、後日いただいた会員からのお礼・感想の一部をご紹介します。

「今回もお世話頂き有難うございます。彦根城の桜は大変美しく美しく心を和ませてくれ、又水郷めぐりは桜に菜の花、ヨシが風情をそえてくれ桃源郷の心地でした。

私の記憶の中での花見の圧巻でした」 森敏美さん

「関西観八会では大変お世話になりました。とつても楽しい旅行でした。彦根城と近江八幡の桜が見事でした。

もう東京は葉桜になっていました。旅行中は色々と気を

遣つて下さり世話人の皆様に感謝します 益子節子さん

さまさまのこと思い出す 桜かな

芭蕉



平成 19 年 4 月 12・13 日  
平成 19 年度関西観八会総会  
於 近江八幡 ウエルサンピア滋賀にて

片山美千代 早川登美子  
滝本豊子 小笠原晶子  
中西小彌太 高橋昭成  
脇 剛司 西谷美津留  
薦田勝一 小山修三 田中雅子  
横田幸祐  
木下雅道 濱田和代  
斉藤 博 大岡暉子  
石村義光 田尾和夫  
元木芳孝 泉 妙子  
永田 寛  
川邊敬祐 小林正達 北村春代  
安藤 進 三宅順二郎 森 敏美  
島中康行 川原重子 益子節子  
矢野一之



## 観一第九回（昭和三十三年卒）同窓会

八月一日、琴参閣に集う

観一・9回 西庄 俊二

観一・第九回卒同窓会が、今年も八月一日、郷里の香川県琴平町、琴参閣で開催された。卒年に因み、観一・三三会と命名され毎年八月一日琴参閣で開催することが決まっている。今年も三三卒業生、三百八十八名に案内状を送付し約六十名が参加した。三三卒が還暦の年からはじまり今年で七回目になる。毎回ながら世話役をつとめてくれる、高嶋睦徳君、菅美枝子さんほか、幹事の皆様の並々ならぬ努力に頭がさがる思いである。加えて、格安料金で利用させてくれる琴参閣社長の高木真作君にも感謝する。

当日は午後六時に懇親会の開始であるが、昼間はゴルフ

フ愛好者によるゴルフコンペが琴平カントリークラブで行われ、炎熱のもと、年令にめげず熱戦を展開した。

懇親会はプログラムどおり午後六時より真鍋國六君の講演から始まる。黙禱、校歌斉唱、大西照一君の黄綬褒章受賞の披露と進み、観一京阪神支部長、守谷公男君の音頭で乾杯。会食、歓談が続く中、岡下信子衆議院議員の国会報告が行なわれた。スピーチは国会報告よりも、議員になるまでの経緯を語られたが、さすがに当選を重ねると風格が増し、堂々たるもので同窓として頼母しい限りだった。宴は続き、ゴルフ表彰、歌姫こと蒲地幸代さんのリードで「高校三年生」「青い山脈」など全員で合唱。大いに盛り上がり、午後九時三十分、来年の再会を誓い、閉会した。二次会は宿泊者のほとんどがカラオケに参加。これも夜更けまで盛りあがった。

観一 3・3会 同窓会 プログラム

平成 18 年 8 月 1 日

受付開始 16 時 30 分～

総合司会 大西 敏章 菅 美枝子 18 時 00 分～

・講演 『地域の活性化について・先人及び地元資産から学ぶ』

元 銀行員 (百十四銀行) 全国まなべ会幹事 真鍋 國六 18 時 00 分～18 時 20 分

- ・同窓会
- |                    |           |       |                     |
|--------------------|-----------|-------|---------------------|
| 1、集合写真撮影           | ・ ・ ・ ・ ・ | 荻田 泰介 | 18 時 20 分           |
| 2、物故者へ黙祷、伝達事項等     | ・ ・ ・ ・ ・ |       | 18 時 25 分           |
| 3、校歌斉唱             | ・ ・ ・ ・ ・ | 大山 皓  | 18 時 30 分           |
| 4、黄綬褒章受賞について       | ・ ・ ・     | 大西 照一 | 18 時 45 分           |
| 5、乾杯               | ・ ・ ・ ・ ・ | 守谷 公男 | 19 時 00 分<br>会食・歓談  |
| 6、国会報告             | ・ ・ ・ ・ ・ | 岡下 信子 | 19 時 15 分           |
| 7、ゴルフ表彰            | ・ ・ ・ ・ ・ | 大西 照一 | 19 時 25 分～<br>会食・歓談 |
| 8、歌 (高校三年生、青い山脈 等) |           | 蒲地 幸代 | 19 時 35 分           |
| 9、漫談               | ・ ・ ・ ・ ・ | 秋山 光弘 | 20 時 00 分<br>会食・歓談  |
| 10、カラオケなど          | ・ ・ ・ ・ ・ | 秋山 光弘 |                     |
| 11、閉会・中締め          | ・ ・ ・ ・ ・ | 安藤 政弘 | 21 時 30 分           |

・二次会・・・ホテル内のカラオケルーム『<sup>はなしぐれ</sup>華時雨』に集合 21 時 30 分より

◆◆ 今回も 池澤 正君の絵画 を展示しております ◆◆



観一燦々(33)会(第9回)同窓会 H18.8.1 於 琴参閣

高嶋 睦徳、合田 房雄、 宮崎 稔、 開田 博司、合田 習一、豊浦 秀夫、安藤十三男、大西 照一、

大山 皓、佐藤 安行、真鍋 国六、川原 和明、諸川 雄三、中川 勲、久保 一生、大西 勝、久保 恭宏、白川 興一、石部 勝、荻田 泰助、

合田 繁、 池澤 正、藤田 喬久、富田 哲彰、井下 愛子、岡下 信子、高橋 進、三好 勲、筒井 博、大西 敏博、

紀伊 弘子、佐藤威智夫、田中 頼彦、 安藤 政弘、西庄 俊三、大西 敏章、守谷 公男、大木 敏央、秋山 光弘、塩田 益稔、加地 淑久、高木 真作、

三谷 史子、荻田 淳子、正 登美子、松本 滋美、大西 公子、中原 玲子、三宅 須子、友枝フシ子、福田乃武子、石川栄美子、菅 美枝子、石川 洵子、滿地 幸代、黒田 和子

## 五年ぶりの十回生の同窓会

観一・10回 竹崎 勝美

これ迄（平成十四年迄）は二年毎におこなっていましたが、同級生の長野校長先生やその他複数人が急逝したこともあり、「ご冥福を祈ろう」ということになり同窓会を止めていました。

もうそろそろやっても良いかな？という時に、昨年はお世話して下さっている三宅様の会社のことや京阪神支部の総会の当番学年になり出来ませんでした。毎年の如く同級生からやって欲しいという声があがっていました。が、やっと十回だけの同窓会に漕ぎつけました。

平成十九年四月十四日（土）十七時三十分 ホテル阪神エメラルドルームに於いて五年ぶりの同窓会を開催いたしました。いつもより少ない出席者でした。出席者は

二十六人（男性十五・女性十一）。いつもは四十人位集まるのですが、前日大野原の中学校の同窓会があり、幹事当番学年のため、大勢がそちらの方に行ってしまった。同窓会が続くということで、十回の同窓会には出てもらえなくて淋しい人数になってしまいました。

五年ぶりの同窓会。皆五歳年を重ねているけど、久しぶりということで話は弾みましたが：・名前が出てこなくてお互い困る一幕もありました。話しているうちに、高校時代コーラス部だったという人が十人も出席しています、コーラス部の時の思い出や恩師吉田先生の話になりました。十何年前に一度囲む会でお会いしたけど：・という人が多い中、私は毎年先生とオペラを一緒に一緒に暮らしているの、私が先生に連絡して皆でお会いしたい旨を伝えました。十回の同窓会中、急に決まったコーラス部の吉田先生を囲む会、開催準備中です。部の皆が、秋が良いということで、京都で。しかし、秋は、京都はシーズンで、会場を取るのに一苦労がありそうです。

大体業者が一年前から取っている中なので、今から囲む会がどうなるか心配ですが：：クラブ以外の人には悪いけど、うまく運んで楽しい会になって欲しいのが本音です。

あと二次会は同じホテルの中で会場を変えて行いました。出席者は二十一（男性十三・女性八）で十時前までカラオケや歓談で盛り上がりました。

皆六十五歳以上になり、会員が元気な間に同窓会をすれば良いのですが：：今度は何時かな？又、元に戻って二年に一度の同窓会を開いてくれたら、良いなあと思っているのは私だけかしら？

かくして平成十九年度の我々の同窓会は終了しました。又元気で再会できる事を願いながら解散しました。



## 観一十五回同窓会

観一・15回 太田 和久

還暦記念の椿山荘での同窓会より早や二年、今回は、大阪より二名、観音寺より一名を含む十六人の参加で同窓会を行いました。

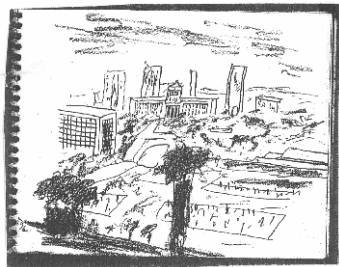
二〇〇七年六月九日土曜十時半、東京駅北口集合の散策組は九人、皇太子殿下御成婚記念公園を経て皇居東御苑へ、御苑の中では、三の丸尚蔵館で「香淳皇后の御絵と画伯たち」の展示を見学し、松の廊下跡等を散策して、丸ビル三十六階のフランス料理店「モナリザ」へと足を運びました。十二時現地到着、現地集合組と合流して開会しました。

三十六階からは、真下に皇居の緑、警視庁、国会議事堂、遠くは新宿の高層ビル群が箱庭のように見えます。

した。残念ながら曇り空で富士山は見えませんでした。一同この景色にまず満足、そして季節の素材を使ったフルコースのフランス料理とオリジナルワインにまた満足致しました。

あつという間の二時間半が過ぎ、続きは予約していた八重洲のカラオケボックスに移り、青春の思い出話や健康対策、近況報告に花を咲かせました。以下は紙上録音。

A君：四十年前同じ青春を過ごし、東京オリンピック、万博、月面着陸を体験しましたが、最近身近で不幸が続く、「散る桜、残る桜も散る桜」の句が思い出され、今後の充実した人生を送るためにも、健康に十分留意



丸ビル会場よりの風景（太田和久 画く）

しましょ。

B君…高校のフォークダンスが楽しかったので、大学でフォークダンス部に入り各種マスターしたのが、社会人となって役立ち、香港でのある大会でリンゴの皮むき競争で優勝し、フォークダンスを企画したら大いに盛り上がりました。国際親善には最高です。

健康面では検査数値が悪いと云われて一念発起ダイエツトに努め、三ヶ月で十三kgやせ、その後維持して、今は健康体になりました。

C君…金沢で（四月に四国、大阪、東京の有志十二人が金沢在住の二人の同窓生の案内で一泊旅行を催した際）今回の同窓会の誘いを受け、丁度出張があり、金沢行き同様チャンスを大事にしないといけないと思つて大阪から参加しました。青春の思い出としては、市長の白川君と下板橋の下宿でオリンピッククを見ました。健康面は毎日一万歩と十三kgのダンベル、腹筋四十回を続けています。

D君…二十七歳で独立したが、高校の先輩同僚には元気をもらい感謝しています。そのお陰で今までやってこれました。十年間プールへ通っていますが、サウナの後にビールを飲むので体重は減りません。

B君…ダイエツトの秘訣は寝る前四時間は何も食べないことで、私は夕食を六時に食べ、その後散歩し、十時に寝る生活を続けています。

Eさん…今日の事すっかり忘れ、明日と勘違いしていました。遅刻してすみません。

最近では地元の奉仕活動に精出しています。

B君…参考までに私は手帳、家のトイレのカレンダー、会社でのメモと三種類で対応しています。

Fさん…しっかりもののEさんでもミスするので安心しました。私は誘いを受ければ、同窓会には出るように心掛け、出雲にも参加しました。好きな事をして、動くことが良いですね。

G君…転勤で福井、福岡、北海道、大阪、東京と渡り

歩きました。目下は夢中になれる好きな事を捜しています。カメラですかね。

H君…瀬戸大橋の建設に携わり、四国のためには良かったと思っています。仕事には誇りを持っていました。昨年軽い脳梗塞を患い手術した後は、体調管理に注意し、毎日血圧を測っています。

A君…血液サラサラには、玉ねぎと黒酢を毎日食するのが良い。私は毎朝採っています。

I君…前回の同窓会は定年直後で、その後の二年間は紆余曲折あったが、ほぼ順調に推移しています。一番の気がかりは健康面で、体質的にコレステロールが高く、飽食の現代ではやっかいです。飢餓には強く、満州から無事引き揚げて来れたのも、体質に関係あるので仕方ないと思っています。今は犬の散歩とスポーツジムで毎日一万歩確保するように努めています。

J君…単身赴任していましたが、自炊とテニスのお陰で元気でした。やっと帰って来ました。同窓会はどこ

でも参加しています。

K君…六人兄弟の末っ子で、兄達も各方面で活躍しているが、次兄は養子に行き、磯野性で教師をしていました。健康面では通勤途中で皇居の周りを歩いていました。

L君…定年後は週三日勤務し、地元の「生きがい大学」に入って、部活では卓球をやって楽しんでます。

Mさん…食生活で偏らぬよう料理しています。どんどん歩くことはいいですね。丸ビルのフランス料理は最高でした。

Nさん…二十年ぶりの参加で不安でしたが、今は参加して本当に良かったと心から思っています。子供たちが巣立った後一時体調を崩し、ようやく立ち直って参加する決心をしました。偶然にも磯野先生は小学校で四年間教えてもらった恩師で、今日はここに居れることに幸せを感じています。

O君…第九でドイツへ二回行き、三年後にももう一度



行きます。健康面では、駅までバスに乗らないで歩くようにし、テニスに励んでいます。

都合で先に帰ったPさんへの電話取材…丁度三十年前から本格的なバトミントンをやっています。今は教える立場ですが、それでも若い者に交じって平均週三日、一日三時間位やっているのでしょうか。

思い出と近況の自己紹介が終わった後は、せっかくのカラオケボックスで歌わない手はないと云う事で、みんなで「高校三年生」を合唱。僕らのフォークダンスの手をとれば、甘く匂うよ、黒髪が…。至福の時でした。

今回は四国、大阪、東京合同の一泊旅行を企画しようと約束し、散会しました。

#### 参加者

男性：三谷利憲（四国より特別参加）大西寛文、

福田有治（大阪より特別参加）、岡根正文、

高橋俊之、筒井重尊、藤田時男、前川敏昭

三好 景、村井寿夫、太田和久

女性：高島（荻田）広代、高橋（川原）道子、

安藤（貞廣）百合美、大西（高橋）喜美子、

清水（矢野）久代





藤田 三谷 太田 前川 大西 村井 高橋 岡根 三好

筒井

福田

大西(高橋)

高橋(川原)

清水(矢野)

高島(荻田)

安藤(貞廣)

## 高校卒業後初めて同窓会に参加

観一・16回 中西 豊

平成十八年八月十三日に観音寺グランドホテルで第十六回(昭和四十年三月卒)卒業生の同窓会が開催されて、私も高校卒業後初めて同窓会に参加させて頂きました。

当時、私たちの同級生は約五百七十名で、クラスは十一組あったと思います。当日の出席者は、約百名で、テーブルは三年のときのクラス単位で設定されていきました。私は三年十一組のテーブルで、参加者は十名でしたが、みんな四十二年ぶりに会った方ばかりでしたのに、ちょっと話をしていたらすぐに昔の面影を思い出しました。途中で、記念写真を撮るために、出身の中学校ごとに集まったら、またなつかしい友人を発見して、そこでも話が弾んでいました。

テーブルがクラス分けされていたせいか、ほとんどの

人は自分の席で歓談されていたようで、どのテーブルも話が盛り上がりつつありました。時々、昔の友人がこちらの席に訪ねてきたり、逆になつかしい友人を見つけてこちらから挨拶に行ったりなどしていたら、すぐに予定の時間が過ぎてしまいました。

五年ほど前に、二年九組のときの同窓会が観音寺であり、私は欠席をしたのですが、連絡先にメールのアドレスを記入していたら、出席者からそのときの報告をメールで頂きました。私も、近況をメールで返信したら、その後メールアドレスのやりとりが続ぎ、段々とメールの参加者が増えて、今ではこのメル友は二十名をこえています。私が、今回の同窓会に出席したのも、このメル友の方たちからの熱心なお誘いや情報をいただいたからです。このメル友の方たちも十名ほど参加されていて、初めて挨拶をさせてもらった方も大勢いました。

二次会は、マイクロバスで、名前は忘れましたが十一号線沿いにあるカラオケへ行つて、皆さんの自慢の声を

聞かせてもらい、私も裕次郎を一曲歌って、当日は大阪から日帰りの予定で行っていたので途中で抜けさせてもらい、友人から自宅で取れたと思われる新鮮な野菜など観音寺の土産も頂いて、メル友の大西和明君と一緒に新幹線で夜、大阪へ帰ってきました。

同窓生の皆さん、またお会いできることを楽しみにしています。幹事をされた皆さん、お世話ありがとうございました。



観音寺第一高等学校第16回（S40年3月卒）卒業生同窓会  
平成18年8月13日 於：観音寺グランドホテル

## 観一高同窓会東京支部『燧』（第32号）ご案内

特集 続「あの日、あの時」

思い出の時期について一枚の写真をまじえながらのエッセイ

△連載特集「先輩こんにちば」▽

玉尾皓平氏（観一12回）を訪ねて

編集担当幹事

△リポート・エッセイ等

仁尾『竜まつり』がNHKホールで上演

仁尾にまつわる あんな話・こんな話

大平総理と現代中国の発展

スロヴェニア旅行記

我ら三中45回生

連載「ちよつと良い話」「新刊の」案内

「問い合わせ先」観一高同窓会東京支部（学苑社内）

電話 〇三（三）三六三（三）三八一七＝学苑社

## あとがき

去る七月四日、十八日の間、十四年振りに来日して我家に滞在したアメリカ在住の末娘一家で、牧師をしている婿が本年二月に西アフリカの小国リベリア訪問をし、その時強いインバクトを受けたのは、十四年間もの内戦で国民は食うや食わずのドン底生活、電気もガス、水道も殆ど壊滅状態で、土埃りの道を旅人は赤道直下の炎熱の下何日も歩き続けて旅をする。彼等の極限に近い耐乏生活、生きて行くためにどんな困難にも耐えて行く精神力の強さ。今物質的な豊かさや平和に長年安住してその有難さのわからぬようになった我々日本人の心情は、二十一世紀の世界にあって今後生き残って行けるかが按じられます。

本年も昨年に引き続いて、「新世紀の希望」特集をし、次代の担手である母校の若者達へ励ましメッセージが多く寄せられました。

支部の大先輩である佐伯富先生と田中照三さんのご逝去は本当に残念です。

今回のエッセイも多彩な内容のものが多く、文芸コーナーの漢詩は作者の高嶋睦徳氏が全日本漢詩連盟会長賞を受け日本一に輝いた作品です。又、日本芸術院会員となられた岩倉寿画伯の御好意による作品、花の絵で本年も表紙を飾ることが出来ました。発刊に際し各地の同窓の方々にもご協力を賜りましたことを心より感謝申し上げます。おわりに今後とも支部と本誌に対して一層のご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

二〇〇七年九月

巨龍編集部